

『大いなる帰滅の物語』(Mahasamvartanikatha) : 第2章4節～第4章1節と並行資料の翻訳研究

岡野, 潔

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門インド哲学史 : 教授 : インド仏教

<https://doi.org/10.15017/3644>

出版情報 : 哲學年報. 63, pp.1-110, 2004-03-05. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

『大いなる帰滅の物語』 (Mahāsaṃvartanīkathā)

第2章4節～第4章1節と並行資料の翻訳研究

岡野 潔

恩師 ハーン先生に

目次

序

第一部 MSKと文献Xの翻訳

第2章第4節 死すべきもの(人間)の出現

第3章第1節 食物の出現

第3章第2節 生計の手段の開始

第3章第3節 階級(ヴァルナ)の分離

第3章第4節 様々な食物の出現

第4章第1節 [生活の資を] 求めることの開始

第二部 並行資料の和訳

創世記神話のインド仏教諸部派の聖典伝承

A パーリ上座部の聖典伝承『アッガンニャ経』

L 犢子正量部の聖典伝承『ローカ・パンニャッティ』

S 根本有部の聖典伝承『破僧事』

M 大衆部説出世部の聖典伝承『マハーヴァストゥ』

附 『マハーヴァストゥ』写本 Sa のローマ字転写

略号

MSK Mahāsaṃvartanīkathā

Loka-p Lokapaññatti

Mvu Mahāvastu

文献X 『有為無為決択』第八章中に引用された書名不明の正量部作品

立世論 立世阿毘曇論(大正 No. 1644)

序

『大いなる帰滅の物語』（マハーサンヴァルタニーカター、MSK）は東インドの小乗仏教正量部（Sāṃmitīya）に所属する仏教詩人サルヴァラクシタ（Sarvarakṣita）によって12世紀に書かれた梵語の韻文作品である。その第2章から第6章は、インド小乗仏教の神話的な宇宙論が、技巧を凝らした芸術的な文体で描かれている。ここに和訳する第2章4節から第4章第1節までは、古い仏教聖典の記述に基づいて、地上に人間が現われて後、次第に道徳的に墮落しながら社会を形成してゆく人類の歴史が神話的に語られており、インド学のみならず、神話学、宗教学、文化人類学の研究者にとっても興味深い内容のものである。

本論文は二部から成る。第一部は、MSKの第2章4節から第4章第1節までの翻訳、そして蔵文訳の『文献X』の対応箇所^(註1)の翻訳から成る。翻訳に用いた底本は、私がマールブルクでミヒャエル・ハーン（Michael HAHN）博士の指導の下に博士論文として作成した校訂本である^(註2)。

本論文の第二部では、MSKに語られる人類の創世記物語の並行資料として、インド仏教の四部派（パーリ上座部・犢子正量部・根本有部・大衆部説出世部）の同じ内容の聖典を、パーリ語ならびに梵語から翻訳した。この中で私が犢子正量部の伝承と見なした聖典は、『ローカ・パンニャッティ』（Lokapaññatti）というパーリ語の作品である^(註3)。この作品は、内容に後代の付加改変を含むとはいえ、基本的には立世論のインド語の原典からのパーリ語の抄訳であり、立世論が犢子正量部に属する作品であったことは、現時点までの研究でほぼ疑いがない^(註4)。今回のパーリ語からの翻訳の作業を通して、さらに一層この作品がMSKと同じ部派系統に属するという確信が強められた。第一部で翻訳された二

第一部ではMSKのそれぞれの詩節に対して、翻訳を上げた後に、私は「並行資料」として、A、L、S、Mという四つの記号と数字とを示した。この四つ

の記号が意味しているものは、本論文の第二部で訳されるパーリ上座部 (A)、犢子正量部 (L)、根本有部 (S)、大衆部説出世部 (M) のそれぞれのテキストである。数字はそれらの翻訳に私が付けた段落番号を指す。これによって、第一部にあるMSKと『文献X』の記述をよりよく理解するために、その源泉としての古い聖典の記述を第二部で参照することが容易になる。

なお漢訳の立世論に内容的に対応する記述がある場合は、その箇所の大正大藏經第32巻における頁・段・行を、この「並行資料」の記述の末尾に記しておいた。MSKの内容を理解する上で、漢訳立世論を絶えず参照することは有益である。

第一部 MSKと文献Xの翻訳

第2章第4節 死すべきもの(人間)の出現

[2.4.1] それから後、二劫の間、[人の] 身体を得た者たち、男・女・不男不女の [性的] 区別がない体を有する、死すべきもの(人間)たちは、虚空の領域を [自由に] 浮動する者として、あたかも雲なき [空の] 遊星たちの如く、自らの身体から発する光を伴って、世界の中を [あちらこちらと] 浮動していた。

[藏文§31] その後に、各自の業によって [自然発生的に] 生じた、虚空を [自由に] 浮動する、女・男・不男不女の [性的] 区別がない、自ら [発する] 光をもつ [肉体を有する] 人間たちが、[地上世界に] 生まれた。

【並行資料：A3-4、L2-3、S6-7、M2-3、立世論 225b23-26】

[2.4.2] さて、彼らの中の或る一人の人間は、芳香の故に極めて魅力的な、ラサー (lasā) より成るこの地 (pṛthivī) に気づき、[それに対する] 貪著をそなえた [彼] は食べた。同様に [彼と] 一緒に居住していたため、他の人間たちも [その] 行為を共有した。

[藏文§32] それから久しい時が経った時、自ら [発する] 光をもつ或る一

人の者が、自性において勝れた、快き芳香のある『地の乳脂』(sa g̃zi žag)を見て、貪著したため、その『地の油脂』を食べた。同様に、自ら[発する]光をもつ他の者たちも、食べた。

【並行資料：A6-9、L6-9、S9-10、M7-10、立世論 225c2-7】

[2.4.3] 食物を摂ることを始めてから、あらゆる人間は身体の光の消失と、身体の重たさを得た。原因としての貪著によって、このように、かつて昔、・・・^(註5)生き物たちに、この不幸が生じた。

〔蔵文§33〕その後、食物へのその愛着に相応して、身体の光が消失し、また身体が重たさを得た。地[の上]を動く者となった。

【並行資料：A10、L10、S11、M13、立世論 225c8-10】

[2.4.4] するとアシュレーシャー宿やシュラヴァナー宿と共に^(註6)、太陽と月が、[東の大陸] ヴィデーハ洲とその反対(西の大陸)の中間に、突然出現した。流し目の視線を有する両目に似たそれら(太陽と月)をきわめて高きに持ちつつ、天空はとても輝いた。

〔蔵文§34〕その時[身体の光の消失によって、世界が]大いなる闇になると、生けるものたちの共業(万人共通の業)によって、東のヴィデーハ[洲]においてアシュレーシャー宿の星宿を伴って太陽が、[西の]ゴダーニーヤ[洲]においてシュラヴァナー宿の星宿を伴って月が、同時に出現した。

【並行資料：A11、L11、S12、M14、立世論 225c10-14】

4 [2.4.5] このような状態まで、この人間たち[のあり方]は展開した^(註7)。[以上で]きっかり[成劫の]二十劫が過ぎ去った。[作者の感想:]なぜなら、太陽の行動規範をもつ者たち(仏陀)が出現する時に、世俗的立場(俗諦)において[のみ]存在しているものたちは、すみやかに姿を消すものである。

『大いなる帰滅の物語』 (Mahāsaṃvartanīkathā)

〔蔵文§35〕 このような状態まで [展開して]、二つの劫 (第十九劫と二十劫) は終わり、[全部で] 二十劫をもって、成劫の時代が終了した。

【並行資料：A12、L12、立世論 225c14-15】

『死すべきもの(人間)の出現』という、第4節。『生成しつつある状態(成劫期)』という、第2章 [おわる]。

第3章第1節 食物の出現

〔3.1.1〕 このように、[出現した]太陽と月によって照らされた、地上を動く者たち(人間)は、蜂蜜に似た味のラサーを過度に食べて、容色(肌色)が悪くなった。[或る]他の者たちは美しい容色(肌色)を保っていた。

〔蔵文§36〕 以上をもって、生成しつつある時期(成劫)が語られた。このように、地上を動く者たちを、[出現した]太陽と月が照らした。蜂蜜の如き『地精脂』(sa'i bcud žag 地のラサー)を多く食べた者は、容色(肌色)が悪くなった。少し食べた者は、容色が美しくなった。

【並行資料：A13、L13、S13、M15、立世論 225c15-19】

〔3.1.2〕 「美しい容貌をもつ者は、悪しき容貌をもつ者を軽蔑した」と考えて、何となく少し彼らに不満であったラサー(lasā)は、人々を[懲らしめによって]前の世代の人々の[正しい]生き方に従う者にし、[また食物について]憂いに悩む者にした。

〔蔵文§37〕 その時、容色(肌色)が美しい人は、容色(肌色)が悪い人を、軽蔑した。

【並行資料：A14、L14-15、S14-15、M16、立世論 225c19-25】

〔3.1.3〕 困窮の時に[助けに現われる]友人たちの如く、彼らを助けるために、『地のパルパタカ』(bhū-parpatākāḥ)が出現した。高慢と欲望が増大したそ

の [人間たち] も、[先と] まったく同様に、それ (『地のパルパタカ』) への願望をもつ者であった。

〔蔵文§38〕 その時、『脂』 (zag ラサー) が消失して、『地脂餅』 (sa'i zag khur ba 練り粉菓子のような地の乳脂、地のパルパタカ) が出現した。『地脂餅』の食も、多く食べたところの者は [容色が] 劣った者となったが、少し食べた者は [容色が] 勝れた者となった。[先と] 全く同様に [食が] 心に適うものになったため、[人々は] 高慢を増大させつつ、繁栄した。

【並行資料：A16-17、L17-18、S17-18、M17、19、立世論 225c27-226a6】

[3.1.4] 高慢が強くなってきた時、それら『地のパルパタカ』は消えてしまった。[作者の感想:] 悪徳という敵のいかなる増加が、いったい幸福の喪失へと導かないはずがあるか。

〔蔵文§39〕 高慢が強くなったために、『地脂餅』 (sa zag khur ba 地のパルパタカ) も消えてしまった。

【並行資料：A18、L19、S19、M20、立世論 226a6】

(漢訳立世論はここで終了し、この箇所から先は訳が存在しない)

[3.1.5] 再びまた心配に悩んだ人々は、まるで困窮した時に庇護してくれる養母を [得たか] のように、ヴァターラター (vatālatā ヴァター蔓草) を得たが、[しかし] 完璧な食のてだてを得た [その者たち] は、過度の高慢を増大させた。

6 〔蔵文§40〕 その後、大地から蜂蜜の如き『林』 (tshal ヴァナ [ラター]) が出現した。それも人々によって食べられた故に、[人々において] 高慢が増大した。

【並行資料：A19-20、L21-22、S21-22、M21、23】

『大いなる帰滅の物語』 (Mahāsaṃvartanīkathā)

[3.1.6] 彼らへの、あまりに久しく [我慢された] 怒りによるかのように、かの偉大なつる草 (vallī) は、味を失った。[作者の感想:] そう長くは、悪徳に穢された人々に、繁栄の女神ラクシュミーは付添うものではない。

〔蔵文§41〕 その後、『地脂林』 (sa śag tshal ヲアナラター) も、消えてしまった。

【並行資料：A21、L23、S23、M24】

[3.1.7] 殻のない、胚芽のない、白い実をもつ、耕されない [で自然に生える]、美しい稲 (su-śālī) が、これらの者たちのために出現した。それらの [稲] に包まれて、まるで大地はリンネルの上衣 [に包まれた] 如く、輝いた。

〔蔵文§42〕 その後、殻のない、断絶しない^(註8)、よい香りの、とても柔らかな、蜂蜜の如く甚だしく味のよい、白い、耕されない [で自然に生える] 稲が、大地から生じた。

【並行資料：A23、L25、S25、M25】

[3.1.8] すると彼らがそれらを食べている間に、女と男の差異である性的表徴 (linga) が [体に] 生じた。[作者の感想:] [無思慮な] 行為は、たとえそれが好奇心なしに行われたものであっても、世の人々の笑いものとなる。

〔蔵文§43〕 その稲を [彼らが] 食べたために、男と女を区別する性的表徴の根本が [体に] 生じた。

【並行資料：A24、L26、S26、M27】

[3.1.9] 女の特徴をもった人々を彼らは見て、「おお、こいつは墮落した者 (duṣṭah) だ」と語った。[作者の感想:] なぜなら、肉体の奇形は世間に [人を] 誹謗する機会を与えるものだからである。

〔蔵文§44〕 その時、〔ある人々に〕女の〔性的〕表徴が生じたのを見て、他の人々は〔彼らを〕誹謗した。

【並行資料：L27】

〔3.1.10〕 まさしくそれ故に、恥じたる者たちのこの〔肉体の〕覆いのために、『如意樹〔から生じた〕衣』(kalpaduṣyāni) が^(註9)出現した。〔作者の感想：〕対応策（救済策）を〔何一つ〕もたないところのものは、今日まで起こっていない^(註10)。

〔蔵文§45〕 その時、羞恥する男と女たちが〔性的〕表徴を覆う〔ことが出来る〕ように、『如意樹〔から生じた〕衣』が出現した。

【並行資料：L29】

〔3.1.11〕 女たち男たちが互いに眺め合うことによって、交接の欲望が生じた。〔作者の感想：〕なぜなら生物は肉体に〔性的欲望という〕悪しき徴候を、未来に不幸をもたらすものとして、持っているからである。

〔蔵文§46〕 その後、女たち男たちが互いに眺め合うことによって、交接への欲望が生じた。

【並行資料：A25、L30、S27、M28】

〔3.1.12〕 激しい欲望によって、或る者たちは交合を行ない始めた。〔作者の感想：〕或る一つの悪しき罪が生じる時^(註11)、別の悪が〔続いて〕生じるものである。

〔蔵文§47〕 彼らのうちの或る者たちは、激しい欲望によって、交合の実行をなした。

【並行資料：A26、L31、S28、M29】

[3.1.13] 或る他の者たちは草や土くれを投げつけて、前代未聞の、交合[という行為]を非難した。「誰がこの、甚だ卑しい、道徳的行為から遠く隔たったことをしてよいものか」^(註12)。

〔蔵文§48〕 交合を実行したそれらの人々を、他の者たちはとても激しく非難した。

【並行資料：A27、L32、S29、M30】

[3.1.14] 「ああ！浄らかな道徳的行為から成る光輝をもつ [この] 世界における、[お前たちの] 闇 (暗愚) に随行された行いよ！ [その行いは] 人を益することなく、福德に欠け、穢れに広く覆われているのに、お前たちにとっては、快いのだ！」。

〔蔵文〕 対応文なし。

[3.1.15] [周囲の] 非難に耐えきれなくなり、女たちを厭う気持ちを起こした者たちは、高い気位を伴いつつも、それから少しの間、よい香りのする風をもつ林へと赴く^(註13)。

〔蔵文〕 対応文なし。

【並行資料：A30、L36、S33、M33】

[3.1.16] 激しく交合を行うようになり、それを隠すために家を造った、他の者たちは。[作者の感想：]好きな行為においては、人々は掟をも顧慮しないものである。

〔蔵文§49〕 その後、交合を行うことがとても増加したため、[彼らは]交合の目的を覆い隠すために、家を造った。

【並行資料：A31、L38、S34、M34】

〔3.1.17〕 彼らはその時、夕べと朝に、稲を収穫した、それを食するために。
〔作者の感想：〕それは驚きである、家〔の存在〕すら、偉大な人の場合には、
知足を失うことへ導くことがない、ということは^(註14)。

〔蔵文§50〕 人々は、朝食のために稲を朝に収穫した。夕食のために夕べに
収穫した。

【並行資料：L39】

〔3.1.18〕 夕べに刈られたものは〔翌〕朝に、朝に刈られたものは夕べに、彼
らのために、繰り返し〔元通りに〕稲は生長した。まるで「知足」という不老
不死酒（アムリタ）を注ぎかけられているゆえのように。

〔蔵文§51〕 その〔人々の〕福德〔によって〕夕べに刈られたものは翌朝に
生じた。朝に刈られたものは夕べに生じた。

【並行資料：L40、S36】

〔3.1.19〕 このように家に住みつつ、「知足」という偉大な徳とともに暮らし
つつある彼らの中の或る者たちが、ある時に、或る一人の者を呼びよせて〔次
のように〕言った^(註15)。

〔3.1.20〕 「ああ、皆さん、食事の時は、人間にとって、不規則なものとして
やって来ます^(註16)。それ（食事の時）は来ました。まだ去っていません。あなた
はここに居る必要はないのです」。

〔3.1.21〕 「さあ、徳をそなえた方々、あなたと一緒に、たぐいなき稲のもと
へ行きましょう。なぜなら、家に置かれたそれ（稲）によって、食物の障害はな
くなるからです、災禍の破壊者よ」。

〔3.1.22〕 すると彼は彼らに言った。「私は〔稲を〕失うことなく、しかも〔い
ちいち収穫する〕苦勞が消えた〔わが〕家へ行くことにしよう。なぜなら、以
前に取ってこられた稲は今、私の喜び（欲求）を大きなものにするのだ」。

〔3.1.23〕 彼らは〔互いに〕言った。「この〔稲〕によって家は充たされ、自

と他の身体が養われる。今や、[稲の] 苦勞に関しては、[全く] 解放されるに至ることも、義務的に束縛されるに至ることもない。

[3.1.24] 「たった一度で運ばれた食物をもつ私たちは、その後は苦勞しない。愛の鬭争のなされる家において、女たちを追い払うことなく [一緒に] 住むことにしよう」。

[3.1.25] このように [語って]、何についても不満足 (不知足) であったために、久しい時の後に終わりが来るものとしての、稲という宝を貯えて、美しい妻たちと一緒に、静かな家々に彼らは住んだ。

(以上の3.1.19~25 の詩節に、次の藏文の§52が対応する：)

[藏文§52] このように人々は家に住んだが、[さて]或る人々が他の人々に言った。「食事の時に [一緒に収穫するため] 集まろう」。

その時、生まれつき怠惰な或る一人の者は [勝手に] 稲をたくさん収穫して [自分の] 家を充たした。それを見て、他の者たちも同様な行為をした。[別の] 他の者たちは再び言った。「誰が最初に稲を [勝手に] 収穫したのか」。一人の他の者は答えた。「この者だ」。

こうして、すべての者が同様な行為をしたため、稲も消失してしまった。

【並行資料：A32-35、L41-44、S37-39、M35-37】

[3.1.26] 人々がラサー、ラター、パルパタ、稲を^(#17)食べている間に、[それぞれに] 二劫づつが過ぎ去った。今や、人間たちにとって甚だ驚愕となることを与えようと欲するかのように、この [現在の] 第九劫が到来した。

[藏文§53] 「要約の詩節：」

それから、順次に、人間にとって各二劫づつ過ぎたのは、『乳脂』 (ḥag ラサー) と『餅』 (khur パルパタカ) と『林』 (tshal ヴァナ [ラター]) と稲 (sā lu) の食物 [である]。

それによって [合計] 八劫が過ぎ去った。

第3章における、『食物の出現』という、第1節 [おわる]。

第3章第2節 生計の手段の開始

[3.2.1] 甚だしい貪欲のため、新たに実った米は、白くなかった。粃殻をそなえていて、[体に] とても益のあるものではなかった。[穀を取って] 残されたものは、特別な胚芽を有していた。

[蔵文§54] その後、第九劫が始まった時、甚だしい貪欲のために、粃殻をもち、胚芽をもち、体にとっても益があるわけではない白くない米が、出現した。

【並行資料：A36、L45、S40、M38】

[3.2.2] 稲において、貯蔵という悪しき行為を原因としてもつ、切り跡 (apadāna 稲穂を摘んだ跡) が^(註18)明白にあるのを見て、また、残ったものが胚芽と粃殻から出来ているのを [見て]、かの人々は自分たちの悪徳を咎めた。

[蔵文§55] その時、人々は、白くない等の [前述の] 欠点を稲に見て、[自分たちを] 咎めた。「この悪は、私たちの節操のなさ [の故] である」。

【並行資料：A37、L46、S41、M39】

[3.2.3] 「ああ、[われらの] 節操なき行いよ、それによって、人間たちの益のために熱心なラサー (lasā) が消失してしまうこと [の結果] に導かれたのだ。[その後、代わりに出現した] 美味なるパルパタカ (parpatākāḥ) は、あたかも大地から引き抜かれた綿の木々の如くに [滅びてしまった]」。

[蔵文§56] 「初めに、蜂蜜 [の味] を格段に越えた『地精脂』 (sa'i bcud žag 地のラサー) が消失した。その後、蜂蜜 [の味] を越えた『地精餅』 (sa'i bcud 'khur ba 地のパルパタカ) が消失した」。

【並行資料：A38-40、L47、S42-44、M40-43】

[3.2.4] 「絶えざる新しさによって、とても密生したヴァター[ラター] (vatā)

が、人間たちにとって母の如く、繁栄を生むものとなった。久しい間でも [人間に対する] 嫌悪を生じさせることがなかったそれ(ヴァターラター)は、それ(節操のなさ)のせいで、かつて死滅に導かれた」。

〔蔵文§57〕 「その後、小さな蜂の蜜[の味]に似た『林』 (tshal ヴァナ[ラター]) も消失した」。

【並行資料：A41、L47、S45、M44】

[3.2.5] 「過度の貪欲をもつあなた方のこの稲が、正しい行動様式と一緒に、急に死滅に近づいている。ああ、私たちは食物なき者となる！」。

〔蔵文§58〕 「過度の貪欲のために、とても白い等の徳性をもつ [元の] 稲 ('bras sā lu) も減んだ。ああ、私たちは貪欲のために滅びる！」。

【並行資料：A42、L48、S46、M45】

[3.2.6] 「ああ、嫌だ、あらゆる繁栄の喪失をもたらす、様々な悪徳という敵軍の群は！ [あなた方] 自らのために、最高に [自他を] 益する者たちにとって、甚だ害ある者たちのこれ (悪徳という敵軍の群) は、捨離されるべきである」。

[3.2.7] 「貪欲のゆえに、公平ではなく振舞いつつあり、田を家ごとに分割しつつあるあなた方に、丸い先端をもつ米が、新しい [厳しい] 態度をもつ者にならないようにせよ！」。

〔蔵文〕 対応文なし^(注19)。

[3.2.8] 「さあ、来なさい！ 私たちが豊かな群列をなす稲の境界を定めて、[稲田の] 分け前が [各自に] うまく分与されるならば、私たちは・・・(意味不明) 確実な富をもつ者となる」。

〔蔵文§59〕 「私たちが今や [稲田を] 適切に分けて、分与するならば、最高

善（最高の幸福）が示される（現われる）であろう」。

【並行資料：A43、L49、S47、M46】

〔3.2.9〕 「このように」 共同社会に関する、人々のこの [なすべき] 活動をあまさず説明した後に、人民の集會が催されたことにより、またすべての土地の測量が実行されたことにより、

〔3.2.10〕 男たちのそれぞれは自ら六ヨージャナ^(注20)の田を受け取った。どこかしら [常に] 生存の不安をもっていた生類は、その後あらゆることを楽しんだ。 —— [これは] 『ユグマ』 (二詩節の連続) [である]。

〔蔵文§60〕 そこで、統治する領域において^(注21)一軒の家を作って、土地を分配した。

〔蔵文§61〕 その土地の分配をした時、男たちはそれぞれ六ヨージャナの広さの田を自分のものにした。

〔3.2.11〕 さらに四ヨージャナを女たち一人一人に許し与えた。 [作者の感想:] [男と比べて] 不公平であったとしても、 [それなりの] 適切さの故に、この分配が輝かしさを欠いているわけではなかった。

〔蔵文§62〕 さらに、女たちに^(注22)それぞれ四ヨージャナづつ与えた。

〔3.2.12〕 その後さらに、人々が非法に耽ったので、『如意樹 [から生じた] 衣』 (kalpaduṣyāni) が消失してしまった。 [作者の感想:] なぜなら徳に慣れている存在は、悪徳と一緒に住むことはない^(注23)。

〔蔵文§63〕 その後、 [人々は] 再び非法に耽ったために、『如意樹 [から生じた] 衣』 が消失してしまった。

【並行資料：L50】

[3.2.13] 『如意 [樹衣]』への期待から、種子が植えられ、その時生じたものが [現在の] 綿の木 (karpāsāḥ) であった。[作者の感想:] 世界における [あらゆる] 誕生は、前世の行為に従うものである故に、[人の] 希望どおりにあるものではない。

[蔵文§64] その時、彼ら (生ける者すべて) の共業により、綿の木が生じた。

【並行資料: L51】

[3.2.14] さて、本性において欲深い或る一人の人間が、あたかも幸福を消失させるためであるかのように、他人の稲を盗むことを—— [すなわち] 勝れた徳行の破壊を—— なした^(註24)。

[蔵文§65] その後、生まれつき欲深い或る一人の人間が、他人の稲を盗んだ。

【並行資料: A44、L52、S49、M47】

[3.2.15] 少しではない、あからさまの稲の略奪を不当にも行いつつある彼を見て、或る者たちは言った。「卑しく振舞う者よ、なぜ、これまで起こったことのない話であるそれが、お前によってなされたのか」。

[蔵文§66] 稲を盗んだその者に、或る者は言った。「おお、お前は悪行をし、卑しい振舞をした」。

【並行資料: A45、L53、S50、M48】

[3.2.16] 「人々は制約にとどまっており、しかもお前は [自分の] 田に沢山の稲を有している。それ故、悪行を促進する [ような] 盗難をやめるべきである。[そうすれば] 愛される者に [お前は] なるであろう」。

15

[蔵文§67] 「すべての人々は制約にとどまっており、しかもお前には [自分

の] 耕田に稲が有る。それ故、不正な行いであるその [盗み] をやめよ」と
[語った]。

[3.2.17] 「わかった」と、[彼は]自己における、盗難をやめるという偉さ(卓越性)を彼らに示したが、[しかし]徳の集積を減ぼすものである略奪を [前と] 同じように再び行った。

[蔵文§68] その稲の盗人も「稲は盗まれるべきではない」と誓ったが、二度三度と繰り返し [彼は] 他人の稲を盗んだ。

【並行資料：A46-47、L54、S50、M49-50】

[3.2.18] さまざまな悶着の原因となる盗みを、同じように二度三度と行いつつある彼を見て、敵への激しい怒りをもって、それらの人々は [その彼を] 手ひどく傷つけた。

[蔵文§69] その男がこのように振舞ったので、彼を他の人々は傷つけた。

【並行資料：A48-49、L55、S51-52、M51-52】

[3.2.19] すると、大勢の人々は [暴力を受けた盗人の] 手などの、そのいたましい状態を見た時、憐れをもち、大きな悲しみをもって、繰り返し [暴力という] 罪の発生を非難した。

[蔵文§70] その時、すべての人々が、手足等を鋭い武器(刀)で打たれた盗人のその体を見た時に、他の人々は非難をなした。

【並行資料：A51-52、L56-58、S53】

[3.2.20] 「ああ、世界においてこの『所有』とは、自制心を破壊するものだ、敵の盗難に悩まされることによって。それ(所有)によって、このように悪しき変化が起こることは、まもなく人々の破滅 [につながるだろう]」。

[3.2.21] 「ああ、悲しい！他人の財を奪うことや、そこから生じた相互のいさかいや喧嘩。ああ、危害を与えんとするかのような、こんな罵りや騒動もが生じた」。

[蔵文§71] 「他人によって財を奪われることは、苦しみである。その原因の故に [人々は] 互いに争うのだ。その原因により、大きな騒動も生じた」。

[3.2.22] 「今やこのことが私たちにとって適切であろう。この世界で、制戒の徳性を [未だ] 捨てていない、淨らかな道徳的行為に専念した、人にあらざる (神のような)、かの最高の人間こそを [私たちの] 王にしよう」。

[蔵文§72] その時、すべての人は [その] 困苦のために集まって、互いに話し合いをした。「それはこの様にするのが適切であろう。すなわち、善い道徳的制約が堅固で、それをはずれることがない、とても秀でた人を、人々の王にするべきだ」。

【並行資料：A53、L59、S55、M57】

[3.2.23] 「決して墮落しない [その彼] は、世界において悪人たちに対し適正な処罰を行う者、すべての政治やその他を決定する者となるだろう。天における創造神 (ブラフマー) のように」。

[蔵文§73] 「彼はまた適正な処罰を行う者として、決して墮落しないであろう。すべての人民の意に合うように [正しく] 処罰と庇護を行う彼は、悪行によって穢されていない者として、[その]すべての徳性によって、人間たちの最高者となるべきだ」。

[3.2.24] このように考え、熟慮によって認識されたことが、この地上ですべての人間に語られた。まるで推論の帰結であるかのように語られた [それ] は、説明された後に、彼らに賛成された。

〔蔵文§74〕〔その提案は〕これらすべての〔人々〕の賛成するところ、希望するところとなった。

〔3.2.25〕 悪しき行動様式に〔未だ〕支配されていない、あらゆる徳性において人間たちの上に立つ者、人々において最も尊敬されるべき者である、或る男のもとに集まって、彼らは語った。

〔蔵文§75〕 そこで、その人は或る一人の聖者に話した。

【並行資料：A54、L60、S56、M58】

〔3.2.26〕 「おそらくあなたもすでに知られていることでしょう——適正ならざる状態が、今や世界に生じているということ。そして〔それは〕日々、人々から富樂が消失するまでに至っているということ。」

〔蔵文§76〕 「人々がそのせいで今や不適正なることをなすところの悪徳と、日々〔人々から〕富樂が消失してゆくということ、あなたは知っておられます」。

【並行資料：A55、L61、S57、M59】

〔3.2.27〕 「あなた以外の誰も、人間たちのあの不名誉を追い払うことはできません。淨らかなる莫大な光線を放つ太陽のみが、闇を消失させる者なのです」。

〔蔵文§77〕 「このような〔今の〕人間たちの、不適正な、道理に背いたあり方に対して、あなた以外の誰も〔正す〕能力がないのです」。

〔3.2.28〕 「あなたにこの尊敬の思いを示しながら、技能をもつすべての民は集まってきました。羊たちが拠り所とする^(註25)山なくして、象たちは何を避難所とすればよいのでしょうか」。

〔蔵文〕 対応文なし。

[3.2.29] 「このようなわけで、[業の]異熟としての幸福によって支配されている、ほかならぬこの世界においてあなたには、天界におけるインドラ(神々の王)の如くになっていただいて、大衆にとっても圧迫された年老いた人々をお守りください」。

〔蔵文§79〕 「あなたはこれらの人々を出来る限り適切にお守りください」。

[3.2.30] 「疑念のない、さまざまによく説かれた御法話によって、あなたは这个世界すべてを統治すべきです。美しい御顔をもつ方よ。このあり方は王にとって、不適切ではありません」。

〔蔵文〕 対応文なし。

[3.2.31] 「かのすべての稲の六分の一を、人民は与えるであります。それで最も富をもつ者となられませ。そして富を産み出す者である母なる大地をお守りください」。

〔蔵文§78〕 「これらの人々の稲の六分の一をあなたに与えましょう」^(註26)。

〔蔵文§80〕 「[王として] この大地もお守りください」。

[3.2.32] その[王になってほしいという]要請に彼は同意し、人々の願いをみたした。[作者の感想:] 人々によって尊敬の念が置かれる最高の[公的な]地位に、能力ある者たちは、決して昇らないということがないのである。

19

〔蔵文§81〕 その時、とても勝れたその人は、その言葉に同意して、それらの人々の心の願いをみたした。

第3章における、『生計の手段の開始』という、第2節 [おわる]。

第3章第3節 階級（ヴァルナ）の分離

[3.3.1] 集まったとても喜ぶ人々は、彼を灌頂した——頭頂にある髻の宝石が世界を照らすように、世界を照らす彼を。[髻の宝石が] 美しい結び糸（スートラ）をもつように、めでたき経典（スートラ）をもつ彼を。[髻の宝石が] 思念（ディー）から成る [見えない] 光を発するように、知慧（ディー）から成る光を発する彼を。

[蔵文§82] ただちに、それらの人々はその最高の人を、王として灌頂することにより、敬った。

[3.3.2] 悪人への正しい処罰によって、彼は王たる偉大さに達し、すぐさま人民の主 [たる彼] は有名になった、「悪行を滅ぼし、益をもたらすことを [彼は] なす」と。

[蔵文§86] 彼は王たる輝かしいあり方に達した。暴悪な人を処罰し、[欲望が] 鎮まった正しい人を扶助し、土地の支配者（王）として広く知られ、[人民に] 害となるものを取り除き、益となることを行った。

[3.3.3] 他の、自己制御に専念した者が、たとえ甚だヴェーダを学習した者であっても、説くことができない正しい行いを、この方（王）は、憐れみをもって賢い知者たちの集団に知らしめた。

[3.3.4] 「知性を日蝕のように暗くする貪欲が、人々を、悪しき変化を被るにふさわしい状態（悪しき変化の器たる状態）へと導いた。ああ！まるで盲人たちのように、闇質（タマス）に起因するそれ（貪欲）をもつ者たちが、生じた」。

[3.3.5] 「それ故、今や悪行に住するべきではない。何故に法（道徳律）の喪失へと急ぐのか。よい素質能力（器）の人々にとって、幸ならざる [法の喪失] は、絶えず防がれねばならない」。

[3.3.6] 「『私は思うに、激しいこの瞋恚 (敵意) は、幸福を喪失させ、罪過をもたらすものである』——と、このように [各自が] 慈しみの思いをもって [考える時]、人間たちは息子ら (自分の子供たち) のように、罪のない者となる」。

[3.3.7] 「この [今や] 行為されつつある『高慢』が、悪行の源泉であり、幸福をととても悪変化させる。それ故に、『高慢』に関してその規模 (重要性) は、もろもろの『悪徳』という敵と、著しく別であるわけではない」。

[3.3.8] 「正しい者たちがもつ福德の原因力によって、人界において貴い家系での出生がある。かくして、諸行為における業から生じ、[各人の] 本性に条件づけられたものが、あなた方の出生である」。

[3.3.9] 「あらゆる幸福をもたらすものである智慧の目を、迷妄が覆い隠す。まさにそれ故に、暗愚のない、最もすぐれた、或る一人の別の者が [即ち、智慧の目を開く者が] この世界に [在ることが] 可能である」。

[3.3.10] 「罪悪のもろもろの果によってしがみつかれる、この者 (迷妄) は、[現象の] 生と滅との [正しい] 観察行によって存在の理法に思惟 (洞察) を向ける人によって、早く根こぎにされるべきである」。

[3.3.11] 「食欲などの悪徳がもしなくなり、戒などのあらゆる善い徳をもし具えるならば、あなた方は、安楽を味わいつつ、欲望が滅した寂靜なる状態へ至るであろう」。

[蔵文] 対応文なし^(註27)。

[3.3.12] このように [説き]、善い話は世の人々を [月光の如く照らして] 光に充ち満ちた状態、[無知の] 闇が消失した状態に変え、この王は、まるで月が人々を喜ばせることに思いを向けた美しさ (アーチャー) によって輝く如くに、人々を喜ばせることに思いを向けた法話 (アーチャー) によって輝いた。

21

[蔵文§83] 彼は、大勢の人々によって喜ばれ、[彼らを] 喜ばせた (*rañjayati) ので、王 (*rājan) と [呼ばれた]^(註28)。

【並行資料：A59、L64、S61】

〔3.3.13〕 王が幸いを、〔即ち〕 解脱ならびにインドラの宮殿への階段を教示した時、〔人間のあらゆる〕 悪行は、〔現実の〕 意味とは異なる〔ただの〕 名前となって、世にあった。(以下、その説明がなされる)

〔3.3.14〕 〔十不善業道のうち〕 『他を殺すこと』 (一) は、ただ不幸 (不運な状況) においてのみ存した。『与えられないものを取る』 (二) は、〔盗みではなく〕 自分の〔家庭の〕 財においてのみ〔存した〕。『他の妻に近づくこと』 (三) は、〔他人の妻ではなく〕 単に自分がもつ後宮〔の妻たちの間〕 においてのみ、存した。

〔3.3.15〕 『真実をいつわること』 (四) 〔の語〕 は、〔嘘という意味ではなく〕 世俗諦の言説〔の意味〕 としてのみ存し、『〔内証を〕 口外すること』 (五) 〔の語〕 は、〔告げ口という意味ではなく〕 真実の意味について善く語り〔の意味〕 としてのみ存し、『荒削りの (ざらざら荒れた) 言葉』 (六) 〔の語〕 は、〔粗暴で露骨な言葉という意味ではなく〕 触感に関してだけ存し、『無関連の語』 (七) 〔の語〕 は、〔無駄口という意味ではなく、韻律に縛られていない言葉という意味、つまり〕 散文〔の意味で〕 のみ、存した。

〔3.3.16〕 『他者の財を欲すること』 (八) 〔の語〕 は、〔他者から財を得んとすることではなく、他者に財を得させんと欲すること、つまり〕 他者を益すること〔の意味〕 として存し、『ヴィアーパーダ』 (九) 〔の語〕 も、〔悪意という意味ではなく、ヴィ (離れた) ・アーパーダすなわち〕 災難 (アーパッド) を離れていること〔の意味〕 のみで存し、『クダルシャナ』 (十) 〔の語〕 は、〔悪しき見解という意味ではなく、ク・ダルシャナすなわち〕 地に関する知識〔の意味〕 のみで、存していた。

22 (以下にあげる蔵文の§87~§91は、人間が陥った十不善業道を語っているので、上記の梵文の3.3.13~16と内容的に対応していると思なう。ただし文の趣旨は異なり、蔵文は後の時代に十不善業道が現われたと語るのに対し、梵文はサンマタ王の時代には十不善業道が無かったと語る。)

〔蔵文§87〕 〔人々は〕 悪しき行いを捨て、〔それを〕 抑え込んだ。その後、或る別の人々がまた再び悪行をしても、それ以外の人々は正しく振舞った。

『大いなる帰滅の物語』 (Mahāsaṃvartanīkathā)

〔蔵文§88〕 その後、人々の悪徳の発生源である貪欲が生じた。その後、瞋恚が生じた。その後、高慢がはつきり姿を現わした。その後、愚痴が出現したが、それは幸福が後に従う真理を覆い隠してしまうものであった。

〔蔵文§89〕 その後、『与えられないものを取り（偷盗）』（二）が出現した^(註29)。その後、『他の妻に近づくこと（邪淫）』（三）が出現した。

〔蔵文§90〕 その後、『真実をいつわること（嘘）』（四）が出現した。その後、『〔内証を〕口外すること（告げ口）』（五）が出現した。その後、『荒削りの言葉（粗暴な言葉）』（六）が出現した。その後、『無関連の語（無駄口）』（七）が出現した。

〔蔵文§91〕 その後、他人を苦しめるという特徴をもつ『悪意』（八）が〔出現した〕。その後、他人の財を欺き取るという特徴をもつ『〔財を〕強く欲すること』（九）が〔出現した〕。その後、『悪しき見解』（十）が出現した。

[3.3.17] このように、まるで弟子たちによって〔有益な教えが尊ばれている〕仙人の〔名前〕のように、家臣の者たちによって有益な教えが尊ばれている彼の、サンマタという名前は、〔彼が〕尊敬される（サンマタ）人格であったために、極めて広く知られて、輝いた。

〔蔵文§84〕 怒りを寄せつけず、『偉大で、多くの者によって尊敬された者』（マハーサンマタ）という名の王となった。

【並行資料：A57、L65、S59、M60】

[3.3.18] 〔彼は〕田の土地（クシェートラ）の最高の守護者（王）であるので、彼を取巻く集団はクシャトリヤという名前を有した。〔それは〕黄金の山の〔発する〕すばらしい光線のような〔輝かしい〕始まりであった。

23

〔蔵文§85〕 〔彼は〕田の土地（クシェートラ）の支配主であるので、彼の〔属する集団の〕名前はクシャトリヤになった。

【並行資料：A58、L66、S60、M62】

[3.3.19] さまざまな所有物への執着から、『[[他を]傷つけたり殺したりすること』を始めとする[十不善業道の]一連の罪悪が出現した。[作者の感想:]健康な[食事]とは異なる食事を原因として、さまざまな種類の病気にかかるが如くである。

〔蔵文§92〕 このようなかたちで、『[[他を]傷つけたり殺したりすること』(*himsā)を始めとする[十不善業道]の罪悪が、大量の所有物[への執着]から、出現した。

[3.3.20] このように、所有物を非難し、或る者たちはそれをうち捨て、林へ赴いた。[所有ということの]悪が追い払われた(ヴァーヒタ)ので、世間において彼らはブラーフマナ(婆羅門)と呼ばれた。

〔蔵文§93〕 ある者たちは、[善い側・悪い側に]立場を異にすることが[人々の間で]増加するのを見て、厭離の思いをもって、所有物を捨てて、林に住んだ。彼らはあらゆる罪悪を生じさせないので、[彼らを]ブラーフマナと世の人々は呼んだ。

【並行資料：A61、L69】

[3.3.21] [林中の]禪定を捨てて、自ら作成したマントラ(ヴェーダ聖典)の言葉を学び誦する(アディーヤーナ)或る者たちは、[彼らが林を去って]都市の人々との交際を[得た]ように、アディアーヤカ(学生)という名称を得た^(註30)。

24 〔蔵文§94〕 彼ら[バラモン]の中で或る者たちは、禪定を捨てた。マントラ(ヴェーダ聖典)の言葉を敷衍し、その「学び誦する」(*adhīyāna-) [という彼らのあり方]の故に、学生(*adhyāyaka-)という名称を得た。

【並行資料：A63、L70】

[3.3.22] 林に住むことをやめた、或る別の者たちは、再びとても家住(定住

生活)に喜びを見出した。[田で] 牡牛(ヴリシャン)の行為をなす[彼らの] 振舞によって、ヴリシャラ(シュードラ)と世間において呼ばれた^(註31)。

〔蔵文§95〕 或る者たちは林に住むことを喜ばず、[定まった]住まいをととも喜び、田畑の牛の行いに従事したが、その者たちにシュードラという世間における名前を[人々は]付けた。

【並行資料：A68】

〔3.3.23〕 あらゆる(ヴィシュヴァ) 技芸・工芸を行うゆえに、他の者たちは世間においてヴィシュ(ヴァイシャ) [という名をもつ階級]とみなされた^(註32)。かくのごとく、昔において、あたかも人間の生計手段(職業)であるかのように、人間の大部分に関して、適切のように[種姓の] 名前が生じた。

〔蔵文§96〕 他の者たちは家を喜び、様々な^(註33)技芸の仕事を行ったが、その者たちに、チャンダーラ(注意：ヴァイシャの間違い)^(註34)という世間における名前が付けられた。

【並行資料：A66、L73】

〔3.3.24〕 盗人たち(チャウラ)は当時、『凶悪な者』(チャンダ)と見なされたが、彼らを処刑する故に[ある者たちは] チャンダーラ^(註35)[と呼ばれた]。[作者の感想：] どんなに劣った行為よりさらに劣る[殺害という]行為は、[最悪の運命以外の] 他のいかなる運命に行かしめるだろうか。

〔蔵文§97〕 同様に、四姓(四階級)における或る者たちは、盗みをひたすら喜び、『凶悪な者』(チャンダ)と[名付けられたが、その者たちに対し]、彼らは殺害をなした故に、[その行為をなす]彼らに、チャンダ[ーラ](gtum mo)という世間における名前を[人々は]付けた。

【並行資料：L75】

〔3.3.25〕 適切な道徳的行為を有する最高の人々によって非難された、これらの〔チャンダラの〕者たちは、市民〔社会〕から放逐されるに至った。なぜなら正しい者たちの非難によって、明白に墮落した人々は、〔世の人から〕軽蔑され避けられるに至るものだからである。あたかも悪行が〔軽蔑され避けられる〕ように。

〔蔵文〕 対応文なし。

第3章における、『階級（ヴァルナ）の分離』という、第3節〔おわる〕。

第3章第4節 様々な食物の出現

〔3.4.1〕 さて稲は味の^(註36)劣悪化の故に、人々にとってうんざりさせるものとなった。〔作者の感想：〕人々が〔美味しいものへの〕食欲をもつ時に、長く慣れ親しむことによって〔いっそう〕不味いものとなった何者がいったい愛好されることができようか^(註37)。

〔蔵文§98〕 その後、稲は味の劣悪化の故に、軽侮に値するものとなった。

〔3.4.2〕 するとムンガ隠元豆、クラッタ空豆などの種々の副食物が、〔稲が〕刈られた〔後の〕場所に生じた。〔作者の感想：〕徳ある者たちが無食欲（嫌悪）に苦しめられる時には^(註38)、運命はすばらしい〔何か〕をもたらすものである。

〔蔵文§99〕 すると稲が刈られた場所に様々な副食物（*anubhojana）が出現した。すなわち大麦と小麦と胡麻とクラッタ空豆とムンガ隠元豆とマーシャ空豆である。

【並行資料：L76】

〔3.4.3〕 甚だしい汁の過剰により、掌で握られた時に三つの流れ〔の滴り〕を胡麻は出した。その他の穀物であっても、純正なる〔性質の／行為の〕所成

である故に、それ（胡麻）に相応する [豊かな] 汁（味）をもつものであった。

〔蔵文§100〕 それらの [副食物の] 中で胡麻は汁にとても充ち満ちていたため、掌で握ることで油の三つの流れを滴らせた。大麦などについても、その [当時の] 生けるものたちの福德によりて、それに相応する汁が生じた。

【並行資料：L81】

〔3.4.4〕 表皮や葉などが無い、上質の甘く快い味をそなえた、美しい最高の砂糖黍が、地表の装飾として生じた。

〔蔵文§101〕 その後、表皮や葉などが無い、上質の甘く快い味をそなえた、最高の砂糖黍が地表を飾った^(註39)。

【並行資料：L92】

〔3.4.5〕 化生の牛たちも来て（出現して）、乳を容器に自ら（自発的に）与えた。 [作者の感想：] なぜなら善行は結果をめざし、必ず望ましいことをもたらすものである。

〔蔵文§102〕 それから自ら（自発的に）乳の流れを [容器に] そそぐ化生の雌牛たちも生じた。

【並行資料：L83】

〔3.4.6〕 [生乳の] 流れ（噴出）によってかき混ぜられた（チャーニングされた）故に、生バター (navanīta) が^(註40)、それからギー (ghṛta) が、それから醍醐 (maṇḍa) が生じた。 [作者の感想：] それ（化牛出現時）以前には知られなかったこの [乳製品生成の] 「連続」は、今日もわずかながら人の希望通りのものである。

27

〔蔵文§103〕 その時乳の流れが [勢いよく] 注がれた振動によって、乳から生バターが生じた。生バターからサルピスの醍醐 [つまりギー] が生じた。

ギーからギーの醍醐が生じた。

【並行資料：L86】

[3.4.7] 自ら進んで飼い馴らされた象などの、すばらしい人間たちの乗物
が出現した。[作者の感想:]まったく新しい創造をなすことで天則は力の自由
自在さを示すものだ。

[蔵文§104] その後、自ら進んで飼い馴らされた象と馬など乗用獣の[様々
な]種類が出現した。

【並行資料：L83-85】

[3.4.8] 尊きサンマタ王には、周知のごとく、また更に七種類の宝が出現し
た。[作者の感想:]創造は運命の力に依存しているとはいえ、そのような[運
命に依存的な]あり方は、偉大な人々にとって、ふさわしいことではない。

[蔵文§105] その時、尊きサンマタ王に七宝が出現した。すなわち女宝と男
宝(*puruṣa-ratna?)と馬宝と象宝と輪宝と主蔵臣宝と主兵臣宝である。

[3.4.9] 王が全世界を支配していた時、人民があらゆる資具(食物と生活用品)
を十分にそなえてあった時に、世界にとって望ましくない[あらゆる]種類の
ことは、鏡に写った像すら無かった(片鱗すら無かった)。

[蔵文§106] さてマハーサンマタ王は[人民への]あらゆる恩恵(資具?)
をそなえもったために、すべての人間において望ましくない[あらゆる]種
類のことが、無くなった。

[3.4.10] 物質を有するものであっても、しかも精神を宿していた。馬と水牛
であっても、敵をもつことがなかった^(註41)。鹿であっても恐れをもつことがな
かった。鳥であっても[人間が傷害をしないため]羽を傷つけられることがな

かった (矢であっても [戦争がないために] 矢の羽が折れることはなかった)^(註42)。

[3.4.11] [世に] 窃盗 (喪失) がないことは、記憶においてさえも、[記憶の] 喪失がないほどだった。[世に] 破壊 (挫折) がないことは、願望においてさえも、[願望の] 挫折がないほどだった。[世に] 苦痛 (圧搾) がないことは、砂糖黍においてさえも、圧搾 [する必要] がないほどだった。[世に] 束縛 (拘束の繩) がないことは、動物らにおいてさえも、拘束の繩がないほどだった。

[3.4.12] [世に] 苦の感情 (苦の存在) がないことは、子宮の中においてさえも、苦の存在がないほどだった。[世に] 富 (ヴィババ) が欠けることがないことは、苦行者たちにおいてさえも、『生存から自由であること』 (ヴィババ) が欠けることがないほどだった。[世に] 努力 (精神集中) の欠如がないことは、禪定の中においてさえも、精神集中の欠如がないほどだった。[世に] 悪だくみ (悪い配列) がないことは、惑星群の中においてさえも、悪い配列がないほどだった。

[3.4.13] 言葉において接頭辞 (ウパサルガ) がある以外は、[世に] 災難 (ウパサルガ) はなかった。鳥たちの囀りにおいて鳥の会話 (ヴィ・ヴァーダ) がある以外は、[世に] 言い争い (ヴィヴァーダ) はなかった。刀において毒を塗ること (ヴィシャ・ダ) がある以外は、[世に] 悲嘆 (ヴィシャーダ) はなかった。[乳海攪拌の時に] 海において美の女神 (ラクシュミー) が分離された (ウッドリタ) 以外は、[世に] 幸運 (ラクシュミー) が奪われた者 (ウッドリタ) はなかった。

[蔵文] 対応文なし。

[3.4.14] サンマタ王の領土が、久しい間 (1) 敵をもたず、(2) どこまでも拡がり、(3) 人々を [互いに] 和合させ、(4) 支配地域を拡大していったのと同じように、[王によってもたらされた地上の] 幸福は、久しい間 (1) 対抗する者 (不幸) をもたず、(2) どこまでも拡がり、(3) 人々をなごやかな気分にし、(4) 範囲を拡大していった。

[蔵文§107] 彼のおかげで民衆は資具 (食物と生活用品) すべてを円満具足したため、極めて長い期間にわたって幸福になった。

〔3.4.15〕 彼ら(生けるもの)の、まばゆい美と光輝と姿かたちによって魅力的で、道徳的行為によって飾られた身体は、死によってすぐに滅ぼされることがなかった。まるで〔死が〕友好的であるかのように。

〔蔵文§108〕 それらの生けるものたちの身体は、姿かたちにおいて魅力的で、善なる、輝く光を放つ性質によって飾られた。それらの生けるものたちに死はすぐには現われなかった(早死することはなかった)。

〔3.4.16〕 豊かな富をもつ淨らかな人々に満ちて、身の周囲に海という衣装を着た大地は、色とりどりの画布の最高の美を有し、神々にすら、甚だしい驚嘆を与えた。

〔蔵文〕 対応文なし。

『様々な食物の出現』という、第4節。『すでに生成が終わった状態(住劫期)の、純一に幸福な状態』という、第3章〔おわる〕。

第4章第1節 〔生活の資を〕求めることの開始

〔4.1.1〕 さて〔その後〕かの〔サンマタ〕王と、彼の子孫である〔歴代の〕王たちは、家臣たちを伴って、神々の世界に至った。〔彼らの逝去によって〕大地は、まるで別離のあまりの苦しみによるものかのように、昔のすばらしい輝きを失ってしまった。

〔蔵文§109〕 その後、久しい時が経って、サンマタ大王が亡くなられた。彼の子や孫など、多くの王子らが生まれては死んだ。そして、かの家臣たちもすべて死んだ。

〔蔵文§111〕 このようにして大地も漸次に〔豊穰さを〕涸らして、〔かつての〕完全なるありかたをまったく喪失し、新しいものが減少することと結びついた。また次のように説かれる。すなわち、『夫を失った妻に似て、〔大地

『大いなる帰滅の物語』(Mahāsaṃvartanīkathā)

は王たちを失った悲しみに] すばらしい美しさを失い、年老いた(豊穰さをなくした)、と。

[4.1.2] 次々に悲しくも死去した者たちの後に取り残された人々、[心を抑えて] 悲しみの火を弱めようとした者たちは、王から王の子へ灌頂させることによって、王位の途絶えることのない連続を継続させた。

[蔵文§110] 諸王により[代々]王に灌頂がなされて、王の血統が現在に至るまで継続している。

[4.1.3] 法にかなった行いの喪失に陥ったそれらの者たちは、食物が尽きたのを見て、最勝の牡牛たちの如く、犁先を付けた犁を自ら曳くことをまさにしようとした。

[蔵文§112] その時、残された人間たちは、法なきことに陥ったことと、食物が尽きたことを見て、犁先(*phāla)をつけた犁(*hala)を、まるで牡牛(*balivarda)の如く、自ら曳かんとした。

【並行資料：L87】

[4.1.4] 牡牛の群れのかしらたちはそれらの[人間たち]に語った。
『さあ、わしらだけで犁を曳いてもよい。あなた方は犁をにぎる者となれ。そして収穫の時にもわしらに[その]一部を与える者たれ』。

[蔵文§113] その時、牡牛の群れのかしらは、人間たちにこう語った。『これらの犁を[曳くのを]よせ。わしらだけで[犁を]曳くべきである。収穫の時に、収穫物の一部を与えよ』と。

【並行資料：L88】

[4.1.5] さて[人々は]今や耕作をなし終わって、牡牛たちと一緒に収穫を

分配した。苦勞をした、彼ら(牡牛)を監督するという仕事は、大目に分け前が与えられることで、飾られた(顕彰された)。

〔蔵文§114〕 このように約束をして、それから彼ら(牡牛)は農民の如く田を耕作した。人々は牡牛らに分け前の一部を与えた。

【並行資料：L89】

〔4.1.6〕 これらの〔牡牛たち〕の〔した〕ように、馬などの、乗物として役立つ動物たち(vāhanāḥ)も、彼ら自身の養い手をよく観察しつつ、自分に適したる人間のための乗物になるに至った、他の〔動物たちが従うべき〕法則によって。そのように我々には思われる。

〔蔵文§115〕 このように馬と象なども〔牡牛たちと人間との話合いで〕見たのと全くそのまま同じように語って(同じように約束して)、人間の乗物となった。

〔4.1.7〕 自らは乳を与えないが、自分の子供のために〔授乳に〕熟知した人々は、集まって、泡の冠をかぶったまぶしいほど白い乳を雌牛たちから搾った。

〔蔵文§116〕 すると牛たちが乳を自ら進んで与えていないのに、〔人々の〕様々な努力によって乳が流され、人々は集まって乳搾りをなした。

〔4.1.8〕 貪欲な人間を恐れるためのごとく、砂糖黍は自らの葉をもって体の被覆をなした。〔しかし〕甚だしく汁を欲する人間たちにとって、どのような大なる被覆も存在しえなかった。

〔蔵文§117〕 砂糖黍は葉で自らの体を覆った姿となった。

【並行資料：L93】

[4.1.9] 他の、胡麻などの食物もまた、いささか汁が損なわれることへと至った。[作者の感想:] 変化によって苦しみになることを蒙らないような物が、たとえ昔であろうと、どうして世界に生じようか。

〔蔵文§118〕 胡麻などの食用植物も、汁 (*rasa) を次第に失った。

[4.1.10] すべての食物が劣悪性に至ったので、人間たちの寿命などが減少へと赴いた。[作者の感想:] なぜなら塗料がもし汚れた製造にもとづくのなら、それ (塗料) によって描かれたる絵はすばらしく輝かないものだ。

〔蔵文§119〕 このようにもろもろの食べ物は劣悪化したので、人間たちの寿命などもまた減少した。

[4.1.11] 甚だしい貪欲によって、農夫たちは牡牛たちに [もう] 収穫を分配しなかった。彼らの不正義によって心を傷つけられた牡牛たちは、犁を引くことにおいて、不従順へと至った。

〔蔵文§120〕 その後甚だしい高慢によって田の所有者は牡牛たちに [収穫の] 分け前を与えなかった。すると牡牛たちは収穫の分け前を得られなかったので、犁を引くことに不従順になった。

【並行資料：L90】

[4.1.12] 人間たちによって [犁を] 曳いている時に鞭打たれ、牛たちは荒々しく鼻腔の中間に穴をあけられた。憤怒した人間たちにおどしつけられて、牛たちから言葉すらも消え去った。

33

〔蔵文§121〕 人々は牡牛たちの不従順を見て、かれらの鼻に穴をあけた。その時、牡牛たちの [言葉を] 話すことも消失した。

【並行資料：L91】

〔4.1.13〕 無情な人間たちによろやく服従するに至り、このようにして、すべての牛たちはこの世界で、まるで悪い〔業の〕結果を〔曳くかのように〕、耐えがたい犁やそれに類する他のものを曳くのである。

〔蔵文§122〕 牡牛たちは憫れみなき人間たちに服従して、曳くのが困難な〔ほど重い〕犁やその他のものを、その力によって、曳きつづける。

〔4.1.14〕 明白にその時、人間たちの悪行によって自ら進んで飼い馴らされなくなった象や馬たちなどは、〔手綱の〕引き締めによって制御され、鞭で打たれ、かろうじてそのような苦痛を耐え忍んだのであった。

〔4.1.15〕 まさにそれに対して嫌がり始めた、特別に固い紐で拘束された雌牛たちは、搾乳者たちのきわめて手慣れたやり方による搾乳をなんとか辛うじて耐えたのであった。

〔蔵文§123〕 象と馬なども自ら進んで飼い馴らされなくなった。ある時は〔手綱で〕制御されある時は制御されない^(註43)〔乗物獣〕は杖で打たれるので、嫌がるようになり、固い縄で縛られた。その後、前もって〔御褒美を〕与えることが先行することによって、牛たちは牛飼いたちによって乳搾りされた。

〔4.1.16〕 砂糖黍の汁は〔厚い〕皮をもって(皮を通して)出された。無知をもって食欲をもつ者たちの心が〔生み出される〕如く。しかし人間にとってそれ(皮・無知)をいかにうまく除去することが出来るのかは、想像することも出来なかった。

34 〔蔵文§124〕 砂糖黍は〔厚い〕皮により覆われ、〔圧搾に〕努力することで汁が出された。

〔4.1.17〕 かれら(人間)によって〔汁を取るため〕打たれることで、あたかも病気になったかのように、胡麻などはひどく汁のないものになった。〔作者

『大いなる帰滅の物語』 (Mahāsaṃvartanīkathā)

の感想：] 同伴者の墮落というものは、どんな者においても [同じく] 不幸な状況へと導くものだからである。

〔蔵文§125〕 胡麻などもひどく汁 (bcud) を欠いたものとなった。

〔4.1.18〕 肉体をもつ者たちは、このように [劣悪化した] 食物に親近して、さらにいっそう [身体の] より劣弱になりつつある状態に至った。[それを] 見ることによって、このように自ら [彼らは] 考えた。『定めて、肉体的変化という結果は、この世界では、老化を原因としてもつものではない(そうではなく、食物の劣悪化を原因として肉体の劣弱化が起こるに違いない)』と。

〔蔵文§126〕 このように地上世界の人間たち [にとつての] そのような食物や^(註44)その他の [食物] が味 (ro) をとても欠いたものになったので、人間たちはさらにいっそう [肉体の] 衰えを得た。

第4章における、『[生活の資を] 求めることの開始』という、第1節 [おわる]。

第二部 並行資料の和訳

創世記神話のインド仏教諸部派の聖典伝承

MSKと文献Xの、上に翻訳した部分において、内容として説かれているものは小乗仏教の阿含・ニカーヤ聖典にある人間世界の創世記神話である。この神話を「アッガンニャ神話」と呼びたい。それはパーリ上座部では『アッガンニャ経』(Aggaññasutta) と呼ばれる経典の中に説かれている。

MSKの記述は文献Xに基づいているが、文献Xによるアッガンニャ神話の記述は、正量部が伝持した『アッガンニャ経』に相当する聖典に基づいていると思われる。この正量部の聖典伝承は、他部派の聖典伝承とどの程度に一致し、どの程度に違っていたのか。このことを知るために、パーリ上座部の『アッガンニャ経』の並行資料たる諸部派の聖典資料を、互いに比較する必要がある。幸い、アッガンニャ神話に関しては、パーリ語・サンスクリット語の重要な聖典的資料がMSK以外に四本も現存している。そこでその四本全部の和訳をこの第二部では行ないたい。

ここに翻訳されるものは、次の資料である：

- A パーリ上座部の聖典伝承 『長部経典』^(註45)第27 『アッガンニャ経』
(Aggaññasutta) 中のアッガンニャ神話 (III、84.26-96.8)
- L 犢子正量部の聖典伝承 『ローカ・パンニャッティ』(Lokapaññatti)
中の^(註46)アッガンニャ神話 (I、204.6-216.13)
- S 根本有部の聖典伝承 『破僧事』(Saṅghabhadavastu) 中の^(註47)
アッガンニャ神話 (I、7.13-15.22)
- M 大衆部説出世部の聖典伝承 『マハーヴァストゥ』(Mahāvastu)
中の^(註48)アッガンニャ神話 (I、338.13-348.8)

特にこの中に、『ローカ・パンニャッティ』(略号 Loka-p) という、本来は犢子正量部の伝承たる作品があることが貴重である。この作品の内容はまさしく、正量部の伝承であるMSKの内容と密接に関係する。立世阿毘曇論のパーリ語版

である Loka-p は、校訂者の E. DENIS によって仏訳がなされた。あまりに損なわれた写本伝承のために、Loka-p は漢訳立世論なしでは理解困難な文が多いのであるが、Loka-p の中のチャンダーラ族の形成と副食物および家畜の登場を語る部分については、漢訳立世論に対応部分が欠けている。そのため、DENIS はその部分の Loka-p の翻訳を断念した。しかしその部分を含む Loka-p のアッガンニャ神話の話の全体を、私はこの機会に訳してみることにした。意味不明の箇所が多いとしても、一応この翻訳によって、Loka-p の中に伝わっている伝承が、現存する並行資料の中でMSKの内容に最も近い伝承であることは確認できるであろう^(註49)。第二部で訳された現存するインド語で伝承されている四本に加えて、長阿含小縁経や白衣金幢二婆羅門縁起経、中阿含婆羅婆堂経などの漢訳を諸本の比較に加えるならば、いっそう Loka-p とMSKの同一の系統性が明かになる。

パーリの『アッガンニャ経』については現時点で久野芳隆の訳と向井亨の訳があるが^(註50)、私は神話的食物のラサ (rasa) の語をラサー (rasā) という女性名詞に訂正することを提案し^(註51)、それによって古い翻訳をあちこち書き直す必要を感じるようになったので、最近の学界の成果も取り入れつつ^(註52)新たに翻訳を行った。また私という同一の訳者が他の並行するテキストをひっくるめて全部一度に訳すことにも利点があると思う。同じ単語が出てくれば大体同じ訳語を用いて訳しているので、諸本の文の違いが翻訳を通して比較できるからである。

大衆部説出世部の伝承たる『マハーヴァストゥ』(略号 Mvu) のアッガンニャ神話を翻訳するにあたっては、Émile SENART の校訂本を底本にしつつ^(註53)、Mvu の古い二本の写本 Sa、Sb を絶えず参照した。百年以上前に作られた SENART の校訂本では、アッガンニャ神話の箇所は二本の写本 B、C だけに基づいているが、現代の Mvu の研究においては、この校訂本の他に写本 Sa、Sb を是非参照する必要がある。特に貝葉写本 Sa は Mvu の研究にとって最も価値が高い写本である。幸い写本 Sa、Sb のファクシミリ版が湯山明によって2001年に出版された^(註54)。この出版を契機に、多数の学者が連携して写本 Sa のローマ字転写と研究を進めてゆくべきであろう。その作業の一端を担うつもりで、私

もこの論文の最後に、Mvu のアッガンニャ神話のテキストの写本 Sa のローマ字転写を上げた。これによって写本 Sa が SENART 校訂本とかなり違っていることを確かめることができる。

私の以下の翻訳にある A 1、A 2 などの数字は、私が勝手に付けた段落番号である。これは、アッガンニャ経の並行資料を互いに比較する時に、細かく段落番号が付いていた方が便利だからである。A はパーリ上座部の長部 27 経、L は犢子正量部の Loka-p、S は根本有部の破僧事、M は大衆部説出世部の Mvu のテキストをそれぞれ表わす。

A パーリ上座部の聖典伝承『アッガンニャ経』

A 1 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、長い時の経過ののちに、いつか、この世界が帰滅する (散壊する) [壊劫の] 時がくる。この世界が帰滅している [壊劫と空劫の] 間、生ける者たちは多くがアーバッサラ天 (光音天) に回帰した存在となる。

A 2 彼らはそこにおいて、マナス (精神) から成る存在であり、歡喜を食べ、自ら光を放ち、空中を遊泳し、淨福な状態のままですっとあり、長く久しい時を過ごす。

A 3 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、[それから] 長い時が経過すると、いつか、この世界が再び起成する (生成展開する) 時がやって来る。この世界が起成している [成劫の] 時に、大部分の生ける者たちはアーバッサラ天より 《p. 85》 死んで [別の生に] 移行し、この世 (地上世界) にやって来る。

A 4 彼らは、マナス (精神) から成る存在であり、歡喜を食べ、自ら光を放ち、空中を遊泳し、淨福な状態のままですっとあり、長く久しい時を過ごす。

A 5 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、その時に、[地上世界すべてが] 一つの水である状態があり、闇、全き闇があった。太陽も月も [未だ] 知られなかったし、星々 (星座) や星の煌めきも知られなかった。昼も夜も知られなかったし、[暦の] 月も半月も知られなかったし、季節も年も知られなかった。男も女も知られなかった。生ける者は「生ける者」という名 [だけ] を有した。

A 6 さてヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、[それから] 長い時が経

過して、いつかある時に、それら生ける者たちのために、『ラサーなる地』(rasā pathavī) [という神話的な食物] が^(註55)、水 [の表面] に一面に広がった。

A7 それはちょうど、乳が煮られてから冷まされた時、[乳の]表面に膜ができるように、出現した。それ(ラサーなる地、女性名詞)は色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。ちょうど完璧に出来たサルピス(ギー)や、完璧に出来た生バターのような、そのような色を有しており、純粋な蜜のような、そのような味わいがあった。

A8 すると、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、欲深く落ち着かない性質の或る一人の生ける者がいて、「ほう！これはいかなるものだろう」と、『ラサーなる地』を指先で味わった。彼は『ラサーなる地』を指で味わって、喜悅した。そして彼に欲望が生じた。

A9 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、他の生ける者たちもまた、その生ける者を見たとおりに模倣して、『ラサーなる地』を指で味わった。彼らは『ラサーなる地』を指で味わって、喜悅した。そして彼らに欲望が生じた。さてヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちは、『ラサーなる地』を、両手で [ひと塊りに握って] 団子にしな^(註56)ながら食べるようになった。

A10 《p. 86》ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちが、両手で [ひと塊りに握って] 団子にして、『ラサーなる地』を食するようになったので、それ故に、そのとき彼ら生ける者たちから自ら [の体から] 放つ光が消え失せてしまった。

A11 自ら放つ光が消え失せると、太陽と月が出現した。太陽と月が出現すると、星々(星座)、星の煌めきが出現した。星々、星の煌めきが出現すると、昼と夜が知られた。昼と夜が知られると、[暦の]月と半月が知られた。月と半月が知られると、季節と年が知られた。

A12 ここまで(このような状態まで)、再びこの世界が [成劫の間に] 展開し終わった^(註57)。

A13 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちは『ラサーなる地』を食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長

く久しい時を過ごした。ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、そのように彼ら生ける者たちが、『ラサーなる地』を食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごしているうちに、次第に、彼ら生ける者たちの身体は堅粗なものとなった。そして容色の美しさと醜さ(肌の色の変化)が知られた。彼らのうちで、或る生ける者たちは美しい容色(肌の色)をもち、或る者たちは醜くなった。

A14 そのとき、美しい容色(肌の色)をもつその生ける者たちは、かの醜い生ける者たちを蔑んだ。「私たちはこの者たちよりも美しい容色をもつ。この者たちは私たちよりも醜い」と。高慢と傲りという性質を有した彼らから、容色への傲りを原因として、『ラサーなる地』は消え失せてしまった。『ラサーなる地』が消え失せてしまったとき、彼らは集会し、嘆いた。「おお、ラサーを[失った]！ラサーを[失った]！」と。

A15 この今の時代に、人びとは、何かすばらしい味を得たならば、次のようにいう——「ああ、[この] 美味(ラサ)を[ご覧]！ああ、[この] 美味(ラサ)を[ご覧]！」と。[その場合、彼らは] かの古い、昔から続く言葉を想起しているのであるが、しかもその意味を理解していない。

A16 さて、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちから『ラサーなる地』が《p. 87》消え失せたとき、『地のパッパタカ』が出現した。ちょうどマッシュルーム [が大地の上に出現する] ように、そのように出現した^(#58)。それは色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。ちょうど完璧に出来たサルピス(ギー)や、完璧に出来た生バターのような、そのような色を有しており、純粋な蜜のような、そのような味を有していた。

40 A17 そして、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちは、『地のパッパタカ』を食するようになった。彼ら生ける者たちは、それを食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、そのように彼ら生ける者たちが、『地のパッパタカ』を食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごしているうちに、次第にいっそう彼ら生

ける者たちの身体は堅粗なものとなった。そして容色の美しさと醜さ（肌の色の変化）が知られた。彼らのうちで、或る生ける者たちは美しい容色（肌の色）をもち、或る者たちは醜くなった。そのとき、美しい容色をもつその生ける者たちは、かの醜い生ける者たちを蔑んだ。「私たちはこの者たちよりも美しい容色をもつ。この者たちは私たちよりも醜い」と。

A18 高慢と傲りという性質を有した彼らから、容色（肌の色）への傲りを原因として、『地のパッパタカ』は消え失せてしまった。

A19 『地のパッパタカ』が消え失せてしまったとき、バダーラターが出現した^(註59)。ちょうどカランプカー[という草]のように、そのように出現した。それは完全な色、完全な香り、完全な味をそなえていた。ちょうど完璧に出来たサルピス（ギー）や完璧に出来た生バターのような、そのような色であった。純粋な蜜のような、そのような味であった。

A20 そして、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちは、バダーラターを食するようになった。彼ら生ける者たちは、それを食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、そのように彼ら生ける者たちが、バダーラターを食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごしているうちに、次第にいつそ彼ら生ける者たちの身体は堅粗なものとなった。そして容色の美しさと醜さ（肌の色の変化）が知られた。《p. 88》彼らのうちで、或る生ける者たちは美しい容色（肌の色）をもち、或る者たちは醜くなった。そのとき、美しい容色をもつその生ける者たちは、かの醜い生ける者たちを蔑んだ。「私たちはこの者たちよりも美しい容色をもつ。この者たちは私たちよりも醜い」と。

A21 高慢と傲りという性質を有した彼らから、容色への傲りを原因として、彼らからバダーラターは消え失せてしまった。

A22 バダーラターという蔓草類が消え失せてしまったとき、彼らは集会し、そして嘆いた。「ヴァタ（なんと）、それは我らのものだったのに！ヴァタ、それは我らから失われてしまった、バダーラターが！」と。この今の時代でも人々がある苦の出来事に襲われると、次のようにいう——「ヴァタ（なんと）、それ

は我らのものだったのに！ヴァタ、それは我らから失われてしまった！」と。

[その場合、彼らは] かの古い、昔から続く言葉を想起しているのであるが、しかもその意味を理解していない。

A23 さて、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちからバダーラターが消え失せたとき、耕さずに実る稲が出現した。[それは] 『糠がなく、粃殻がなく、浄らかで芳ばしく香る実をもつ』 (韻文)。もし夕べに夕食のために [米 (稲穂) を] 取り去っても、朝には熟して再成長しており、またもし朝に朝食のために取り去っても、夕べには熟して再成長していた。[穂首の] 刈り取られて無くなった跡^(註60)は見られなかった。

A24 そこで、ヴァーセッタよ、彼ら生ける者たちは耕さずに実る米を食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、そのように彼ら生ける者たちが、米を食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごしているうちに、次第にいつそう彼ら生ける者たちの身体は堅粗なものとなった。容色 (肌の色) の差異が知られた。女には女の性的表徴 (女性器) が、男には男の性的表徴 (男性器) が現われた。

A25 そして、女は男を [つよく想い焦がれつつ] ととても長い間みつめ、男は女をみつめた。とても長い間互いにみつめあっている彼らに、欲情が起こり、[渴望の] 火によって焼ける状態が身体に起こった。

A26 彼らは [渴望の] 火に焼ける状態のゆえに、ついに淫なる法 (性交) をなすようになった。

A27 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、その時にかの生ける者たちは、淫なる法 (性交) をしている者たちを目撃した。或る者たちは土くれを投げつけ、或る者たちは灰を《p. 89》投げつけ、或る者たちは牛糞を投げつけた。

42 「滅びよ (いなくなれ)、穢らわしい者！滅びよ、穢らわしい者！」、「どうして生ける者が生ける者にこのようにふるまうのか」と。

A28 この今の時代でも人々は、ある地方では [両親の家から夫の家に] 連れられてきた花嫁に対し、ある者たちは土くれを投げつけ、ある者たちは灰を投げつけ、ある者たちは牛糞を投げつける^(註61)。[その場合、彼らは] かの古い、

昔から続く言葉を想起しているのであるが、しかもその意味を理解していない。

A29 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、その時には、非法とみなされたことが、この今の時代では [正しい] 法とみなされている。

A30 また、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、その当時、淫なる法 (性行為) をなした生ける者たちは、一月の間あるいは二月の間、村や町に入ることが出来なかった。

A31 ヴァーセッタよ、彼ら生ける者たちはその時期に、甚だしく非法 (性行為) に惑溺したので、それ故にその非法を隠すために、彼らは家屋を作るようになった。

A32 さて、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、怠惰に生まれついた或る一人の生ける者はこう考えた、「ああ、一体どうして私は夕べには夕食のために、朝には朝食のために米 (稲穂) を取ってきて^(註62)、苦勞しているのであろう。夕食と朝食のため米を一度に取ってきたらどうだろう」と。そこで、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、かの生ける者は、夕食と朝食のための米を一度に取ってきた。

A33 時に、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、他の生ける者がその生ける者のもとにやってきた。やって来て、その生ける者にこう言った——「さあ、生ける者よ、米 (稲穂) を取りに行こう」。「いや、たくさんだ、生ける者よ。私は夕食と朝食のための米を一度に取ってきているのだ」。そこで、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、その生ける者は、かの生ける者を見倣って、米を二日分一度に取ってきた。「なるほど、君、これはよい」。

A34 時に、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、他の生ける者がその生ける者のもとにやってきた。やって来て、《p. 90》その生ける者にこう言った——「さあ、生ける者よ、米を取りに行こう」。「いや、たくさんだ、生ける者よ。私は夕食と朝食のための米を二日分一度に取ってきているのだ」。そこで、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、その生ける者は、かの生ける者を見倣って、米を四日分一度に取ってきた。「なるほど、君、これはよい」。

A35 時に、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、他の生ける者がその生ける者のもとにやってきた。やって来て、その生ける者にこう言った——「さ

あ、生ける者よ、米を取りに行こう。「いや、たくさんだ、生ける者よ。私は夕食と朝食のための米を四日分一度に取ってきているのだ」。そこで、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、その生ける者は、かの生ける者を見倣って、米を八日分一度に取ってきた。「なるほど、君、これはよい」。

A36 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちが米を貯蔵して食べるようになったので、それ故に糠が [稲の] 実を包み、粃殻が実を包むようになり、刈ったら再び成長しなくなり、[穂首の]刈り取られて無くなった跡が見られた。稲が林のように [群ごとに整然と] 立ち並ぶようになった。

A37 そこで、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちは集会し、そして嘆いた。

A38 「おお君たち、不法が生ける者たちの間に現われた。なぜなら、私たちはかつて、マナス (精神) から成る存在であり、歓喜を食べ、自ら光を放ち、空中を遊泳し、浄福な状態のままずっとあり、悠久の時を過ごしていた。

A39 長い時が経過したある時、その [時の] 私たちのために、ラサーなる [液汁質の] 地 [の成分] が水のうえ一面に広がった。それ (ラサーなる地) は色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。その私たちは、『ラサーなる地』を、両手で [ひと塊りに握って] 団子にして食べるようになった。その私たちが両手で団子にして『ラサーなる地』を食しているうちに、自ら [の体から] 放つ光が消え失せてしまった。それが消え失せると、太陽と月が出現した。太陽と月が出現すると、星々 (星座)、《p. 91》星の煌めきが出現した。星々、星の煌めきが出現すると、昼と夜が知られた。昼と夜が知られると、[暦の] 月と半月が知られた。月と半月が知られると、季節と年が知られた。その私たちは、『ラサーなる地』を食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。その私たちに

44 悪しき不善なる法が現われたので、『ラサーなる地』は消え失せてしまった。

A40 『ラサーなる地』が消え失せたとき、『地のパッパタカ』が出現した。それは色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。その私たちは、『地のパッパタカ』を食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。その私たちに悪し

き不善なる法が現われたので、『地のパッパタカ』は消え失せてしまった。

A41 『地のパッパタカ』が消え失せたとき、バダーラターが出現した。それは色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。その私たちは、バダーラターを食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。その私たちに悪しき不善なる法が現われたので、バダーラターは消え失せてしまった。

A42 バダーラターが消え失せたとき、耕さずに実る稲が出現した。[それは] 『糠がなく、粃殻がなく、浄らかで芳ばしく香る実をもつ』。もし夕べに夕食のために取り去っても、朝には熟して再成長しており、またもし朝に朝食のために取り去っても、夕べには熟して再成長していた。[穂首の]刈り取られて無くなった跡は見られなかった。その私たちは耕さずに実る米を食べながら、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。その私たちに悪しき不善なる法が現われたので、糠が [稲の] 実を包み、粃殻が実を包むようになり、刈ったら再び生長しなくなり、[穂首の]刈り取られて無くなった跡が見られるようになった。《p. 92》稲が林のように [群ごとに整然と] 立ち並ぶようになった。

A43 さあ私たちは、稲 [田] を分割しようではないか。[稲田の] 境界を設定しようではないか。そこで、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちは、稲 [田] を分割し、境界を定めた。

A44 さて、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、欲望に駆られて絶えず落ち着かない性質の或る一人の生ける者がいて、自分の分け前 [の稲田] を守りながら、他の者の分け前 [の稲田] から盗んで食べた。

A45 彼らはその者を捕え、捕えてからこう言った。「生ける者よ、お前は悪をはたらいたな。自分の分け前を守りながら、他の者の分け前から盗んで食べるとは！生ける者よ、決して再びこのようなことをするな」。

A46 「君、わかった」と、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、かの生ける者は彼ら生ける者たちに答えた。

A47 しかし再度、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、自分の分け前を守りながら、他の者の分け前から盗んで食べた。彼らはその者を捕え、捕え

てからこう言った。「生ける者よ、お前は悪をはたらいたな。自分の分け前を守りながら、他の者の分け前から盗んで食べるとは！生ける者よ、決して再びこのようなことをするな」。

A48 三たび、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、かの生ける者は自分の分け前を守りながら、他の者の分け前から盗んで食べた。彼らはその者を捕え、捕えてからこう言った。「生ける者よ、お前は悪をはたらいたな。自分の分け前を守りながら、他の者の分け前から盗んで食べるとは！生ける者よ、決して再びこのようなことをするな」。

A49 [そういつて]ある者たちは手で打ち、ある者たちは土の塊を投げ、ある者たちは杖でたたいた。

A50 それ以来、実に、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、盗むことが知られ、[罪を]責めることが知られ、嘘をつくことが知られ、懲罰すること(杖を取ること)が知られた。

A51 そこで、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちは集会した。集会して、嘆いた。

A52 「おお皆さん、まさに悪しき法が生ける者たちの間に現われたのだ。盗むことが知られ、[罪を]責めることが知られ、嘘をつくことが知られ、懲罰することが知られたのだから。

A53 さあ、私たちは一人の生ける者を [最高者に] 認定しようではないか。彼は私たちのために正しく非難されるべき者を非難してくれるであろう、正しく譴責されるべき者を譴責してくれるであろう、正しく追放されるべき者を追放してくれるであろう。一方私たちは彼に米の分け前を与えるであろう」。《p. 93》

A54 そこで、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちは、彼らの中で最も美しく、最も見目かたちよく、最も端正で、最も偉大さをもつ生ける者のところに赴いて、こう言った。

A55 「さあ、生ける者よ、あなたは正しく非難されるべき者を非難してください、正しく譴責されるべき者を譴責してください、正しく追放されるべき者を追放してください。一方私たちはあなたに米の分け前を与えるでありましょ

う」。

A56 「君たちよ、わかった、そうしよう」と、ヴァーセッタ[とバーラドヴァージャ]よ、かの生ける者は彼ら生ける者たちに同意し、正しく非難されるべき者を非難し、正しく譴責されるべき者を譴責し、正しく放逐されるべき者を放逐した。一方、彼らはその者に米の分け前を与えた。

A57 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、『大衆によって [最高者に] 認定された者 (マハージャナ・サンマタ)』という意味から、[王の名称である]『マハー・サンマタ』、『マハー・サンマタ』という第一番目の言葉が生じた。

A58 ヴァーセッタ[とバーラドヴァージャ]よ、『田の主(ケッターナン・パティ)』という意味から、[王の名称である]『カッティヤ』(クシャトリヤ)、『カッティヤ』という第二番目の言葉が生じた。

A59 ヴァーセッタ[とバーラドヴァージャ]よ、『法によって他を喜ばせる(ランジェーティ)』という意味から、[王の名称である]『ラージャー』(王)、『ラージャー』という第三番目の言葉が生じた。

A60 したがって、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、古い、昔から続く言葉をとまなう、このカッティヤ (クシャトリヤ) の社会的集団の成り立ちは、このようなものであった。[これは] それらの [カッティヤの] 生ける者たちの [成り立ち] なのであって、他の者たちの [成り立ち] なのではない。また [彼らと] 同等の者の [成り立ち] なのであって、同等でない者の [成り立ち] なのではない。また法にもとづいた [成り立ち] なのであって、非法にもとづいた[成り立ち]なのではない。なぜなら、ヴァーセッタ[とバーラドヴァージャ] よ、法が、現世と来世とにわたって、この人々の間で最高のものであるからである。

A61 さて、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、かの生ける者たちのある者たちはこう考えた。「君、まさに、悪しき法が生ける者の間に現われた。盗むことが知られ、[罪を]責めることが知られ、嘘をつくことが知られ、懲罰することが知られたのだから。私たちは悪しき不善なる法を追い出そうではないか」。彼らは悪しき不善なる法を追い出した。《p. 94》ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、『悪しき不善なる法を追い出す (バーヘンティ)』という意

味から、[バラモンの名称である]『ブラーフマナ』、『ブラーフマナ』という第一番目の言葉が生じた。

A62 彼らは森林の地に木葉の小屋を作って、木葉の小屋で瞑想した。木炭なく、煙なく、杵は下に置かれた^(註63)。夕べには夕食のために、朝には朝食のために、食物を求めて村・市場町・王都にやってきた。彼らは食物を得てから、再び森林の地における木葉の小屋で瞑想した。人々はこれを見て次のように言った——「君、この生ける者たちは森林の地に木葉の小屋を作って、木葉の小屋で瞑想する。木炭なく、煙なく、杵は下に置かれた。夕べには夕食のために、朝には朝食のために、食物を求めて村・市場町・王都にやって来る。彼らは食物を得てから、再び森林の地において木葉の小屋で瞑想する」と。ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、『瞑想する (ジャーヤンティ)』という意味から、[バラモンの名称である]『ジャーヤカ』(祭式の火を燃やす人)、『ジャーヤカ』という第二番目の言葉が生じた。

A63 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、彼ら生ける者たちのある者たちは、森林の地にある木葉の小屋で瞑想を行うことができなくなり、村の付近や市場町の付近にやって来て、[聖なるヴェーダの]諸文献を作りながら住んだ。人々はこれを見て次のように言った。「君、この者たちは、森林の地にある木葉の小屋で瞑想を行うことができなくなり、村の付近や市場町の付近にやって来て、[聖なる]諸文献を作りながら住んでいる。今やこの者たちは瞑想しない」と。ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、『今やこの者たちは瞑想をしない (ナ・ジャーヤンティ)』という意味から、[バラモンの名称である]『アッジャーヤカ』(ヴェーダを学習する者)、『アッジャーヤカ』という第三番目の言葉が生じた。

48 A64 ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、その時には、劣っている [集団] とみなされたものが、この今の時代では最高の [集団] とみなされている。

A65 したがって、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、古い、昔から続く言葉をとמונאう、このバラモンの社会的集団の成り立ちは、このようなものであった。《p. 95》 [これは] それらの [バラモン族の] 生ける者たちの [成り立ち] なのであって、他の者たちの [成り立ち] なのではない。また [彼ら

と] 同等の者の [成り立ち] なのであって、同等でない者の [成り立ち] なのではない。また法にもとづいた [成り立ち] なのであって、非法にもとづいた [成り立ち] なのではない。なぜなら、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、法が、現世と来世とにわたって、この人々の間で最高のものであるからである。

A66 さて、ヴァーセッタよ、彼ら生ける者たちのある者たちは、淫法(夫婦生活)を受持し、あらゆるさまさまの(ヴィッス)^(註64)仕事に従事した。ヴァーセッタよ、『淫法(夫婦生活)を受持し、あらゆるさまさまの(ヴィッス)仕事に従事する』という [表現] という意味から、[ヴァイシャ階級の名称である] 『ヴェッサ』、『ヴェッサ』という言葉が生じた。

A67 したがって、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、古い、昔から続く言葉をとまなう、このヴェッサ(ヴァイシャ)の社会的集団の成り立ちは、このようなものであった。[これは] それらの [ヴァイシャ族の] 生ける者たちの [成り立ち] なのであって、他の者たちの [成り立ち] なのではない。また [彼らと] 同等の者の [成り立ち] なのであって、同等でない者の [成り立ち] なのではない。また法にもとづいた [成り立ち] なのであって、非法にもとづいた [成り立ち] なのではない。なぜなら、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、法が、現世と来世とにわたって、この人々の間で最高のものであるからである。

A68 さて、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、かの生ける者たちの中で残りの者たちは、おそろしい残忍な仕業(狩猟あるいは死刑執行人の仕事)を有した。ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、『おそろしい残忍な仕業を有するもの(ルッターチャーラ)』、『卑しい仕業を有するもの(クッターチャーラ)』という意味から、[シュードラ階級の名前である] 『スッタ』、『スッタ』という言葉が生じた。

A69 したがって、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、古い、昔から続く言葉をとまなう、このスッタ(シュードラ)の社会的集団の成り立ちは、このようなものであった。[これは] それらの [シュードラ族の] 生ける者たちの [成り立ち] なのであって、他の者たちの [成り立ち] なのではない。また [彼

らと] 同等の者の [成り立ち] なのであって、同等でない者の [成り立ち] なのではない。また法にもとづいた [成り立ち] なのであって、非法にもとづいた [成り立ち] なのではない。なぜなら、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、法が、現世と来世とにわたって、この人々の間で最高のものであるからである。

A70 さて、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、ある時から、カッティヤ (クシャトリア) の者でも自分たちの法 (社会におけるあり方) を批判し、家を出て家がない生活へ入る (出家する) ようになった、「沙門になろう」と。ブラーフマナ (バラモン) の者でも自分たちの法を批判し、家を出て家がない生活へ入るようになった、「沙門になろう」と。ヴェッサ (ヴァイシャ) の者でも自分たちの法を批判し、《p. 96》家を出て家がない生活へ入るようになった、「沙門になろう」と。スッタ (シュードラ) の者でも自分たちの法を批判して、家を出て家がない生活へ入るようになった、「沙門になろう」と。ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、これら四つの集団 (階級) から沙門の集団 (僧団) が成り立った。

A71 [これは] それらの [沙門という] 生ける者たちの [成り立ち] なのであって、他の者たちの [成り立ち] なのではない。また [彼らと] 同等の者の [成り立ち] なのであって、同等でない者の [成り立ち] なのではない。また法にもとづいた [成り立ち] なのであって、非法にもとづいた [成り立ち] なのではない。なぜなら、ヴァーセッタ [とバーラドヴァージャ] よ、法が、現世と来世とにわたって、この人々の間で最高のものであるからである。

L 犢子正量部の聖典伝承『ローカ・パンニャッティ』

L 1 その時三十三天・四大王天・ヤーマ天の領域の神々が生じる。

50 L 2 或る生ける者たちは寿命が尽きたため、福德が尽きたために、それら [の神々の諸世界] から死んで [別の生に] 移行し、この世 (地上世界) にやって来る。

L 3 彼らはここにおいて、歓喜を食べ、歓喜を糧とし、マナス (精神) から成る存在であり、自ら光を放ち、空中を遊泳し、安楽な状態のままずっとあり

つづける。

L 4 その時に、太陽も月も世界に [未だ] 知られなかった。星々 (星座) も、昼も夜も、[暦の] 月も半月も、季節も年も知られなかった。母も知られず、父も知られず、兄弟、姉妹、息子も知られず、娘も、妻も、女奴隷も男奴隷も知られなかった。完全な自由なる状態 [があり]、実にそれのみを生ける者たちは享受した。[彼らは] 「生ける者」という名 [だけ] を有した。

L 5 [雨によってもたらされ、地上世界を浸した] かの水は尽き、消滅するに到った。[大地が] 割かれた状態であるところには、大海が、[水に] 満たされたり [水を] 注ぎ出したりしながら (満潮や干潮の時にも?)、あり続けた。また河口が成立した。

L 6 水を有するそれらのところで、ラサという名前をもつ地が^(註65)初めて出来た。それ (地、女性名詞) は香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有していた。

L 7 快い香りが立ち昇った。彼ら生ける者たちはその香りを嗅いで、『地のラサ』 (pathavi-rasa) を味わった。

L 8 或る一人の生ける者はその『ラサなる地』 (rasa-pathavi) を指先でとって味わってみて、[それから] 食べた。再び彼はそれを団子にしながら、一口分の大きさにしながら、食べるようになった。

L 9 [他の] 彼ら生ける者たちは、その一人の生ける者が、《p. 205》香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している『ラサなる地』を、団子にしながら、一口分の大きさにしながら、食べているのを見た。[彼らは] 見て、その者を見たとおりに模倣した。それらの生ける者たちも、その『ラサなる地』を、団子にしながら、一口分の大きさにしながら、食べるようになった。

L 10 彼ら生ける者たちは、香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、その『ラサなる地』を、団子にしながら、一口分の大きさにしながら、食するようになったので、それ故に、[次第に] 彼らの身体は堅粗な

ものとなった。[彼らは]以前のように空中に行くことが出来なくなった。かの
[身体から放つ]光、容色(肌の色)の輝いて美しい様子が彼らから消えてしま
い、闇と暗黒が彼らに現れた。

L11 しかし、このことは常法であるが、闇と暗黒が現れると同時に、月と太
陽が世界に現れるのである。月と太陽が世界に出現してから、星々(星座)が知
られた(現れた)。星々が知られると、昼と夜が知られた。昼と夜が知られると、
[暦の]月と半月も知られた。月と半月が知られると、季節と年が知られた。

L12 ここまで(このような状態まで)、世界が[成劫の間に]展開し終わった。
ここまで(この時点まで)、六十小劫が経過した^(註66)。

L13 彼ら生ける者たちはそれ(ラサ)を食する者として、それを糧とする者と
して、長い時を過ごした。彼ら生ける者たちがそれを食する者として、それを
糧とする者として、長い時を過ごしているうちに、[生ける者たちの間で]より
多くその食物を食べた生ける者たちは、より劣った容色(肌の色)、より劣った
偉大さ、より劣った神通力、より劣った神的な力をもつようになった。より少
なくその食物を食べた生ける者たちは、[多く食べた者たちと比べて]より美し
い容色(肌の色)、より勝れた偉大さ、より大きな神通力、より大きな神的な力
をもつようになった。このようにして、容色の(美醜の)違いが世に現れた。

L14 容色の違いが世に現れた後、美しい容色の者は醜い容色の者を蔑んだ、
「私はあなたよりも美しい容色(肌の色)をもつ。あなたは私よりも醜い」と。
このようにして、悪しき不善なる法が世に現れた。悪しき不善なる法が世に出
現したので、容色への傲りを性質として有した《p. 206》彼らから、香り[の良
さ]をそなえ、色[の美しさ]をそなえ、味[の良さ]をそなえていて、まる
で純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、その『ラサなる地』が、
消え失せてしまった。

52 L15 彼ら生けるものたちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆い
た。「ああ、君、悪しき不善なる法が世界に現れた。悪しき不善なる法が世に出
現したので、容色(肌の色)への傲りを性質として有した私たちから、香り[の
良さ]をそなえ、色[の美しさ]をそなえ、味[の良さ]をそなえていて、ま
るで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、その『ラサなる地』

が、消え失せてしまった」と。

L16 これについて、この今の時代でも生ける者たちは、或るすぐれた味を味わうと、「おお、美味が(ラサ) [ある]！」と嘆声を発するのである。昔のその『地のラサ』(pathavi-rasa)を嘆いているのに、その[時に]言われることの意味を[今の人々は]知らない。

L17 彼ら生ける者たちから『ラサなる地』が消えてしまったので、それ故に、彼らに、香り[の良さ]をそなえ、色[の美しさ]をそなえ、味[の良さ]をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、『地のパッパタカ』が現れた^(註67)。

L18 それを彼らは食べるようになった。彼ら生ける者たちはそれを食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。彼ら生ける者たちがそれを食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごしているうちに、[生ける者たちの間で]より多くその食物を食べた生ける者たちは、より劣った容色(肌の色)、より劣った偉大さ、より劣った神通力、より劣った神的な力をもつようになった。より少なくその食物を食べた生ける者たちは、[多く食べた者たちと比べて]より美しい容色(肌の色)、より勝れた偉大さ、より大きな神通力、より大きな神的な力をもつようになった。このようにして、容色の(美醜の)違いが世に現れた。容色の違いが世に現れた後、美しい容色の者は醜い容色の者を蔑んだ、「私はあなたよりも美しい容色をもつ。あなたは私よりも醜い」と。このようにして、悪しき不善なる法が世に現れた。

L19 悪しき不善なる法が世に出現したので、容色(肌の色)への傲りを性質として有した悪しき彼らから、その『地のパッパタカ』が、消え失せてしまった^(註68)。

L20 彼ら生けるものたちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。「ああ、君、悪しき不善なる法が世界に現れた。悪しき《p. 207》不善なる法が世に出現したので、容色(肌の色)への傲りを性質として有した私たちから、香り[の良さ]をそなえ、色[の美しさ]をそなえ、味[の良さ]をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、あの『ラサなる地』が、消え失せてしまった。[そして]私たちに有った『地のパッパタカ』

が、消え失せてしまった」と。

L21 彼ら生ける者たちから『地のパッパタカ』が消えてしまったので、それ故に彼らに、香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、『パダーラター [という] 蔓草』 (padālatā-valli) が現れた。

L22 それを彼らは食べるようになった。彼ら生ける者たちはそれを食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。彼ら生ける者たちがそれを食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごしているうちに、[生ける者たちの間で] より多くその食物を食べた生ける者たちは、より劣った容色 (肌の色)、より劣った偉大さ、より劣った神通力、より劣った神的な力をもつようになった。より少なくその食物を食べた生ける者たちは、[多く食べた者たちと比べて] より美しい容色 (肌の色)、より勝れた偉大さ、より大きな神通力、より大きな神的な力をもつようになった。このようにして、容色の (美醜の) 違いが世に現れた。容色の違いが世に現れた後、美しい容色の者は醜い容色の者を蔑んだ、「私はあなたよりも美しい容色をもつ。あなたは私よりも醜い」と。このようにして、悪しき不善なる法が世に現れた。

L23 悪しき不善なる法が世に出現したので、容色 (肌の色) への傲りを性質として有した悪しき彼らから、その『パダーラター [という] 蔓草』が、消え失せてしまった。

L24 彼ら生けるものたちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。「ああ、君、悪しき不善なる法が世界に現れた。悪しき不善なる法が世に出現したので、容色 (肌の色) への傲りを性質として有した私たちから、あの『ラサなる地』が、消え失せてしまった。[そして] 私たちに有った『地のパッパタカ』が、消え失せてしまった。[さらに] 私たちに有った、香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、『パダーラター [という] 蔓草』も消えてしまった」と。これについて、この今の時代でも、《p. 208》ある苦の出来事に襲われると、生ける者たちは次のように、嘆声 (ウダーナ) を発する。

「ヴァタ (なんと)、それは我らのものだったのに！ヴァタ、それは我らから失

われてしまった！」と。昔のその『パダーラターなる蔓草』を嘆いているのに、その [時に] 言われることの意味を [人々は] 理解してない。

L25 彼ら生ける者たちから『パダーラターなる蔓草』が消えてしまったので、それ故に彼らに、香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、申し分のない、糠がなく、粃殻がない実をもつ稲が現れた。

L26 それを彼らは食べるようになった。彼ら生ける者たちにおいて、その粗大な [物質から成る] 食事のせいで、女には女の性的特徴が現れ、男には男の性的特徴が現れた。

L27 それら生ける者たちに出現したその女の性的特徴を [初めて] 見た者たちは、次のように語った、「ああ！君、生ける者が墮落してしまった！」と^(註69)。

L28 これについて、この今の時代においても、御婦人方には、古いいつたえによって、『墮落した生ける者』という名称があるのである。

L29 彼ら生ける者たちにおいて、女には女の性的特徴が現れ、男には男の性的特徴が現れたので、それ故彼らのために『如意樹 [から生じた] 衣』が [世界に] 出現した、その [体の] 外形における隠し所を覆い隠すために^(註70)。

L30 女は男を [長く] みつめた。また男は女を [長く] みつめた。みつめあっている彼らに欲情が生じた。

L31 欲情における [渴望の] 火によって焼かれつつある者たちは、交合をなした。

L32 生ける者たちは、或る生ける者と交合している或る生ける者を目撃した。彼らはこの思った、「この者はこの者 (女) を [乱暴して] 害するのではないかと。彼らはこう思った、「ああ、なんてひどい奴だ、[この] 生ける者は！ [人の] なしてはならないことをする！一体なぜ、生ける者が生ける者を害そうとするのか！」と。[彼らは] その [生ける者] に木片を投げつけた。土の塊を投げつけた。

L33 他の或る者たちは言った、「非難すべきだ！ 阻止すべきだ！ (ガラヘーヤータ、ヴァーレーヤータ)」と。その言葉が生じた。

L34 これについて、この今の時代でも、連れられてきた花嫁にたいし、木片

が投げられるのである。

L35 欲情が[婚姻の風習の原因として]存在する。《p. 209》このようにして、古代の人々にとって非法と見なされていたことや、なしてはならないことと見なされていたこと、それがこの今の時代においては[正しい]法と見なされ、なすべきことと見なされている。このようなかたちで、無知に陥った者たちは、迷妄を有している。

L36 生ける者たちは、或る生ける者と交合している或る生ける者を目撃した。彼ら生ける者は、その者たちを法として同意された[掟]に従って、咎めて、追放した。そこ[の共同体]において、その[追放された]者は一箇月の間姿を見せず、二箇月の間姿を見せない。

L37 女は男に語った、「これはあなたが[妻として]見つけた女(ヴィッター)だ」。男は女に語った、「これはあなたが[夫として]見つけた男(ヴィットー)だ」。それ以来、「結婚した女(ヴィッター)」、「結婚した男(ヴィットー)」という言葉が生じた。

L38 その不法(性行為)によって恥じ入らされた彼ら生ける者たちは、密林にまで入りこんだ。叢林にまで入り込んだ。河のために通行不能の場所にまで入り込んだ。彼らは密林などに入り込んで、それらの場所で、その不法(性行為)に耽ったのだった。その生ける者たちは今や甚だしく不正なる法(性行為)になすにいたったため、それ故に彼らにおいて不正なる法が知られた(周知のものとなった)。この不正なる法(性行為)に耽るために、この者たちは、不正なる法のゆえに、家(ゲーハ)を作った^(註71)。こうして家(ゲーハ)という言葉が生じた。

L39 かの生ける者たちは、香り[の良さ]をそなえ、色[の美しさ]をそなえ、味[の良さ]をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、耕作が不要な、申し分のない、糠がなく、粃殻がない実をもつその稲を、夕べには夕食として取りに行き、朝には朝食として取りに行った。

L40 夕べに彼らは[米(稲穂)を]取り去ったが、[翌]朝にはそれは熟した実となって再び成長していた。朝食のために朝に彼らは[米を]取り去ったが、[夕べには]夕食のためにそれは熟した実となって再び成長していた。刈られたものは再び成長するので、[穂首の]刈り取られて無くなった跡は見られな

かった。

L41 或る一人の生ける者はこう考えた、「一体どうして私は夕べには夕食のため、朝には朝食のために、米(稲穂)を取るために出かけて行かなければならないのか。夕食と朝食の米を一度に《p. 210》取ってきたらどうだろう」。彼は夕食と朝食のため一度に米を取ってきた。他の生ける者たちがその生ける者に言った。「さあ、生ける者よ、米(稲穂)を取りに行こう」。その生ける者は言った。「私は夕食と朝食の米を一度にもってきた。あなた方にとって〔出かける〕時間だと思えばなら〔さあ、お行きなさい〕 (さようなら)」。

L42 それらの生ける者たちはこう考えた。「君、この生ける者はうまいことをやったものだ。この者が一度に夕食と朝食の米を取ったのだから、私たちは一度に二日分、三日分、米を取ることにしようではないか」。彼らは二日分、三日分米を取ってきた。他の生ける者たちがその生ける者たちに言った。「さあ、生ける者たち、米を取りに行こう」。彼らは言った。「私たちは一度に二日分、三日分、米をもってきた。あなた方にとって〔出かける〕時間だと思えばなら〔さあ、お行きなさい〕 (さようなら)」。他の生ける者たちは言った。「さあ、生ける者たち、米を取りに行こう」。

L43 中略。彼らは言った。「私たちは一度に五日分、六日分、米をもってきた。あなた方にとって〔出かける〕時間だと思えばなら〔さあ、行きなさい〕 (さようなら)」。

L44 それらの生ける者たちはこう考えた。「君、この生ける者たちはうまいことをやったものだ。この者たちが一度に五日分、六日分、米を取ったのだから、私たちは一度に半月分、一月分、米を取ることにしようではないか」。彼らは半月分、一月分、米を取ってきた。

L45 かの生ける者たちが、香り〔の良さ〕をそなえ、色〔の美しさ〕をそなえ、味〔の良さ〕をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、耕作が不要な、申し分のない、糠がなく、粃殻がない実をもつその稲を、このように貯蔵しながら食べるようになったために、それ故それは糠をもち粃殻に包まれ、刈られても再び成長しなかった。〔穂首の〕刈り取られて無くなった跡が〔消えぬままに〕見られた。

L46 彼ら生けるものたちは集まり、寄りあって、悲しみ、《p. 211》悲嘆し、うち嘆き、胸を叩き、泣き、取り乱した状態に陥った。

L47 「ああ、悪しき不善なる法が世界に現れた。悪しき不善なる法が世に出現したので、容色 (肌の色) への傲りを性質として有した私たちから、香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、あの『地なるラサー』 (Mss. pathavīrasā) が、『地のパッバタカ』が、『パダーラター [という] 蔓草』が消え失せてしまった。

L48 香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえてい稲が私たちにあったが、それも、粃殻によって包まれ刈っても刈っても再び成長しなくなった。[穂首の]刈り取られて無くなった跡が見られた。稲が稲が林のように [群ごとに整然と] あるようになった。

L49 さて私たちは稲 [田] を分割しようではないか。[稲田の] 境界を設定しようではないか。私たちは [自分に境界内に] 稲のある限り、好きなだけ取って食べることができる」と。彼ら生ける者は稲を分け、彼らの領分、境界を設定した。

L50 [その後] いっそうひどい非道徳的な行いが [彼らに] 生じるに従って、彼らから、かの『如意樹 [から生じた] 衣』が消えてしまった。

L51 彼らは [如意樹から生じた] 美衣を^(註72)取って、山々に植えた。すると、綿 (カッパーサー) が生えた^(註73)。彼らに如意樹 (カッパ) への願望 (アーサー) が増大した。[そこで] 綿 (カッパーサー) という言葉が生じた。

L52 或る一人の生ける者が、自分の田に稲がありながら、他人の田で稲を盗んだ。

58 L53 生ける者たちは、その生ける者が自分の田に稲がありながら他人の田で稲を盗んでいるのを見た。見つけて、彼にこう言った、「ああ、なんてひどい奴だ、[この] 生ける者は！ [人の] なしてはならないことをする！ どうして、自分の田に稲がありながら、他人の田で稲を盗もうとするのか？ おい、生ける者よ！」と。

L54 かの生ける者は、それらの生ける者たちに手で打たれたのに、再び、自

分の田に稲がありながら、他人の田で稲を盗んだ。[同様に] 三度目も。

L55 彼ら生ける者たちは、その生ける者が《p. 212》自分の田に稲がありながら他人の田で稲を盗んでいるのを見た。見つけて、彼を手で、拳骨で打ちすえ、土の塊を投げつけ、棒で叩き、[地に] ころげ回らせた。「この生ける者は[人の] なしてはならないことをする！ どうして、自分の田に稲をもちながら、他人の田で稲を盗もうとするのか？」

L56 彼は言った。「こいつらは[私を] 手で、拳骨で打ちすえ、土の塊を投げつけ、棒で叩き、[地に] ころげ回らせた」と。

L57 彼ら生けるものたちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆き、胸を叩き、泣き、取り乱した状態に陥った。

L58 「ああ、所有財とは悪しきものだ！ 非法を行う者たちによって世界に盗みが知られた。手で打つこと、土の塊を投げつけること、[苦しんで地を] ころげ回ることが知られた。

L59 さあ、私たちは一人の[すべての] 田の支配者を認定しようではないか。彼は私たちのために正しく非難されるべき者を非難してくれるであろう、正しく譴責されるべき者を譴責してくれるであろう、正しく追放されるべき者を追放してくれるであろう。私たちは[それぞれ] 自分の田から稲を収穫しよう。そして彼に[収穫から] ある程度の分量を与えることにしよう」。

L60 そこで、彼ら生ける者たちは、彼ら生ける者たちの中で最高の生ける者のもとに行った。彼は最も長寿であり、最も美しい容色（肌の色）、最も勝れた偉大さ、最も大きな神通力、最も大きな神的な力をもっていた。行って、こう言った。

L61 「今日より以後、尊いお顔のお方よ、あなたは私たちのために[すべての] 田の支配者になって下さい。あなたは私たちのために正しく非難されるべき者を非難してください。正しく譴責されるべき者を譴責してください。正しく追放されるべき者を追放してください。私たちは[それぞれ] 自分の田から稲を収穫しましょう。そしてあなたに[収穫から] ある程度の分量を与えることにしましょう」。

L62 彼は「そうしよう」と彼らに同意し、正しく（サンマー）非難されるべき

者を非難し、正しく (サンマー) 譴責されるべき者を譴責し、正しく (サンマー) 追放されるべき者を追放した。

L63 こうして『最高権力者 (サンマー)』^(註74) [という意味から王の名称である] 『最高権力者 (サンマー)』という言葉が生じた。

L64 彼は善き法話によって、会衆を喜ばせること (ランジェートゥム) が出来た。そこで『ラージャー』 (王) という言葉が生じた。

L65 『大衆 (マハージャナ) によって [最高者に] 認定された者 (サンマタ)』、という意味から、『マハーサンマタ』という言葉が生じた。

L66 『田の支配者 (ケッターナン・アディパティ)』という意味から、《p. 213》『カッティヤ』 (クシャトリヤ) という言葉が生じた。

L67 この最初の [ヴァルナである] カッティヤ (クシャトリヤ) の社会的集団の成り立ちはこのようなものであった。それは昔から続く、古い法にもとづいているのであり、非法にもとづいていないのではない。まさしくそれらの生ける者たちの [成り立ち] なのであって、[他の者たちの [成り立ち] なのではない]。法こそが人々にとって、最勝なるものである。

L68 別の或る生ける者たちはこう考えた、「ああ、所有財とは悪しきものだ！ 財産財を理由とする者たちによって、世界に盗みが知られた (現われた)。手で打つことも、土の塊を投げつけることも、[苦しんで地を] ころげ回ることも、非難することも、譴責することも知られた。私たちは所有財を捨て、所有財を追い出して、森において木葉の小屋に住もうではないか」。そしてそれらの生ける者たちは所有物を捨て、所有物を追い出して、森において木葉の小屋に住んだ。彼らは夕べには夕食のために村の付近にやってきた。朝には朝食のために村の付近にやってきた。その [村の] 人々は [それらの者たちを] とても尊敬に値する者に見なした、「これらの生ける者たちは苦行をなし、かの所有物を捨て、所有物を追い出して、森において、木葉の小屋に住んでいる」と。

60

L69 別の或る生ける者たちは、[林] 棲する者たちの、その精神集中^(註75)、隠遁生活を見て (知って) いるのに、[それらを] 達成できなくなって、薬草や聖典の文句を所有した。そこで[バラモン族の名称である] 『ブラーフマナ』 (バラモン) という言葉が生じた^(註76)。

L70 彼らは精神集中、隠遁生活を見て (知って) いるのに、[それらを] 達成できなくなって、瞑想しない (アッジャーヤンティ)。そこで [バラモン族の名称である] 『アッジャーヤカ』 (ヴェーダを学習する者) という言葉が生じた。

L71 村の付近に (ガーマンテー) やってきたバラモンたちはこのような次第で、語られている聖典の文句を [ヴェーダ聖典として] 作った。そこで 『住民たち』 (ガーマー) という言葉が生じた^(註77)。

L72 この第二の [ヴァルナである] バラモンの社会的集団の成り立ちはこのようなものであった。それは昔から続く、古い法にもとづいているのであり、非法にもとづいているのではない。まさしくそれらの生ける者たちの [成り立ち] なのであって、他の者たちの [成り立ち] なのではない。法こそが人々にとって、最勝なるものである。

L73 また別の或る生ける者たちはあらゆるさまざまな (ヴィス) 労働に^(註78) 従事するようになった。そこで [ヴァイシャ族 (商業・農業従事者) の名称である] 『ヴェッサ』 という言葉が生じた。

L74 この第三の [ヴァルナである] 《p. 214》ヴェッサ (ヴァイシャ) の社会的集団の成り立ちはこのようなものであった。それは昔から続く、古い法にもとづいているのであり、非法にもとづいているのではない。まさしくそれらの生ける者たちの [成り立ち] なのであって、他の者たちの [成り立ち] なのではない。法こそが人々にとって、最勝なるものである。

L75 その時、[人々は] 強盗 (チョーラ) を 『チャンダ』 (凶悪な者) と呼んだ^(註79)。或る 『チャンダ』 たる生ける者が、[多くの] 『チャンダ』 たちを [部下に] 従えて、村に入った。[村の] 或る生ける者たちは言った。「さあ、『チャンダ』 たちよ、ここから出て行け」。[村の] 或る生ける者たちは言った。「私たちにとって 『チャンダ』 たちはうんざりだ」。彼ら [村人] は彼ら [『チャンダ』 たち] の生命を奪った。彼らが他の村へ行った時、[他の村の人々は] 語った。「さあ、『チャンダ』 たちはどこへいったのか」。[私たちにとって 『チャンダ』 たちはうんざりだ。私たちは 『チャンダ』 たちを殺した]。彼ら [他の村の人々] は彼らに言った。「ああ、なんてひどい奴だ、[この] 生ける者たちは！ [人の] なしてはならないことをする！ どうして生ける者でありながら、生ける者たちの

生命を奪うのか」。彼らはこう思った、「ああ、君、彼らは [大きな罪を] なしてしまった」。[その時に] 彼らが「私たちにとって『チャンダ』たちはうんざりだ、私たちは『チャンダ』たちを殺した」と語ったので、そこから、『チャンダを殺す者』^(註80)という言葉が生じた。[彼らがチャンダラ(『チャンダ殺し』)である。]

L76 彼らのためにその時、別の食物 (apara-annam) が出現した。[すなわち] ムッカ隠元豆、マーサ空豆、ニPPERヴァ豆^(註81)、胡麻、クラッタ空豆である。

L77 彼らが有するその稲は、香り [の良さ] をそなえ、色 [の美しさ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていて、まるで純粋な蜜のような、そのような味わいを有している、耕作が不要な、申し分のない、糠がなく、粃殻がない実をもつものであった。[しかし] 昔、[その稲が] 糠をもち粃殻に包まれたので、そこでムッカ隠元豆を混ぜたものを彼らは食べるようになった。・・・(意味不明)。彼らは「君、今日はこれを別の箱 (サムッカ) で食べよう」と語った。そこで、『ムッカ』という言葉が生じた。

L78 マーサ空豆を混ぜたものを食べるようになると、彼らの腹が重たくなった。彼らは「食べるな (マー・アシッタ)、《p. 215》食べるな」と語った。そこで、『マーサ』という言葉が生じた。

L79 彼らは残余をつぶした後で、水の瓶の中に置いた。それを [人々が] 焦がして、スラー酒が生じた。渴して、疲れて、のどが渴いた或る一人の生ける者が、[それを] 取って、飲んで、神 (スラ) の如く進んで、叫び声をあげた。そこで、『スラー』という言葉が生じた。

L80 ニPPERヴァ豆を混ぜたものを食べるようになった彼らは語った、「箕で煽いで選り分けよ (ニPPERヴァタ)」と。そこで、『ニPPERヴァ』という言葉が生じた。

62 L81 その時、胡麻の一握りの盗難・・・(意味不明)。そこで、『ティラ』(胡麻) という言葉が生じた^(註82)。

L82 それらの中でクラッタ空豆を見た者たちは語った、「[豆を] 採れ、家族 (クラ) の利益に (アッタ) なるぞ。採れ、家族の利益になるぞ」と。そこで、『クラッタ』という言葉が生じた。

L83 彼らのために、動物という生ける者たちが出現した。[すなわち]象、馬、牛（乳牛）、牡牛（軛を引く牛）である。

L84 [象を] 見た者たちは語った、「君、これらの生ける者たちは、この最高の車と一緒に[繋がれて]来るべきであろう。これらの生ける者たちは実に[鼻として]自らの手をもつ（サ・ハッター）」と^(註83)。そこで、『ハッティー』（象）という言葉が生じた。

L85 [馬を] 見た者たちは語った、「彼らは」この（アッサー）仮小屋の家（家畜小屋）を楽しんでいる。…（意味不明）」と。彼らは語った、「君、これらの生ける者たちは従順だ（アッサヴァ）。[それは]迅速に進む」。それ故に、『アッサー』（馬たち）という言葉が生じた。

L86 その当時、牛たちは山羊に劣らず、乳や生バターを保持していた。彼らは語った、「これらの牛たちは^(註84)乳をもち、サルピスの醍醐をもち、たくさんの利点（グナ）をもつ」。それ故に、『ガーヴォー』（牛たち）という言葉が生じた。

L87 彼ら人間たちは、それらの田に種を蒔いて、鋤で耕しつつ、住した。

L88 牡牛たちは《p. 216》[人間たちに] 近づいて語った、「これらの鋤を[犁として] 私たちが曳きましょう。あなた方は[犁棒を]握りなさい。平等に食べ物の分け前を与えて下さい」。

L89 その[人間]はその[牡牛]に、「よかろう」と、同意の返事を与えた。彼ら[牡牛]はそれらの犁を曳いた。人間たちは[犁棒を]握った。彼らは語った、「君、これらの生ける者たちは供物（バリ）に束縛された者（バッダ）であり、調御された者である」と。そこで『バリ・バッダー』（牡牛たち）という言葉が生じた。

L90 ある時に、彼ら[人間]は、食物を要求する[牡牛たち]に、その[約束の分け前]を与えなかった^(註85)。それ故に、[牡牛たちは]彼らのためにその犁を曳かなかった。

L91 人間たちはそれ故に、一匹の清らかな生ける者を取り囲んで、縄で縛り、棒で打ち、奉仕させた^(註86)。

L92 彼らのために、一つの…（意味不明）砂糖黍が出現した。彼らは語った、「これ…（意味不明）」と。そこで、砂糖黍（ウッチュ）という言葉が生じた。

彼らは、その [砂糖黍] を、汁のある限り、享受した。

L93 ある時に、その [砂糖黍] は葉によって覆われた。彼らは葉を取り除いて、汁のある限り、享受した。それは皮によって覆われた。それらの生ける者たちは、皮を取り除いて、願いどおりに^(註87)、それを享受した。

S 根本有部の聖典伝承『破僧事』

S 1 ガウタマたちよ (釈迦族よ)、ある時、この世界が帰滅する (散壊する) [壊劫の] 時がくる。この世界が帰滅している [壊劫と空劫の] 間、生ける者たちは多くがアーバースヴァラ天 (光音天) に生まれる。

S 2 彼らはそこにおいて、美しい姿をもち、マナス (精神) から成る存在であり、五体満足で、感官に欠損なく、四肢や肉体の細かな部分まで完全にそなえ、浄福であり、美しい容色 (肌の色) のままでずっとあり、自ら光を放ち、空中を飛び、歡喜を食べ、歡喜を食とし、長い寿命をもって、長い時を過ごした。

S 3 その時、この大地はすべて一つの水であり、一つの海であった。

S 4 一つの水、一つの海であるこの大地の表面において、風によって水の集まりが凝集し、固体化して、[表面を]覆った。あたかも、煮られた乳が冷やされて、その表面において、風によって水の集まりが凝集し、固体化して、[表面を]覆うのと同じように、一つの水、一つの海であるこの大地の表面において、風によって水の集まりが凝集し、固体化して、[表面を]覆った。

S 5 その『地のラサ』は色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。色に関してはちょうど生バターのようであり、味に関してはちょうど純粋な蜜のようであった。

64 S 6 ガウタマたちよ、ある時、この世界が再び起成する [成劫の] 時がくる。世界が再び起成すると、その後、或る生ける者たちは寿命が尽きたため、[天界に住む]業が尽きたため、福德が尽きたために、《p. 9》アーバースヴァラ天 (光音天) から死んで [別の生に] 移行し、人間という同分 (生物の同じ種類) として、この世 (地上世界) にやってくる。

S 7 彼らはこの世界において、美しい姿をもち、マナス (精神) から成る存在であり、五体満足で、感官に欠損なく、四肢や肉体の細かな部分まで完全にそ

なえ、淨福であり、美しい容色（肌の色）のままずっとあり、自ら光を放ち、空中を飛び、歡喜を食べ、歡喜を食とし、長い寿命をもって、長い時を過ごした。

S 8 その時、月と太陽は世界において[未だ]出現していなかった。星々も、クシャナ（刹那）やラヴァやムフルタ（須臾）[という時間の単位]も、昼夜も、[暦の]月も半月も、季節も年も、世界に[未だ]出現していなかった。女も知られなかったし、男も[知られなかった]。ただ生ける者は「生ける者」という名を有した。

S 9 すると欲深く落ち着かない性質の或る一人の生ける者がいて、『地のラサ』(pr̥thivīrasa)を指先で味わってみた。味わえば味わうほど、それが好きになった。好きになればなるほど、団子にする食事(段食)の方法を取って、食べるようになった。

S10 他の生ける者たちも、その生ける者が、『地のラサ』を指先で味わっているのを見た。[彼が]味わえば味わうほど、それが好きになったのを、また好きになればなるほど、団子にする食事(段食)の方法を取って、彼が食べるようになったのを見た。見てから、それらの生ける者たちも、『地のラサ』を指先で味わい始めた。彼らは味わえば味わうほど、それが好きになった。好きになればなるほど、団子にする食事の方法を取って、食べるようになった。

S11 それらの生ける者たちが団子にする食事(段食)の方法を取って、食べるようになったので、それ故に、それらの生ける者たちの身体は堅粗になり、重たくなった。容色（肌の色）の輝いて美しい様子が、彼らから消えてしまった。[すると]世界に闇が出現した。

S12 ガウタマたちよ、このことは常法であるが、闇が世界に出現すると、太陽と月が世界に出現する。星々も、クシャナ（刹那）やラヴァやムフルタ（須臾）[という時間の単位]も、昼夜も、[暦の]月も半月も、季節も年も、世界に出現する。《p. 9》

S13 彼らはそれ(ラサ)を食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。彼らのうちで、より少なく食物を食べた生ける者たちは、美しい容色（肌の色）を有した。より多量に食物を食べた生ける者たちは、劣った容色

を有した。このように、食事の [多寡という] 二つの量 [の差異] によって、容色の [美醜という] 二つの量 [の差異] が知られた。

S14 彼らが美しい容色によって傲りを有するようになった時、悪しき不善なる法を受持するという原因によって、『地のラサ』が世界から消え失せてしまった。

S15 『地のラサ』が消え失せてしまった時、彼ら生ける者たちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。彼らはこう言った、「ああ、ラサよ！ああ、ラサよ！」と。

S16 それはちょうど、今の時代において、人々がおいしい御馳走を食べる時に、同じその古い言葉・文・音を想起して、次のようにいうごとくである——「ああ、美味(ラサ)よ！ああ、美味(ラサ)よ！」と。ガウタマたちよ、ちょうどそのように、『地のラサ』が消え失せてしまった時、彼ら生ける者たちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。彼らはこう言った、「ああ、ラサよ！ああ、ラサよ！」と。その [言葉の] 意味を [今の人々は] 知らない、「これこれはその所説の意味である、これこれはその所説の意味である」と。

S17 『地のラサ』が消え失せたとき、彼ら生ける者たちのために『地のパルパタカ』が出現した。色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。色に関してはちょうどカルニカーラの花のようであり、味に関してはちょうど純粋な蜜のようであった。

S18 彼らはそれ (パルパタカ) を食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。より少なく食物を食べた生ける者たちは、美しい容色(肌の色)を有した。より多量に食物を食べた生ける者たちは、劣った容色を有した。このように、食事の [多寡という] 二つ [の差異] によって、容色の [美醜という] 二つ [の差異] が知られた。容色の [美醜という] 二つの量 [の差異] が存在した時に、生ける者は生ける者を蔑んだ、「ふん、生ける者よ、私は美しい。あなたは醜い」と。

S19 彼らが美しい容色のため傲りを有するようになった時、悪しき不善なる法を受持するという原因によって、『地のパルパタカ』が世界から消え失せてしまった。

S20 『地のパルパタカ』が消え失せてしまった時、彼らは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。彼らはこう言った、「ああ、バタ！ああ、バタ！」と（蔵訳：「ああラサよ！ああラサよ！」と）。それはちょうど、今の時代において、人々が何かしら《p. 10》苦や憂いに襲われると、同じその古い言葉・文・音節を発して、次のようにいうごとくである——「ああ、バタ(なんと)！ああ、バタ！」と。ちょうどそのように、『地のパルパタカ』が消え失せてしまった時、彼ら生ける者たちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。彼らはこう言った、「ああ、バタ！ああ、バタ！」と（蔵訳：「ああラサよ！ああラサよ！」と）。その〔言葉の〕意味を〔今の人々は〕知らない、「これこれがその所説の意味である、これこれがその所説の意味である」と。

S21 『地のパルパタカ』が消え失せたとき、彼ら生ける者たちのためにヴァナラター（林の蔓草）が出現した。色〔の美しさ〕をそなえ、香り〔の良さ〕をそなえ、味〔の良さ〕をそなえていた。色に関してはちょうどカダンバカーの花のようであり^(#88)、味に関してはちょうど純粋な蜜のようであった。

S22 彼らはそれ（ヴァナラター）を食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。より少なく食物を食べた生ける者たちは、美しい容色（肌の色）を有した。より多量に食物を食べた生ける者たちは、劣った容色を有した。このように、食事の〔多寡という〕二つ〔の差異〕によって、容色の〔美醜という〕二つ〔の差異〕が知られた。容色の〔美醜という〕二つの量〔の差異〕が存在した時に、生ける者は生ける者を蔑んだ、「ふん、生ける者よ、私は美しい。あなたは醜い」と。

S23 彼らが美しい容色のため傲りを有するようになった時、悪しき不善なる法を受持するという原因によって、ヴァナラターが世界から消え失せてしまった。

S24 ヴァナラターが消え失せてしまった時、彼らは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。彼らはこう言った、「[[わが] 面前から消え失せろ！ [[わが] 面前から消え失せろ！」と。それはちょうど、今の時代において、人々が或る者たちに対して烈しい言葉による譴責をもって譴責をなさんとする時、同じその古い言葉・文・音節を発して、次のようにいうごとくである、「[[わが]

面前から消え失せろ！ [わが] 面前から消え失せろ！」と^(註89)。ちょうどそのように、ヴァナラターが消え失せてしまった時、彼ら生ける者たちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。彼らはこう言った、「[[わが] 面前から消え失せろ！ [わが] 面前から消え失せろ！」と。その[言葉の]意味を[今の人々は]知らない、「これこれがその所説の意味である、これこれがその所説の意味である」と。

S25 ガウタマたちよ、ヴァナラターが消え失せたとき、彼ら生ける者たちのために、耕さず種を蒔かずとも[自然に生える]、実をつけた稲が出現した。[その米は]糠がなく、粃殻がなく、浄らかで白く輝く、四指の長さをもち、[何にも]覆われていなかった^(註90)。それは夕べに刈っても、朝には熟して再成長していた。《p. 11》朝に刈っても、夕べには熟して再成長していた。こうして、刈っても刈っても再成長するので、刈られる前の姿だけが知られた。

S26 彼らはそれ(自然稲)を食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。その耕さず種を蒔かずとも[自然に生える]、実をつけた稲を、それらの生ける者たちは団子にする食事(段食)の方法を取って、食べるようになったが、すると彼らに肉体的な機官の相違が現われた。或る者には女性機官(女根)が、或る者には男性機官(男根)が[現われた]。

S27 女性機官をもつ者たちと、男性機官を持つ者たちは、互いに目と目でみつめあいながら、眺めあった。目と目でみつめあい、眺めあっているうちに、欲情した。

S28 欲情するにしたがって、判断力を失った。判断力を失うにしたがい、道徳に反する行為(性行為)をなした。

S29 他の生ける者たちは、一人の生ける者に対して道徳に反する行為をしている一人の生ける者を目撃した。それを見て、土くれを投げつけ、土の塊を、砂礫を、陶器の破片を投げつけた。そしてこう言った、「ああ何て奴だ、卑賤な生ける者よ、非行をなす者よ！ああ何て奴だ、卑賤な生ける者よ、非行をなす者よ！おい、生ける者よ、どうしてお前は今、生ける者に対して穢れた行為をなしたのか」と。

S30 それはちょうど、今の時代において、人々が[両親の家から夫の家に]

連れられてきた花嫁に対し、粉末を投げかけたり、香や花輪や多くの布を投げかけたりして、次のようにいうごとくである、「幸福におなりなさい、花嫁さん、幸福におなりなさい、花嫁さん」と。

S31 ちょうどそのように、その生ける者たちは、一人の生ける者に対して道徳に反する行為をしている一人の生ける者を目撃して、土くれを投げつけ、土の塊を、砂礫を、陶器の破片を投げつけた。そしてこう言った、「ああ何て奴だ、卑賤な生ける者よ、[非行をなす者よ！ああ何て奴だ、卑賤な生ける者よ、非行をなす者よ！] おい、生ける者よ、どうしてお前は今、生ける者に対して穢れた行為をなしたのか」と。

S32 ガウタマたちよ、こうして、昔には非法とみなされたことが、この今の時代では[正しい]法とみなされている。昔には掟に反するものとみなされたことが、この今の時代では掟とみなされている。昔には非難すべきものとみなされたことが、この今の時代では讃められるべきものとみなされている。

S33 彼らは彼を一日の間[村や町から]追放し、あるいは二日、三日、七日の間、追放した。

S34 彼ら生ける者たちは、その悪しき不正なる法の中であって、度を過ぎて悪しき習慣的行為(性行為)に耽ったので、それ故に、彼らは家を建てようとし始めた。「この中で私たちは非行(アカールヤ)をしよう。この中で私たちは非行をしよう」と。[そこで]「家(アガーラ)」、「家」という名が[初めて]生じた。

S35 ガウタマたちよ、これが家でなされる仕事の(agāre karmāntānām)、《p. 12》世界における最古の、最初の出現であった。

S36 彼らは夕べには夕食を欲して、米のために集まった。朝には朝食を欲して、[米のために集まった]。

S37 ある時、怠惰に生まれついた或る一人の生ける者は、夕食と朝食の米を[一度に]持ってきた。

S38 その後、或る別の生ける者が、その生ける者に語った。「さあ、生ける者よ、米のために集まろう」。するとその生ける者は彼にこう語った。「生ける者よ、あなたは自分の米[だけ]を考えなさい。私は夕食と朝食の米を[一度に]もってきた」。そこでその生ける者は考えた。「これはよい。これはすばらしい。

私は二日分、三日分・・・乃至七日分、米をもってくることにしよう」。彼は二日分・・・乃至七日分、米をもってきた。

S 39 その後、或る別の生ける者が、その生ける者に語った。「さあ、生ける者よ、米のために集まろう」。するとその生ける者は彼にこう語った。「生ける者よ、あなたは自分の米 [だけ] を考えなさい。私は二日分、三日分・・・乃至七日分、米をもってきた」。そこでその生ける者は考えた。「これはよい。これはすばらしい。私は半月分、一月分、米をもってくることにしよう」。彼は半月分、一月分、米をもってきた。

S 40 その耕さず種を蒔かずとも [自然に生える]、実をつけた稲を、その生ける者たちは貯蔵をして食べるというあり方で食べるようになったため、その結果、それらの稲は、糠と粃殻によって実が覆われた。刈っても刈っても再成長するということがなくなり、[稲の]無力さが知られた。稲が林や森のように [群ごとに] 整然と立ち並ぶようになった。

S 41 その時、彼ら生ける者たちは集まり、寄りあって、悲しみ、悲嘆し、うち嘆いた。

S 42 「皆さん、私たちはかつて、《p. 13》美しい姿をもち、マナス (精神) から成る存在であり、五体満足で、感官に欠損なく、四肢や肉体の細かな部分まで完全にそなえ、浄福であり、美しい容色 (肌の色) のままでずっとあり、自ら光を放ち、空中を飛び、歡喜を食べ、歡喜を食とし、長い寿命をもって、長い時を過ごしていた。

S 43 その私たちのために『地のラサ』が出現したが、それは色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。私たちは『地のラサ』を団子にする食事 (段食) の方法を取って、食べるようになったが、団子にする食事 (段食) の方法を取って、食べるようになったので、それ故に、
70 私たちの身体は堅粗になり、重たくなった。容色 (肌の色) の輝いて美しい様子が、消えてしまった。その私たちはそれ (ラサ) を食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。その私たちの中で、より少なく食物を食べた者たちは、美しい容色 (肌の色) を有した。より多量に食物を食べた者たちは、劣った容色を有した。このように、食事の [多寡という] 二つの量 [の差異]

によって、容色の [美醜という] 二つの量 [の差異] が知られた。容色の [美醜という] 二つの量 [の差異] が存在した時に、生ける者は生ける者を蔑んだ、「ふん、生ける者よ、私は美しい。あなたは醜い」と。その私たちが美しい容色によって傲りを有するようになった時、悪しき不善なる法を受持するという原因によって、『地のラサ』が世界から消え失せてしまった。

S44 『地のラサ』が消え失せたとき、『地のパルパタカ』が出現した。色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。その私たちが美しい容色のため傲りを有するようになった時、悪しき不善なる法を受持するという原因によって、『地のパルパタカ』が世界から消え失せてしまった。

S45 『地のパルパタカ』が消え失せたとき、彼ら生ける者たちのためにヴァナラター (林の蔓草) が出現した。色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた。その私たちが美しい容色のため傲りを有するようになった時、悪しき不善なる法を受持するという原因によって、ヴァナラターが世界から消え失せてしまった。

S46 ヴァナラターが消え失せたとき、彼ら生ける者たちのために、耕さず種を蒔かずとも [自然に生える]、実をつけた稲が出現した。[その米は] 糠がなく、粃殻がなく、浄らかで白く輝く、四指の長さをもち、[何にも]覆われていなかった^(註91)。それは夕べに刈っても、朝には熟して再成長していた。こうして、刈っても刈っても再成長するので、刈られる前の姿だけが知られた。その私たちがそれ (自然稲) を食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。その耕さず種を蒔かずとも [自然に生える]、実をつけた稲を、私たちは貯蔵をして食べるというあり方で食べるようになったため、その結果、それらの稲は、糠と粃殻によって《p. 14》実が覆われた。刈っても刈っても再成長するということがなくなり、[稲の] 無力さが知られた。稲が林や森のように [群ごとに] 整然と立ち並ぶようになった。

S47 「さあ、私たちは集まり、寄りあって、[一緒に] 田 [の大きさ] を測ろうではないか。領分を決めようではないか。[稲田の]境界を設定しようではないか、『ここはあなたので、ここは私のだ』と [いうふう]に」。彼らは集まり、

寄りあって、[一緒に] 田 [の大きさ] を計り、領分を決め、[稲田の] 境界を設定した。

S48 ガウタマたちよ、これが境界 [設定] の仕事の、世界における最古の、最初の出現であった。それ [の成り立ち] は法によってであり、非法によってではない。そこで、この法こそが、諸仏にとって最高のものなのである。

S49 ある時、一人の生ける者は、自分の稲がありながら、他に属する稲を盗んだ。

S50 別の一人の生ける者が、その生ける者が自分の稲がありながら他に属する稲を盗んでいるのを見た。見て、その生ける者にこう言った、「生ける者よ、お前はなぜ自分の稲がありながら他に属する稲を盗むのか。さあ去れ、生ける者よ、もう二度とこんなことはするな」。

S51 その生ける者は、二たび、三たび、自分の稲がありながら、他に属する稲を盗んだ。かの [別の] 生ける者が、その生ける者が二たび、三たび、自分の稲がありながら他に属する稲を盗んでいるのを見た。見て、その生ける者にこう言った、「生ける者よ、お前はなぜ自分の稲がありながら他に属する稲を盗むのか」。

S52 彼はその者を [つかんで] 引っ張ってゆき、ずっと引っ張ってきて、集会の中にまで連れ出した (蔵訳：罵った)。「皆さん、この生ける者は、自分の稲がありながら、他に属する稲を盗んだのです」。そこで、彼ら生ける者たちはその生ける者にこう言った。「生ける者よ、お前はなぜ自分の稲がありながら、三度に至るまでも他に属する稲を盗んだのか。さあ去れ、生ける者よ、もう二度とこんなことはするな」。

S53 するとその生ける者はそれらの生ける者たちにこう言った。「皆さん、この生ける者は米のために、私を [無理やり] 引っ張ってゆき、ずっと引っ張ってきて、集会の中で罵ったのです」。そこで、彼ら生ける者たちはその生ける者にこう言った。「生ける者よ、お前はなぜ米のために、生ける者を [無理やり] 引っ張ってゆき、ずっと引っ張ってきて、集会の中にまで連れ出したのか (蔵訳：罵ったのか)。《p. 15》さあ去れ、生ける者よ、もう二度とこんなことはするな」。

S54 その時、彼ら生ける者たちは次のように考えた。「皆さん、米のために[人を無理やり]引っ張ってゆくこと、ずっと引っ張ってゆくこと、集会の中にまで連れ出す(蔵訳:罵る)ということが[世に初めて]見られた。

S55 さあ、私たちは集まり、寄りあい、そして私たちの中で最も美しく、最も見目かたちよく、最も端正で、最も偉大さをもつ一人の生ける者を、[すべての]田の支配者として任命しようではないか。彼は私たちのために、罰すべき者を罰してくれるであろう、拘束すべき者を拘束してくれるであろう(蔵訳:援助すべき者を援助してくれるであろう)。私たちは、私たちの[各自の]田で収穫されたものから、その一定の割合を^(註92)、法に従って彼に与えるであろう」。

S56 彼らは集まり、寄りあい、そして彼らの中で最も美しく、最も見目かたちよく、最も端正で、最も偉大さをもつ一人の生ける者を、[すべての]田の支配者として任命した。そして次のように言った。

S57 「さあ、生ける者よ、あなたは私たちのために、罰すべき者を罰してください、拘束すべき者を拘束してください(蔵訳:援助すべき者を援助してください)。私たちは、私たちの[各自の]田で収穫されたものから、その一定の割合を、法に従ってあなたに与えましょう」。

S58 [任命された]彼は彼らのために、罰すべき者を罰し、拘束すべき者を拘束した(蔵訳:援助すべき者たちを援助した)。彼らは、彼らの[各自の]田で収穫されたものから、その一定の割合を、法に従って彼にさし上げた。

S59 『大衆によって[最高者に]認定された者(マハージャナ・サンマタ)』、つまり『大勢[から]認定された(マハー・サンマタ)』という意味から、[王の名称である]『マハーサンマタ』、『マハーサンマタ』という名が生じた。

S60 『田の支配者(クシェートラーナム・アディパティ)であり、危険(クシャタ)から[人民を]守る(トラヤター)』という意味から、[王の名称である]『クシャトリヤ』、『クシャトリヤ』という名が生じた。

S61 『法によって人民を彼は喜ばせる(ランジャヤティ)、持戒によって善行をなす生活態度、智慧によって善行をなす生活態度によって[彼は喜ばせる]』という意味から、『ラージャー』(王)、『ラージャー』という名が生じた。

S62 ガウタマたちよ、マハーサンマタ王の[時代の]人間たちは、『生ける者

たち』(有情)、『生ける者たち』という名前を有した。

S63 ガウタマたちよ、マハーサンマタ王はローチャという息子を有した。…

(以下、王の系譜が続く)

M 大衆部説出世部の聖典伝承『マハーヴァストゥ』

M1 経 (sūtra) における、王統史 (rājavamśa) における [記述]^(註93)。比丘らよ、長い時の経過ののちに、この世界が帰滅する(散壊する) [壊劫の]時が来る。比丘らよ、世界が帰滅している [壊劫と空劫の]間、生ける者たちは多くがアーバースヴァラ天 (光音天) に生まれる。

M2 比丘らよ、長い時の経過ののち、この世界が起成する (生成展開する) 時が来る。この世界が再び起成する [成劫の] 時に、世界という住所が形成された時、或る生ける者たちは寿命が尽きたため、[天界に住む]業が尽きたために、アーバースヴァラ天 (光音天) から死んで [別の生に] 移行し、この世 (地上世界) にやってくる。

M3 それらの生ける者たちは自ら光を放ち、空中を遊泳し、また [身体] がマナス (精神) から成る存在であり、歡喜を食べ、安樂に住し、どこへでも好きな所に移動していた。

M4 比丘たちよ、それらの生ける者たちが自ら光を放ち、空中を遊泳し、またマナス (精神) から成る存在であり、歡喜を食べ、《p. 339》安樂に住し、どこへでも好きなところに移動するというこのことは、常法 (定まったあり方) である。

M5 かの月と太陽は世界において [未だ] 知られなかった。月と太陽が世界に知られない時、星の煌めきも知られなかった。星の煌めきが世界に知られない時、星の軌道も知られなかった。星の軌道が知られない時、昼夜も知られなかった。昼夜が知られない時、[暦の]月も半月も知られなかった。月も半月も知られない時、季節も年も知られなかった。

M6 比丘たちよ、このことは、自ら光を放ち、空中を遊泳し、中略、どこでも好きなところに移動するそれらの生ける者たちにとって、常法 (定まったあり方) である。

M7 [時に]『偉大な地』(mahāprthivī)は^(註94)あたかも水湖のように出現した^(註95)。

M8 それ(『地』)は色[の美しさ]をそなえ、香りの[良さ]をそなえ^(註96)、味[の良さ]をそなえており、あたかも純粋な蜂蜜のような、そのような味わいを有していた。ちょうど[煮てから冷やされて出来た]乳の膜のような、あるいはサルピス^(註97)の膜のような、そのような色・外見を有していた。

M9 すると比丘らよ、軽率で欲深く落ち着かない性質の或る一人の生ける者がいて、その『地のラサ』を^(註98)指先で味わってみた。それは色かたちで、香りで、味で、彼を楽しませた。

M10 他の生ける者たちもその生ける者を見て模倣した。彼らも『地のラサ』を指で味わった。それは[色かたちで、香りで、]味で、彼らをも楽しませた。

M11 比丘らよ、その生ける者はのちにその『地のラサ』を[ひと塊りに握って]団子にして食べた。

M12 他の生ける者たちも、その生ける者を見て模倣した。

M13 彼らもその『地のラサ』を[ひと塊りに握って]団子にして食べた。彼らがその『地のラサ』を[ひと塊りに握って]団子にして食べたので、それ故に彼らの体は重くなり、堅粗なものとなり、堅固なものとなった。するとかつて彼らがもっていた、自ら光を放つこと、空中を遊泳すること、また身体がマナス(精神)から成ること、歓喜を食べること、安楽に住すること、どこでも好きなどころに移動することが消失した。

M14 《p. 340》自ら光を放つこと^(註99)、空中を遊泳すること、[身体が]マナス(精神)から成ること、歓喜を食べること、安楽に住すること、どこでも好きなどころに移動することが消失してしまった時、[はじめて]月と太陽が世界に知られた。月と太陽が世界に知られたので、星の煌めきが世界に知られた。星の煌めきが世界に知られたので、星の軌道が世界に知られた。星の軌道が世界に知られたので、昼夜も世界に知られた。昼夜が世界に知られたので、[暦の]月や半月が世界に知られた。月も半月が世界に知られたので、季節や年が世界に知られた。[比丘たちよ、このことはまた常法なのであるが、それらの生ける者たちの身体において・・・(意味不明)。また比丘たちよ、生ける者たちの中の

女たちにも、女という [肉体的な] 性的特徴は [未だ] 知られていない。[男たちにも] 男という [肉体的な] 性的特徴は [知られていない]。生ける者は「生ける者」と呼ばれた。^(註100)

M15 比丘らよ、彼ら生ける者はその『地のラサ』を食べながら、その [ラサの] 色を [肌の色として] もつ者として [あり]^(註101)、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。彼らの中で多く食べた者たちは、醜くなり (色が悪くなった肌をもち)、少なく食べた者たちは、美しい容色 (肌の色) をもった。

M16 美しい容色 (肌の色) をもつ者たちは、醜い生ける者たちを軽んじた。『私たちは美しい容色をもつ。これらの生ける者たちは醜い』と。美しい容色・すばらしい容色が原因である高慢と傲りという性質を有して、彼らが過ごしていた時、『地のラサ』が消えてしまった。

M17 [すると] 『地のパルパタカ』が現れた。[それは] あたかもマッシュルーム^(註102)のような、そのような色・外見を有していた。それは色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえていた^(註103)。あたかも純粹な蜂蜜のような、そのような味を有していた。

M18 なお、比丘らよ、彼ら生ける者たちはその『地のラサ』が消えた時、嘆声 (ウダーナ) を発した——「おお、ラサは [失われた]！おお、ラサは [失われた]！」と。それはちょうど、比丘らよ、今の時代において御馳走を食べて喜び享受する時に、人々が嘆声を発するごとくである——「おお、美味 (ラサ) が [ある]！おお、美味 (ラサ) が [ある]！」と。[その場合、彼らは] かの古い、昔から続く言葉に従っているのであるが^(註104)、しかもその意味を知らない。

M19 さて、比丘らよ、彼ら《p. 341》生ける者たちはその『地のパルパタカ』を食べながら、その [パルパタカの] 色を [肌の色として] もつ者として [あり]、それを食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。彼らの中で多く食べた者たちは、醜くなり、少なく食べた者たちは、美しい容色 (肌の色) をもった。美しい容色 (肌の色) をもつ者たちは、醜い生ける者たちを軽んじた。『私たちは美しい容色 (肌の色) をもつ。これらの生ける者たちは醜い』と。

M20 美しい容色・すばらしい容色が原因である高慢と傲りという性質をそなえて彼らが過ごしていた時に、『地のパルパタカ』が消えてしまった。

M21 [すると] ヴァナラター (林の蔓草) が現れた。[それは] あたかもカランブカー [草] のような、そのような色・外見を有していた。

M22 なお、比丘らよ、それら生ける者たちは『地のパルパタカ』が消失した時に、嘆きの声を上げた。「偉大なラサは！ ああ、ラサは！」と^(註105)。それはちょうど、比丘らよ、今の時代において生ける者たちが何かしら苦の出来事に襲われると、嘆きの声をあげるごとくである——「ああ、ヴァディ (なんと)！ ああ、ヴァディ！」と^(註106)。[その場合、彼らは] かの古い、昔から続く言葉に従っているのであるが、しかも意味を知らない。まさしくそのように、比丘らよ、彼ら生ける者たちはかの『地のパルパタカ』が消失した時、嘆きの声をあげた——「ああ、ラサは！ ああ、ラサは！」と^(註107)。

M23 さて、比丘らよ、彼ら生ける者たちはその『地のパルパタカ』が消えてしまった時、ヴァナラター (林の蔓草) を食べながら、その [ヴァナラターの] 色を [肌の色として] もつ者として [あり]、それを食する者として、それを糧とする者として、長い久しい時を過ごした。彼らの中で多く食べた者たちは、醜くなり、少なく食べた者たちは、美しい容色 (肌の色) をもった。[美しい容色をもつ] 彼らはそれら醜い生ける者たちを軽んじた。『私たちは美しい容色をもつ。これらの生ける者たちは醜い』と。

M24 美しい容色・すばらしい容色が原因である高慢と傲りという性質をそなえて彼らが過ごしていた時に、ヴァナラター (林の蔓草) が消えてしまった。

M25 《p. 342》 [すると] 糠がなく、粃殻がなく、芳ばしく香る実をもつ稲が出現した。[それらの稲は] 夕べに刈られても朝には生じ、熟して成長していた。それらには [穂首の] 刈り取られて無くなった跡が見られなかった。その [稲] は、夕べに刈られても朝には朝には生じ、熟して成長していた。それらには [穂首の] 刈り取られて無くなった跡が見られなかった。

M26 なお、比丘らよ、それらの生ける者たちはかのヴァナラター (林の蔓草) が消失した時に、嘆きの声を上げた。「ああ、ヴァディ (なんと)！ ああ、ヴァディ！」と。それはちょうど、比丘らよ、今の時代において生ける者たちが何

かしら苦の出来事に襲われると、嘆きの声をあげるとくである。[その場合、彼らは] かの古い、昔から続く言葉従っているのであるが、しかもその意味を知らない。[まさしくそのように、比丘らよ、彼ら生ける者たちはかのヴァナラターが消失した時、嘆きの声をあげた——『ああ、ヴァディ(なんと)! ああ、ヴァディ!』と。]

M27 さて比丘らよ、彼ら生ける者たちはそのヴァナラターが消えてしまった時、糠がなく、粃殻がなく、芳ばしく香る実をもつ、かの稲を食べつつ、長い久しい時を過ごした。比丘らよ、彼ら生ける者たちが糠がなく、粃殻がなく、芳ばしく香る実をもつ稲を食べていたため、それ故に彼らの中の女 [たるべき者] には女の性的特徴が現れ、男 [たるべき者] には男の性的特徴が現れた。

M28 欲望に染まった心で、[彼らは] とても長い間互いにみつめあった欲望に染まった心でとても長い間互いにみつめあって、彼らは互いに欲情した。

M29 互いに欲情しあった [彼らは]、互いに墮落した行為 (性交) をなした。

M30 比丘らよ、生ける者たちは墮落した行為をしている者たちを目撃して^(註108)、[彼らに] 棒を投げつけ、土の塊を投げつけ、砂を投げつけた。「皆さん、世界に非法が現れました。皆さん、世界に不正なる法が現れました——生ける者が生ける者に墮落した行為をするなんて!」。

M31 それはちょうど、比丘らよ、今の時代において、[両親の家から夫の家に] 連れられてゆく花嫁に [人々が] 棒を投げ、土の塊をも投げ、砂を投げる^(註109) ごとくである。[その場合、彼らは] かの古い、昔から続く言葉に従っているのであるが、しかもその意味を知らない。

M32 また比丘らよ、当時それは非法とみなされ、聖ならざるものとみなされ、掟に反するものとみなされた。ところが比丘らよ、この今の時代ではそれは法とみなされ、聖なるものとみなされ、掟とみなされている。

78 M33 比丘らよ、非法の [行いの] ゆえに、《p. 343》 [人々によって] 悩まされ、嫌悪されたそれらの生ける者たちは、一日の間 [村や町から] 追放され、二日の間追放され、三日の間追放され、四日の間追放され、五日の間追放され、半月の間追放され、一月の間追放された。

M34 [彼らは] 家でなされる仕事をも (gr̥hakarmāntāny api) 行った。その時

における、彼らの非法（性交）を隠すために。

M35 ある時、比丘らよ、米（稲穂）を取りに行った或る生ける者に次の考えが生じた。「一体なぜ私は疲れることをしているのであろう。これまで私はどうして、夕べには夕食のために、早朝には朝食のために、疲れてきたのだらう。毎日^(註110)、夕食と朝食の米を一度に取ったらどうだらう」。比丘らよ、その生ける者は毎日、夕食と朝食の米を一度に取ってきた。

M36 するとある時、比丘らよ、別の生ける者がその生ける者に語った。「さあ、生ける者よ、米を取りに行こう」。そういわれて、比丘らよ、その生ける者はその[別の]生ける者に答えた。「あなたは行きなさい、生ける者よ、私はすでに夕食と朝食の米を一度にもってきた」。その時、比丘らよ、その生ける者は考えた。「今^(註111)このように行うのは、うまいことだ。私は一度で二日分、三日分の米を取ることにしよう」。比丘らよ、その生ける者は二日分、三日分の米を一度に取ってきた。

M37 すると、比丘らよ、別の生ける者がその生ける者に語った。「さあ、生ける者よ、稲を取りに行こう」。そういわれて、比丘らよ、その生ける者はその生ける者に答えた。「あなたは行きなさい、生ける者よ、私はすでに二日分、三日分の米を一度にもってきた」。その時、比丘らよ、その生ける者は考えた。「今、このように行うのは、うまいことだ。私は一度で四日分、五日分の米を取ることにしよう」。比丘らよ、その生ける者は四日分、五日分の米を一度に取ってきた。

M38 比丘らよ、その生ける者たちは糠がなく、粃殻がなく、芳ばしく香る実をもつ稲を、貯蔵して食したゆえに、その時かの稲に、糠と粃殻が出現した。その[稲]は、夕べに刈られても朝に生じず、熟さず、成長しなくなった。それには[穂首の]刈り取られて無くなった跡が見られた。それは朝に刈られても、それは夕べに生じず、熟さず、成長しなくなった。それには[穂首の]刈り取られて無くなった跡が見られた^(註112)。

M39 《p. 344》その時比丘らよ、かの生ける者たちは駆け集まってきて集合し、相談した。

M40 「皆さん、私たちは自ら光を放ち、空中を遊泳し、マナス（精神）から成

る存在であり、歓喜を食べ、安樂に住し、どこでも好きなどころに移動していた。自ら光を放ち、空中を遊泳し、マナス (精神) から成る存在であり、歓喜を食べ、安樂に住し、どこでも好きなどころに移動していたその私たちの世界に、月と太陽は知られていなかった。月と太陽が世界に知られていないから、星の煌めきも知られていなかった。星の煌めきが世界に知られていないから星の軌道も知られていなかった。星の軌道が知られていないから、昼夜も知られていなかった。昼夜が知られていないから、[暦の]月も半月も知られていなかった。月も半月も知られていないから、季節も年も知られていなかった。

M41 この『偉大なる地』(māhāpṛthivī)はあたかも水湖のように出現した。[『地』に] あたかもサルピスの膜のような、あるいは [煮て冷やされた] 乳の膜のような、そのような色・外見を有していた。それは色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえ、味 [の良さ] をそなえており、あたかも純粋な蜂蜜のような、そのような味を有していた。すると皆さん、或る一人の軽率で欲望に駆られて絶えず落ち着かない性質の生ける者がその『地のラサ』を指先で味わった。それは色かたちで、香りで、味で、彼を楽しませた。皆さん、その生ける者はのちに [その『地のラサ』を] 団子にしながら食べた。私たちはその生ける者を見て模倣した。[私たちは] その『地のラサ』を [ひと塊りに握って] 団子にして食べた。その『地のラサ』を団子にして食べたので、私たちの体は重くなり、堅粗なものとなり、堅固なものとなった。するとかつてあった、自ら光を放つこと、空中を遊泳すること、身体がマナス (精神) から成ること、歓喜を食べること、安樂に住すること、どこでも好きなどころに移動することが、消失した。皆さん、それらの者たちから、かの、自ら光を放つこと、空中を遊泳すること、身体がマナス (精神) から成ること、歓喜を食べること、安樂に住すること、どこでも好きなどころに移動することが消え失せてしまった時、[はじめて]月と太陽が世界に知られた。月と太陽が世界に知られたので、《p. 345》星の煌めきが知られた。星の煌めきが世界に知られたので、星の軌道が世界に知られた。星の軌道が世界に知られたので、昼夜も世界に知られた。昼夜が世界に知られたので、[暦の]月や半月が世界に知られた。月も半月が世界に知られたので、季節や年が世界に知られた。皆さん、その私たちは『地のラサ』を

食べながら、その [ラサの] 色を [肌の色として] もつ者として [あり]、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。

M42 それらの者たちにおいて悪しき不善なる法がやや見られたゆえに、皆さん、私たちにおいて悪しき不善なる法がやや見られたゆえに、かの『地のラサ』が消失し、『地のパルパタカ』が現れた。[それは] あたかもマッシュルームのような、そのような色・外見を有していた。それは色 [の美しさ] をそなえ、香り [の良さ] をそなえていた。あたかも純粋な蜂蜜のような、そのような味を有していた。皆さん、その私たちはその『地のパルパタカ』を食べながら、その [パルパタカの] 色を [肌の色として] もつ者として [あり]、それを食する者として、それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。

M43 彼らに悪しき不善なる法がやや見られたので、それ故にかの『地のパルパタカ』が消失した。

M44 ヴァナラター (林の蔓草) が現れた。[それは] あたかもカランプカー [という草] のような、そのような色・外見を有していた。それはあたかも純粋な蜂蜜のような、そのような味を有していた。皆さん、その私たちはヴァナラターを食べながら、その [ヴァナラターの] 色を [肌の色として] もつ者として [あり]、それを食する者として、それを糧とする者として、長い時を過ごした。それらの者たちにおいて悪しき不善なる法がやや見られたゆえに、皆さん、私たちにおいて悪しき不善なる法がやや見られたゆえに、かのヴァナラターが消失した。

M45 糠がなく、粃殻がなく、芳ばしく香る実をもつ稲が出現した。[それらの稲は] 夕べに刈られても朝には生じ、熟して成長していた。それらに [稲穂の] 取り跡 (刈り跡) は見られなかった。皆さん、その私たちは糠がなく、粃殻がなく、芳ばしく香る実をもつ、かの稲を食べながら、その [米の] 色を [肌の色として] もつ者として [あり]、それを食する者として、《p. 346》それを糧とする者として、長く久しい時を過ごした。その [私たち] において悪しき不善なる法がやや見られたゆえに、かの稲に糠と粃殻が覆った。夕べに刈られた [稲は] 朝に生じず、熟さず、成長しなくなった。それには [穂首の] 刈り取られて無くなった跡が見られた。[また] 朝に刈られた [稲は] 夕べに朝に生じず、

熟さず、成長しなくなった。それには [穂首の] 刈り取られて無くなった跡が見られた。

M46 さあ、私たちは稲田を分割し、領分を決めようではないか、『ここはあなたがたの稲田で、ここは私たちのだ』と。[そこで]彼らは測った^(註113)。比丘らよ、彼ら生ける者たちは稲田の領分を決めた、『ここがあなたがたの稲田で、ここが私たちのだ』と。

M47 時に、比丘らよ、或る生ける者は稲を取りに行つてこう考えた。「私はどうなってしまうのだろうか。自分の稲の分け前が尽きた時、いったい何によって暮らせばよいのだろうか。他に属する稲を盗んでしまおう」。比丘らよ、その生ける者は、自分の稲の分け前を守りながら、他に属する稲を盗んだ^(註114)。

M48 比丘らよ、或る別の生ける者は、かの生ける者が、他に属する稲を盗んでいるのを見た。見てからかの生ける者のもとに赴いてこう言った。「生ける者よ、間違いなくお前は他に属する米を盗んだのだ」。

M49 こういわれてかの生ける者はその生ける者に答えた。「それでは、君、二度とこのようなことは起きないであろう」。

M50 再度、比丘らよ、その生ける者は稲を取りに行つてこう考えた。「私はどうなってしまうのだろうか。自分の稲の分け前が尽きた時、いったい何によって暮らせばよいのだろうか。他に属する稲を盗んでしまおう」。比丘らよ、再度その生ける者は、自分の稲の分け前を守りながら、他に属する稲を盗んだ。比丘らよ、別の生ける者は、かの生ける者が再度、他に属する稲を盗んでいるのを見た。見てからかの生ける者のもとに赴いてこう言った。「生ける者よ、間違いなくお前は、二度に至るまでも、《p. 347》他に属する米を盗んだのだ」。再度、かの生ける者はその生ける者に答えた。「それでは、君、生ける者よ、二度とこのようなことは起きないであろう」。

82 M51 三たび、比丘らよ、その生ける者は稲を取りに行つてこう考えた。「私はどうなってしまうのだろうか。自分の稲の分け前が尽きた時、いったい何によって暮らせばよいのだろうか。他に属する稲を盗んでしまおう」。比丘らよ、三たび、その生ける者は、自分の稲の分け前を守りながら、他に属する稲を盗んだ。

M52 比丘らよ、別の生ける者は、かの生ける者が三たび、他に属する稲を盗

んでいるのを見た。見てからかの生ける者のもとに赴いて、かの生ける者を杖で折檻しつつ、こう言った。「生ける者よ、間違いなくお前は、三度に至るまでも、他に属する米を盗んだのだ」。

M53 すると比丘らよ、その生ける者は両の腕を差し伸ばしてわめいた。「皆さん、不法が世界に現れました。不正なる法が世界に現れました。なぜなら、懲罰すること（杖を取る）が〔今この者によって初めて〕世界に知られたからです」と。

M54 すると比丘らよ、かの〔別の〕生ける者は、地に杖を投げ捨てて^(註115)、両の腕を差し伸ばして泣き叫びわめいた。「皆さん、不法が世界に現れました。不正なる法が世界に現れました。なぜなら、盗みと、嘘をつくことが〔今この者によって初めて〕世界に知られたからです」と。

M55 こうして、比丘らよ、この三種の悪しき不善法、すなわち盗みと嘘をつくことと懲罰することが、まさしくこのようにして初めて世界に現れた。

M56 その時比丘らよ、かの生ける者たちは駆け集まり、集会した。駆け集まってきて、集会し、相談した。

M57 皆さん、私たちの中であらゆる点で見目かたちよく、あらゆる点で偉大さをもつ一人の生ける者を、私たちは選び出そうではないか。彼は、私たちの中で罰せられるべき者を罰してくれるであろう、厚遇されるべき者を厚遇してくれるであろう。私たちは、それぞれの者の稲田における米の分け前を〔税として〕命じよう^(註116)。

M58 そこで比丘らよ、彼ら生ける者たちは、彼らの中で、《p. 348》あらゆる点で見目かたちよく、あらゆる点で偉大さをもつ一人の生ける者を認定した。

M59 あなたは、私たちの中で罰せられるべき者を罰してください。厚遇されるべき者を厚遇してください。あなたを私たちはすべての生ける者の中の最高者に認定します。それぞれの者の稲田の米の分け前の六分の一をあなたに私たちは与えるであります。

M60 [さて]『大衆に（マハー・ジャナ・カーヤ）によって〔最高者に〕認定された者（サンマタ）』という意味から、〔王の名称である〕『マハー・サンマタ』という名が生じた。

『大いなる帰滅の物語』 (Maḥasaṃvartanīkathā)

- M61 『[彼は] 稲田からの米の分け前に価する (アルハティ)』 という意味から、『ラージャー』 (王) という名が生じた^(註117)。
- M62 『[彼は] 正しく守る (ラクシャティ)、つまり守護する』 という意味から、頭に灌頂を受けた者、『クシャトリヤ』^(註118) という名が生じた。
- M63 『都会人と地方人たちにおける、父母のごとき者』 という意味から、『国土の力と強さを獲得した者』 という名が生じた。それ故、「私は王、クシャトリヤ、頭に灌頂を受けた者、国土の力と強さを獲得した者である」と [王は名のる]。
- M64 マハー・サンマタ王の息子はカルヤーナであり、カルヤーナの息子はローチャであり^(註119)、ローチャの息子はウポーシャダであり、ウポーシャダの息子がマーンダータ王である。(以下、王の系譜が続く)

附 『マハーヴァストゥ』 写本 Sa のローマ字転写

先の『マハーヴァストゥ』の翻訳において参照した二写本のうち、より古い貝葉写本である Sa のローマ字転写を以下にあげる。

Transliteration of the Ms. Sa 103b1-107b2

(= SENART I, 338.13-348.9)

- () Indicates lost letters the editor restored.
- { } Indicate letters that should be deleted.
- < > Indicate a place where the editor has supplied letters to make up for the copyist's omission or damage to the manuscript.
- [] Indicates recognizable but unclear letters.
- * Indicates virāma.
- / Indicates daṇḍa.
- # Indicates a mark not clear in meaning.
- ◎ Indicates a double circle marking the end of a chapter.

Remarkable readings of the Ms. Sa have been printed in italic type, and especial important readings in Gothic type.

Sa 103b (SENART I, 338.13-339.12)

- 1 // ◎ // *rājavaṃśe sūtre* / bhavati bhikṣavaḥ sa kālo bhavati sa samayo, yad ayam loko dīrghasyādhvano tyayena samvarttati. samvarttamāne ca puna bhikṣavo loke yobhūyena śatvā ābhāsvare
- 2 devanikāye upapadyanti / bhavati bhikṣavaḥ sa kālo bhavati sa samayo, yad ayam loko dīrghasyādhvano atyayena vivarttati. vivarttamāne khalu puna# bhikṣavaḥ loke, samsthi^{to} lokasanniveśe, anyatarā satvā āyukṣayāya ca karmakṣayāya ca ābhāsvarāto devanikāyāto

- cyavitvā icchatvam āgacchanti. te bhavanti satvā svayampra
- 3 bhāḥ antarīkṣacarā manomayā prītibhakṣāḥ sukhashthāyino yena-
kāmamgamā. dharmatā khalu puna# bhikṣavo yaṃ teṣāṃ satvānāṃ
svayamprabhānāṃ antarīkṣacarānāṃ manomayānāṃ prītibhakṣānāṃ
yenasukhashthāyīnāṃ yena-kāmamgamānāṃ / ime candramasūryā loke na
prajñāyensu / candramasūryehi loke aprajñāyantehi tārakarūpā loke
- 4 na prajñāyensuh. kārakarūpehi loke aprajñāyantehi, nakṣatrapathā
loke na prajñāyante. nakṣatrapathehi loke na prajñāyantehi, rātrimdivā
loke na prajñāyensuh. rātrimdivehi loke aprajñāyantehi, māsārddhamāsā
loke na prajñāyante. māsārddhamāsensuṃ loke aprajñāyamāneṣu,
ṛtusamvatsarā loke na prajñāyante. dharmatā khalu bhikṣavas teṣā(m)
- 5 satvānāṃ svayamprabhānāṃ antarīkṣacarānāṃ yāvad yena-kāmaṅ-
gamānāṃ. kāyamṃ api mahāpṛthivī udakahradam viya samudāgac-
chet* / sā cābhūt(*) varṇnasampanno **gandhasampannā** rasasampannā
sayyathāpi nāma kṣaudra(m) madhv anedakam evamṃ āsvādena /
sayyathāpi nāma kṣīrasantānam vā sarpisantānam vā evamṃ varṇnapratib-
hāso / {so pi abhūt* varṇnasampanna
- 6 nno ca gandhasampanno ca rasasampanno ca sayyathāpi nāma kṣudra
ṃmadhum anedakam evamṃ āsvādo / } atha khalu bhikṣavo anyattaraḥ
satvo capalo lolupajātiyo taṃ pṛthivīra#sam aṅgulīye āsvādesi / tasya
taṃ svādāmeti varṇnenāpi gandhenāpi rasenāpi. anye pi satvā tasya
satvasya drṣṭvānukṛtim āpadyante. te pi pṛthivīrasam aṅgu

Sa 104a (SENART I, 339.12-340.15)

- 86 1 lyāsvādayensu / teṣāṃ api taṃ ##### svādayeti yāvat* rasenāpi / atha
khalu bhikṣavaḥ so satvo aparakālana taṃ pṛthivī(ra)sam ālopakāram
āhāram āhāresi / anye pi satvā tasya satvasya drṣṭvānukṛtim āpadyante.
te pi taṃ pṛthivīrasam ālopakārakam āhāram āhārensuh. yato ca bhikṣ-
avas te satvā taṃ pṛthivī

- 2 rasam ālopakāarakam āhāraṃ āharensuḥ / atha teṣāṃ kāye gurutvam
ca kharatvam ca kakkhataṭatvam ca upanipate / yāpi cābhūt(*) pūrve
sānaṃ svayaṃprabhatā antarīkṣacaratā manomayakāyatā prītibhakṣatā
sukhasthāyitā yena-kāmaṃgamātā sā antarahāye / {*dharmatā khalu
punar bhikṣavaḥ yaṃ teṣāṃ satvānām kāye svayanteṣāṃ khalu punar
bhikṣa*
- 3 *vaḥ satvānām naiva strīṇām strīvyañjanāni prajñāyante* / } <svayaṃ-
prabhatāye> antarīkṣacaratāye manomayatāye prītibhakṣa(tā)ye yena-
kāmaṃgamanaṭatāye antarahitāye candrasūryā loke prajñāyensu / can-
dramasūryehi loke prajñāyantehi tārakarūpā loke prajñāyensu / tāraka-
rūpehi loke prajñāyantehi, nakṣatrapathā loke prajñāyensu / nakṣatra-
pathe
- 4 hi loke prajñāyantehi, rātrimdivā loke prajñāyante. rātrimdivasehi loke
prajñāyantehi, māsārddhamāsā loke prajñāyante. māsārddhamāsehi **loke**
prajñāyantehi, ritusamvatsarā loke prajñāyensu. **sateḥ puruṣavyañ-
janāni. atha khalu satva satva iti samjanayanti** / atha khalu
bhikṣavas te satvās taṃ pṛthivīrasam āhāraṃ āharaṃtā taṃvarṇṇā
tambhakṣā
- 5 tadāhārā ciraṃ# dīrgham adhvānaṃ tṣṭhensuḥ / ye sānaṃ bahu āhār-
am āharensu te abhūnsu du(r)varṇṇāḥ ye alpam āhāraṃ āharensu / **te**
abhūnsu varṇṇavantā. ye abhūnsuḥ / varṇṇavantā te durvarṇṇāṃ satvāṃ
avajānensuḥ / vayam *asmim* varṇṇavanto, satvā ime bhavanto / dur-
varṇṇā. teṣāṃ varṇṇābhivarṇṇapratyayānāṃ mānā*timān*ajātīyānāṃ vi-
haratāṃ pṛthivīraso
- 6 antarahāye / bhūmīparpatākam prādurbhaveya sayyathāpi nāma 87
katrakam evaṃ varṇṇapratibhāso / so *ca* abhū(d) varṇṇasampanno ca
gandhasampanno ca **rasasampanno** ca sayyathāpi nāma {ma} kṣudro
madhu anedako evaṃ āsvādo / atha khalu bhikṣavas te satvā *asmim*
pṛthivīrase antarahite imaṃ udānam udānayensu. aho raso aho raso ti /

sayyathāpi nāma bhi

Sa 104b (SENART I, 340.15-342.5)

- 1 kṣava etarahi manuṣyā subhojanasyāthitā sukhitā bhuktāvino imaṃ udānaṃ udānenti / aho raso aho raso ti / tam eva paurāṇam akṣaram agninyaṃ upanipate arthaṃ cāsyā na vibhāvayensu. atha khalu bhikṣavas te satvās taṃ bhūmiparpatākaṃ āhāraṃ āhāraṃprādurvarṇṇā tadbhakṣās tadāhārā ciraṃ dīrgham adhvānaṃ tiṣṭhensu / ye sānaṃ bahūṃ āhā
- 2 raṃ āharensu *te* abhūnsu / durvarṇṇā, ye alpāṃ āhāraṃ āharensu te abhūṃsu varṇṇavanto. ye *du*varṇṇavantā te durvarṇṇāṃ satvā(m) avajānensuḥ. vayam *asmiṃ* varṇṇavantā, ime bhavanto satvā durvarṇṇā / teṣāṃ varṇṇāti varṇṇapratyayānā(m) mānātimānaḥpātīyānāṃ viharatāṃ bhūmiparpatākaṃ antarahāye. vanalatā prādurbhūtā // *tadyathāpi* nāma kalambukā{ṃ} evaṃ va
- 3 rṇṇa{ṃ}pratibhāsā *mi* abhū varṇṇasaṃpannā pi gandhasaṃpannā pi rasasaṃpannā pi *tadyathāpi* nāma kṣudraṃ madhuṃ anelakaṃ evaṃ āsvādā / atha khalu bhikṣavaḥ / te satvā *tasmiṃ* bhūmiparpatāke antarhite anustanayensu. *mahā raso aho raso ti*. *tadyathāpi* nāma bhikṣavaḥ etarahiṃ satvā kenaci *eva* du(h) khadharmena sprṣṭā anustanāyensu aho vadi aho va
- 4 dīti < tam eva paurāṇam > akṣaram agninya(m) upanipati arthaṃ ca na vibhāvayensu. evaṃ eva bhikṣavas te satvās tasmiṃ bhūmiparpatāke antarhite anustānāyensuḥ. *aho raso aho raso ti* / atha khalu bhikṣavas te satvās tasmiṃ bhūmiparpatāke antarhite vanalatāṃ āhāraṃ āhārantā tamvarṇṇā tadbhakṣā tadāhārā ciraṃ dīrgham adhvānaṃ tiṣṭhensuḥ. / *te* sānaṃ ba
- 5 hu(m) āhāraṃ āharensuḥ te abhūnsu / durvarṇṇā, ye alpāhāraṃ āharensu abhūnsu varṇṇavantā. < ye abhūnsuḥ varṇṇavanto > te tāṃ

durvarṇṇaṃ satvā avajānensuḥ / vayam *asmim* varṇnavantā, ime bhavanto satvā durvarṇṇā. teṣāṃ varṇṇā^{ti}varṇnapratyayānāṃ mānā^{ti}mānajātīyānāṃ <viharatāṃ> vanalatā antarahāye / śāli akaṇo atusaḥ surabhitandulaḥ prādurbhavetaḥ, *somāyaṃ*

6 lūno so kālyaṃ bhavati jāto pakvo virūḍho, avadānaṃ pi se na pra-
jñāyati. so pi kālyaṃ lūno **so** sāyaṃ bhavati / jāto pakvo virūḍho
avadānaṃ cāsya na prajñāyati / atha khalu bhikṣavas te satvās tasmin
vanalate antarihite anustanayensu. aho vade aho vade ti. tadyathāpi nāma
bhikṣavo etarahiṃ satvā kenacid *eva* duḥkha

Sa 105a (SENART I, 342.5-343.9)

1 {kha}dharmena sprṣṭā anustanayensu / tam eva paurāṇam akṣaram
agninyaṃ upaniṣate arthaṃ cāsya na vibhāvayensu / <evam eva bhi-
kṣavas te satvās tasmim vanalate antarihite anustanayensuḥ. aho vadi
aho vadīti.> atha khalu bhikṣavas te satvā tasmim vanalate antarihite
taṃ śāliṃ akaṇaṃ atusaṃ surabhitandulaphalaṃ āhāram āharantā
ciraṃ dīrgham adhvānaṃ tiṣṭhensu / yato ca bhikṣavas te satvā taṃ
śāliṃ akaṇaṃ atusaṃ surabhitandula

2 phalaṃ āhāram āharensu / atha sānaṃ strīṇāṃ strīvyāñjanāni prādur-
bhavensuḥ puruṣāṇāṃ puruṣavyāñjanāni prādurbhavensu. ativelam ra-
ktacittā anyonyaṃ upanidhyāyensuḥ. anyonyaṃ raktacittā *anyamanyaṃ*
upanidhyāya *tā* anyamanyaṃ samrañjensu anyamanyaṃ samraktā
anyamanyaṃ dūṣayensuḥ / ye khalu puna bhikṣavaḥ satvā paśye

3 nsu dū^{###}ṣayimānan, te tatra daṇḍaṃ pi kṣipensu leṣṭuṃ **pi** kṣipensu
pāmsu pi kṣipanti. adharmo bhavanto loke prādurbhūto, asaddharmo
bhavante loke prādurbhūto, yatra hi nāma satvo satvaṃ dūṣayati /
tadyathāpi nāma bhikṣavaḥ etarahiṃ dārikāye vuhyaṃtīye daṇḍan ni-
kṣipanti leṣṭuṃ pi kṣipanti *pāmsu kṣipanti* taṃ eva paurāṇa

4 m akṣaram agninyaṃ upanipate / arthaṃ cāsya na vibhāvayensu /

tadā khalu puna taṃ bhikṣavaḥ adharmasammataṃ *ca* ayajñasammataṃ
ca / avinayasammatañ ca / etarahiṃ khalu puna {*te*} taṃ bhikṣava
dharmasammataṃ ca yajñasammataṃ *ca* vinayasammataṃ ca / atha
khalu bhikṣavas te satvā tena adharmena ar^{tt}iyantā vijugupsatām ekā-
ham pi viprivasensu dvyaham

5 pi vipravaśensu tryaham pi vipravaśensu caturaham pi viprivasensu
pañcāham pi pakṣam pi māsam pi viprivasensu / gr̥hakarmāntāny api
kā^{rā}yensu, yāvad eva tasyaiva adharmasya praticchādanārtham / atha
khalu bhikṣava anyatarasya satvasya śālihāraṃ gatasya etad a-
bhavat*. kim asya nāma aham kilamāmi katham purāham kilamā

6 mi sāyam sāyamāsāya prātam prātarāśāya. yan nūnāham śakṛd eva <
daiva>sa<ṃ> sāyamprātikam śālim hareyam. āhare khalu bhikṣava
so satvā sakṛd eva <daiva>sa<ṃ> sāyamprātikam śālim / atha khalu
bhikṣavaḥ anyatarasatvo taṃ satvam etad uvāca / ehi bho satva śālim-
hāram gamiṣyāmaḥ / evam ukte bhikṣavaḥ so satvo taṃ satvam etad
uvāca / gaccha tuvaṃ sa

Sa 105b (SENART I, 343.9-344.11)

1 tva, anīto mayā sakṛd eva sāyampratiko śāliḥ. atha khalu bhikṣavas
tasyāpi satvasya etad abhavat*/ evam pi **dāni** kriyamāṇam śobhanam
bhavati. ya(ṃ) nūnāham pi sakṛd eva *dvi*hikam *tri*hikam taṃ śāli(ṃ)
hareyam. āhare khalu bhikṣavaḥ so pi satvo sakṛd eva *dvi*hikam
*tre*hikam śālim / atha khalu bhikṣavaḥ anyataro satvo taṃ satvam
etad u

90 2 vāca / ehi bho satva śālihāram gamiṣyāma / evam ukte so {mahā}-
satvo taṃ satvam etad uvāca / gaccha tuvaṃ bho satva, anīto mayā sakṛd
eva *dve*hikam *tre*hikam śāliḥ / atha khalu bhikṣava tasyāpi satvasya etad
abhavat* / evam pi dāni kriyamāṇam śobhanam bhavati / ya(ṃ) nūnā-
hampi caturā^rhikam pañcā^rhikam śālim āhareyam. ā^rkhare khalu bhikṣa

3 vaḥ so pi satvo sakṛd eva caturāhikam pañcāhikam śālim. yato ca bhikṣavaḥ / te satvā taṃ śālim akanam atusam surabhitaṇḍulaphalam sannidhikāram paribhujensuḥ / atha khalu tasya śālisya kaṇo ca tuso ca prādurbhavati. so pi sāyam lūno kalyam na yāvate na pakvo na virūḍho, avadānam cāsya prajñāyati / **so pi kālyam lūno so sā**

4 **yam naiva# jāto na pakvo na virūḍho avadānam cāsya prajñāyati** / atha khalu bhikṣavas te satvā samdhāvensuḥ / samdhāditvā sannipativā mantrām mantrayensuḥ. vayam bha{ga}vanto svayamprabhā antarīkṣacarā manomayā prītibhakṣā sukhashth[ā]yino yenakāma nī gamā. teṣām asmākam svayam prabhānām antarīkṣacarāṇām manomayānām prītibhakṣānām

5 sukhashthāyinām yenakāmaṃgamānām candramasūryā loke na prajñāyesu. candramasūryehi loke aprajñāyantehi / tārakarūpā na prajñāyante. tārakarūpehi loke aprajñāyantehi, nakṣatrapathā loke na prajñāyentsu. nakṣatrapathehi loke aprajñāyantehi, rātriṃdivam na prajñāyentsu. rātriṃdiva aprajñāyantehi, māsārdhamāsā na prajñāyentsu. mā

6 {mā} sārddhamāsehi aprajñāyantehi, ritusamvatsarā na prajñāyentsu / ayam api mahāpṛthivī udakahradam viya samudāgacchati / tadyathāpi nāma sarpisantānam vā kṣīrasantānam vā evam varṇṇapratibhāso abhūṣi / varṇṇasampanno ca gandhasampanno ca rasasampanno ca tadyathāpi nāma kṣudro madhu anelako evam āsvādo. atha khalu bhavanto anyataro

Sa 106a (SENART I, 344.11-345.14)

91

1 <satvo> capalo lolupajātiyo taṃ pṛthivīrasam amgulīye āśvādayate. tasya taṃ āśvādayeti varṇṇenāpi gandhenāpi rasenāpi / atha khalu bha#vanto so satvo taṃ pṛthivīrasa#m aparakālena āloka kārakam āhāram āhāresi / vayan tasya satvasya dṛṣṭvānukṛtim āpadyantā. taṃ

pr̥thivīrasam ālokakāarakam āhāram āharema.

- 2 yato ca vyaṃ bhavanto pr̥thivīrasam ālopakāarakam āhāram āharema / atha so kāye gurutvaṃ ca kharatvaṃ ca rukkhataṃ ca upanipate / yāpi sā pūrve abhūṣi svayaṃprabhatā antarīkṣacaratā manomayakāyatā pr̥tibhakṣatā sukhashthāyitā yena kāmaṅgamatā sā antarahāyi / teṣāṃ bhavanto **tāye** svayaṃprabhatāye antarīkṣacara
- 3 tāye manomayakāmatāye pr̥tibhakṣatāye sukhashthāyitāye yena kāmaṅga <ma> tāye ntarhitāye candrasūryā loke prajñāyensuḥ. candrasūryehi loke prajñāyantehi tārakabhayā prajñāyensu / <tārakarūpehi prajñāyantehi, nakṣatrapathā prajñāyensuḥ.> nakṣatrapathehi prajñāyantehi, rātrimdivā prajñāyensu. rātrimdivehi prajñāyantehi, māsārdhamāsā prajñāyensuḥ / māsārdhamāsehi prajñā
- 4 yantehi, ritusamvatsarā prajñāyensu. te vyaṃ bhavanto / <taṃ> pr̥thivīrasam āharam āharantā taṃvarṇnā taṃbhakṣā tadāhārā ciraṃ dīrgham adhvānaṃ tiṣṭhema / yato ca sānaṃ keci pāpakā akuṣalā dharmā prajñāyensu, yato ca so bhavanto **keci** pāpakā akuṣalā dharmā ḥ prajñāyensuḥ / atha so pr̥thivīraso antarahāye bhūmiparpatākaṃ prādu
- 5 rbhave / tadyathā **pi** cchatrakāṃ / evaṃ varṇnapratibhāso so pi abhūṣi varṇnasampanno ca gandhasampanno ca. tadyathāpi nāma kṣudro madhu anedako evaṃ āsvādo / te vyaṃ bhavanto bhūmiparpatākaṃ āhāram āharantā taṃvarṇnā taṃbhakṣā tadāhārā ciraṃ dīrgham adhvānaṃ tiṣṭhāma / yato ca sānaṃ kenaci pāpakā akuṣalā dharmā prajñāyensuḥ atha so
- 92 6 bhūmiparpatāka antarahāye / vanalatā prādurbhave. tadyathāpi nāma kalāmbukā evaṃ varṇnapratibhāsā / sā pi abhūṣi varṇnasampannā ca gandhasampannā ca rasasampannā ca. sayyathāpi nāma kṣudro madhu anedako evaṃ āsvādo / te vyaṃ bhavanto vanalatām āhāram āharantā taṃvarṇnā taṃbhakṣā tadāhārā dīrgham adhvānaṃ tiṣṭhema / yato

ca sã

Sa 106b (SENART I, 345.14-346.19)

1 nam keci pãpakã akušalã dharmã prajñãpayensu / yato ca so bhavato keci pãpakã akušalã dharmã prajñãyensuḥ atha sã vanalatã antarahãye / sãlim akanam atusam surabhitandulaphalam pradurbhaveyo. sãyam luno so kalyam bhavati jãto pakvo virudho, avadãnam pi ca se na prajñãyati. te vayam bhavanto ta(m) šãlim

2 akanam atusam surabhitandulaphalam aharam aharanto tamvarnã tambhakšã tadãhãrã ciram dirgham adhvãnam hi tištãma / yato ca sona kenaci pãpakã akušalã dharmã prajñãyensuḥ / atha so šãlisya kãno ca tušo ca paryavanahe / yo ca sãyam luno so kãlyam na jãto na pakvo na virudho, avadãnam pi ca se prajñãyati. so pi kãlyam

3 luno so sãyam na jãto na pakvo na virudho, avadãnam pi ca se {vase} prajñãyati. ya<n> nũnañ cãyam šãliksetrãni vibhajema šmãm nayemaḥ, imam# bhavantontam šãliksetram imam asmãkam, mãpayensu / atha khalu bhikšavas te satvã šãliksetrãnãm šmã nayensuḥ / imam bhavantãnãm šãliksetra[m] imam asmãkam / atha khalu bhikšavo anya

4 tarasya satvasya šãlihãram gatasya etad abhvat* / ki(m) sya nãma aham bhavišyam, kena sya nãma jivikãm kalpešyam svake šãlibhãge kšĩne. yan nũnam aham adinnam anyãtakam šãlim adityeyam / atha khalu bhikšavo so satvo svakam šãlibhãgam parirakšanto adinnam anyã#takam šãlim adityeya. adrãksid bhikšavo nyatarah satvo tam sa

5 tvam adinnam anyãtakam šãlim adiyantam drštvã ca puna yena so satvo tenopasamkramitvã tam satvam etad avocat*. api nãma tvam bho satva adinnam anyãtakam solim adiyasi / evam ukte bhikšava so satvo tam satvam etad avocat* / tena hi bho na puna evam bhavišyati / dviťyam pi bhikšavaḥ tasya satvasya šãlihãram gatasya etad a

6 bhvat*. kim sya nãma aham bhavišyam, kena sya nãma aham jivikãm kalpešyam svake šãlibhãge kšĩne. yan nũnam aham adinnam

anyātakam śālim ādiyeyam / dvitīyakam pi bhikṣavaḥ so satvo svakam śālibhāgam pariṣakṣanto adinnam anyātakam śālim ādiyēt*. adrākṣīd bhikṣavaḥ so satvo tam satvam dvitīyakam pi adinnam a

Sa 107a (SENART I, 346.19-348.3)

- 1 nyātakam śālim ādiyantam / drṣtvā ca punar yona so satvo tenopasaṃkramitvā tam satvam etad avocat* / asti nāma tvam bho satva yāvadvitīyakam pi adinnam anyātakam śālim ādīyasi / dvitīyam pi bhikṣavaḥ so satvo tam satvam etad avocat* / tena hi bho satva na puna evam bhaviṣyati / tṛtīyakam pi bhikṣavaḥ tasya satvasya śālihāram gata
- 2 syaitad abhavat*. ki(m) sya nāma aham bhaviṣyam, kena sya nāma **aham** jīvikām kalpayiṣyam svake śālibhāge kṣīne. yam nūnam aham adinnam anyātaka < m śāli > m ādiyeyam / tṛtīyakam pi bhikṣavaḥ so satvo svakam śālibhāgam parirakṣanto adinna(m) anyātakam śālim ādīyati / adrākṣīd bhikṣavaḥ so satvo tam satvam tṛtīyakam pi adinnam anyātakam śāli
- 3 m ādiyantam. drṣtvā ca punar yena so satvo tenopasaṃkramitvā tam satvam daṇḍena paritādayanto evam āha. asti nāma tvam bho satva yāvattṛtīyakam pi adinnam anyātakam śālim ādiyasi / atha khalu bhikṣavaḥ so satvo *bāhāyām* bāhām pragṛhya vikraṇde vikroṣe. adharmo bhavanto loke prādurbhūto asaddharmo bhavanto loke prādurbhūto yatra nā
- 4 ma daṇḍādānam *loke* prajñāyati / atha khalu bhikṣavaḥ so satvo pṛthivīyam daṇḍam āveṣṭitvā ubhau bāhū pragṛhya vikraṇde vikroṣe. 94 adharmo bhavanto loke prādurbhūto / asaddharmo bhavanto loke prādurbhūto yatra hi nāma adinnādānañ *cā* mṛṣāvādam ca loke prajñāyati / evam ca punar bhikṣavaḥ imeṣām trayāṇām pāpakānām akuśalānām dharmā
- 5 nām prathamānam evam eva loke prādurbhāvo / tadyathā adinnā-

dānasya mṛṣāvādasya dandādānasya ca / atha khalu bhikṣavaḥ te satvā
 samdhāvensuḥ / sannipātensu sandhāvitvā sannipatitvā sa <m>ma##
 ntrensuh. yaṃ nūnaṃ vayaṃ bhavanto yo asmākaṃ satvo sarvaprāsādi-
 ko **ca** sarvamaheśākhyo ca taṃ sammanyemaḥ yo asmākaṃ
 nigrahārahaṃ ca nigr

6 hñiyā pragrahārahaṃ ca pragrḥneyā deśata vayaṃ svakasvakeṣu
 śālikṣetreṣu śālibhāgaṃ / atha khalu bhikṣavaḥ te satvā yo sānaṃ satvo
 abhūṣi sarvamāsādiko **ca** sarvamaheśākhyo ca sammanyensu. bhavān
 asmākaṃ satvo nigrahārahaṃ ca nigrḥnatu pragrahārahaṃ ca pragr-
 hnatu vayaṃ te sarvasatvānāṃ agratāye sammanyema **te** svakasvakeṣu
 śāli

107b (SENART I, 348.3-9)

1 kṣetreṣu ṣaṣṭhaṃ śālibhāgaṃ dadāmaḥ. mahato janakāyena sammato
 ti mahāsa <m>manto ti / saṃjñāṃ udapāsi. arhati śālikṣetreṣu śāli-
 bhāgo ti rājā ti saṃjñāṃ udapāsi / saṃyak* rakṣati paripāleti mūrddh-
 (n)-ābhiṣikto <kṣatriyo> saṃjñāṃ udapāsi / mātāpitṛsamo
 naigamajānapadeṣū tti jānapadasthāvīryaprāpto <ti> saṃjñāṃ
 udapāsi / tenāhaṃ rājā

2 kṣatriyo mūrddh(n)ābhiṣikto janapadasthāvīryaprāpto ti // © //
 rājño **mahā**sammatasya putro kalyāṇo kalyāṇakasya putro **rocasya roca**
 putro upośadho upośadhasya putro rājāmāndhāto. [...]

注

(1) 『大いなる帰滅の物語』は韻文であるが、意味を忠実に伝えることだけを目的にして散文
 で和訳した。蔵文『文献X』は大部分が散文であるが、所々に韻文の要約偈がある。博士論
 文においてその原文をセクション (§) に分けて番号をつけて校訂を行ったので、今回の翻
 訳でも博士論文で付けたセクション番号をそのまま用いた。

(2) 本論文の最後にある、参考文献(1)を見よ。この本にはMSKの校訂テキストと独訳、な
 らびに『文献X』の校訂テキストと独訳が入っている。まもなくドイツの Indica et Tibetica

叢書から改訂版が出版される予定。

- (3) 参考文献(2)を見よ。
- (4) 立世論と『ローカ・パンニャッティ』が犢子正量部の傳承に属するという事を証明した二本の拙稿があるので、部派所属の確認についてはそれらを参照されたい：「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」、『中央学術研究所紀要』第27号、1998年、55-91頁、ならびに「犢子部の三法度論と正量部の現存資料の関係——立世論の部派所属の追加証明の試み——」、『印度学仏教学研究』50巻1号、2001年、386-390頁。今回の『ローカ・パンニャッティ』の翻訳も、この部派所属の証明作業の延長線上になされたものである。
- (5) ここで写本の四音不明。その不明の—U—jagatiの箇所をもし samsthānavaj-jagati と読むならば、「かつて昔、[美しい]姿かたちに恵まれた生き物たちに、この不幸が生じた」という意味になる。
- (6) 太陽が出現した東のアシュレーシャー宿(柳)のちょうど百八十度反対側に、月が出現した西のシュラヴァナー宿(女)が位置する。
- (7) この詩節のパーダ a はパーリ文アッガンニャ経の次の文(p. 86)に対応すると思われる：Ettāvatā kho vāsetthā, ayaṃ loko puna vivaṭṭo hoti. 「このような状態にまで、この世界が[成劫として]展開した」。梵文の iyatā は、パーリ文の ettāvatā (“to such an extent; so far, to that extent”)にあたる。
- (8) 「断絶しない」と訳したチベット語の ma chag pa は JÄSCHKE の辞書によれば “uninterrupted” つまり「断絶しない、途切れない」の意味であり、もしその意味を「切り跡の残らない」と考えれば、原語として仏教梵語の avadāna 「切り跡」の語が関係しているのかもしれない。すると *an-avadāna の語が原語に想定されよう。しかしここに対応する MSK の文を見ると、それにあたる表現はない。MSK にある語として、疑うべき語が、akaṇa 「胚芽のない」である。チベット語の chag の語には、JÄSCHKE の辞書によれば、名詞として “a large tuft or bunch of flowers, ears of corn, etc.” の意味がある。そこで kaṇa という梵語を APTE の梵英辞書で引いてみると、六番目の語義として、“an ear of corn” の語義が載っている。すると、この ma chag pa の原語は akaṇa を訳そうとして誤訳したものである可能性もあると思われる。このように二つの可能性があるが、私としては前者の「切り跡の残らない」の解釈を取りたい。
- (9) 『如意樹[から生じた]衣』とは欲界の天界ならびに北クル洲の人間が着用する、如意樹に実る衣服である。ジャンブ洲においては世界の最初の時代だけにこの如意衣は生える。如意樹が出現して、その樹の枝に生じて垂れ下がった布を人間たちは衣として着た。
- (10) この詩節の後半をいいかえれば、「今日までの人間の歴史において、あらゆる悪い出来事については、必ずその救済策が後を追いかけて出現してきた」。つまりラサーの消失に対してはパルパタカが救済策として出現し、パルパタカの消失に対してはヴァターラターが救済策として出現する、というように、歴史は人間に或る大きな打撃を与えた時でも、その後には必ず救済を用意していたことを、作者サルヴァラクシタは指摘する。
- (11) この詩節の d パーダにおいて写本に四モーラの欠損がある。文がいわんとすることは大体理解できるが、この詩節の後半の訳文のどこかに更に何らかの単語が一つ入るはずで

ある。

- (12) この詩節の後半の『誰がこの、甚だ卑しい、道徳的行為から遠く隔たったことをしてよいものか』という文は、前の詩節のように、「作者の感想を語った文」である可能性がないではないが、しかしそれにしてはかなり激しい口調であるので、作者の感想ではなく、文中の人々が発した非難の言葉なのであろう。
- (13) MSK のこの文は、文献Xに対応文をもたないが、パーリ文アッガンニャ経の「また、ヴァーセッタとバーラドヴァージャよ、その時、淫法(性交)をなした生ける者たちは、一月の間あるいは二月の間、村や町に入ることが出来なかった」という文の、パラレルの聖典の言葉をサルヴァラクシタは知っていて、それに基づいて書かれたと思われる。
- (14) 詩節の前半と後半とのつながりを考えると、詩節の前半は、「彼らはその時、夕べと朝に(いちいち)稲を収穫した、それを夕食と朝食として食するために(面倒がらず、稲を貯蔵することなく、知足を知って)」という様に解釈できるであろう。
- (15) 以下、梵文の 3.1.19 から 25 までは、各詩節ごとに同音を繰り返す言葉遊びがなされている。音のならばを最優先させるため、文の意味は少しぎこちないものとなる。
- (16) 「食事の時は、人間にとって、不規則なものとしてやって来る」とは、「空腹を感じる時は、人間にとって、不規則なものとしてやって来る」という意味であろう。この文の a-prati-samayo の意味は難しいが、SCHMIDT, *Nachtr* の辞書に、pratisamayam “adv. immerdar” と記載されているのを参照して、a-prati-samayo を「不規則なもの」と解した。
- (17) 順番からいえば、ラサー、パルパタ、ラター、稲となるはずであるが、韻律上の要請から、二番目のパルパタカと三番目のバターラターの順序が入れ替わっている。対応する文献Xの文では正しい順序に並んでいる。
- (18) 本文の apadāna は本来は「切ること」を意味するが、ここでは稲穂を切って収穫した跡、という意味であろう。しかし古い時代の稲の収穫の仕方は穂刈りであって根刈りではないため、ここでいう「切り跡」とは地面に残った陸稲の「切り株」を意味するのではなく、穂だけが刈り取られた跡を意味すると思われる。
- (19) 梵文 3.2.6~7 の二詩節に対応する蔵文はない。梵文では 3.2.1 以降、同音を繰り返す言葉遊びをずっと続けている。興に乗った場合には、蔵文には対応文がないような自由な創作も梵文ではなされた。梵文における言葉遊びは 3.2.10 まで続く。
- (20) ヨージャナ(由旬)は長さの単位。一ヨージャナは律蔵などの初期仏教聖典では約六キロ半の距離をあらわすが、ただし聖典以外では通常十三キロの距離をあらわす。
- (21) チベット訳 dbang po'i dkyil du は「支配領域において」「領土の中に」という意味であろう。しかし「[合議による] 政権の中心において」とも訳せる。
- (22) チベット訳を直訳すると、「さらに、偉大な大地に (sa chen po la)、四ヨージャナづつをそれぞれに与えた」という奇妙な意味になる。MSK の対応文によって、ここでチベットの翻訳者は梵語の mahelā 「女」の語を mahī 「大地」と間違えて「偉大な大地に」と訳したのではないかと推測される。そこで「女たちに」と修正して訳した。
- (23) この文には言葉遊びが仕組まれており、「なぜなら徳に慣れている存在は、悪徳と一緒に (doṣaiḥ saha) 衣服を作ることはない (na vāsam kurvanti)」という別の意味でも読め

るように出来ている。vāsa の語は「住むこと」と「衣服」の両義をもつ。

- (24) 梵文 3.2.14 以後の十八の詩節 (3.2.14~31) では、各詩節ごとに、同音を繰り返す言葉遊びがなされる。この箇所では梵文と蔵文がなかなか逐字的に一致しないのは、そのせいである。
- (25) ここで、avi-śaraṇam と読んで、「羊たちが拠り所とする」と訳したが、私はこの訳に不満であり、この訳は暫定的なものである。a-viśaraṇam と読む可能性がある。a-viśaraṇam に対して「堅固な、揺るがざる、不動の」という意味が期待されるが、この意味を裏付ける典拠・出典が今のところ見出せない。
- (26) ここでは、蔵文と梵文との順序立った関係が少し乱れ、きれいに一対一対応していない。蔵文§78の文に対して梵文の 3.2.31ab が対応し、蔵文§80の文に対して梵文の 3.2.31d が対応するかたちになっている。
- (27) 梵文の 3.3.3~11 に対応する文は蔵文にない。梵文のこの箇所はサルヴァラクシタの純粹な創作であろう。
- (28) 喜ばせた (*rañjayati) から、王 (*rājan) であるという、王という語の通俗語源学的な説明がなされている。
- (29) 十不善業道の出現が以下に語られる。『他を傷つけたり殺したりすること』(一) がまず初めに来るはずであるが、蔵文テキストでは欠落している。
- (30) アディアーヤカというバラモン階級の別の呼び名を用いて、バラモン階級の祖となった人々が本来はどのような活動をする社会集団として現われたのかを説明している。
- (31) ヴリシャラ (vṛṣalāḥ) は、第四階級シュードラの呼び名である。「牡牛の行為」(vṛṣakarman) とは、犁を引くことを意味するのであろう。つまり林から出て、農耕による定住生活に入った人々が、牡牛 (vṛṣan) のように肉体労働をしているために、世間から賤しめられてヴリシャラと軽蔑的に呼ばれるようになったのが、シュードラ階級の起源であると見る。
- (32) ヴィシュ (viś) とは、第三階級ヴァイシャのことである。ヴィシュという言葉の由来を、ヴィシュヴァ (一切) という梵語に結びつけて説明している。クシャトリヤとブラーフマナとシュードラという特別な三つの社会的区分がまず初めに出来て、それからそれらに属さない残りすべての様々な職業の人間が、まとめてヴィシュつまりヴァイシャという名前の集合体に所属すると見なされるようになった、とヴァルナ (四種姓) の成立をうまく歴史的に説明している。このようにして四つの種姓が出来、それによって、人間の大部分については (prāyeṇa)、所属する種姓の名前が付けられたわけであるが、しかしその大部分に属さない例外的な人々がいる。いわゆる不可触賤民として、ヒンドゥー・カーストに入れてもらえなかった人々である。そのチャンダーラと呼ばれる人々について、この正量部の伝承は次の詩節で語る。
- (33) 「様々な」と訳した原語は sna tshogs である。これに対応する梵語は MSK3.3.23a にある viśva (あらゆる) である。
- (34) チベット訳にはチャンダーラ (gdol rigs) とあるが、これはチベット訳者の間違いかそれ以前の伝承の混乱であって、正しくはヴィシュもしくはヴァイシャという言葉がここに

来るべきである。前後の文脈によって、また MSK 3.3.23 との比較によって、チャンダラではなくて第三階級ヴァイシャの成立が語られていることは明らかである。

- (35) チャンダラ *caṇḍāla* という言葉は *caṇḍa* + (ā-) $\sqrt{ā}$ と分解できる。つまり「チャンダ(凶悪な者) [の命] を取る者」という語源的な解釈を用いて、ヒンドゥー社会における不可触賤民の呼び名であるチャンダラの語の起源を説明しようとしている。罪人を処刑する死刑執行人としての仕事が、チャンダラのチャンダラたるゆえんと見なされていた。チャンダラの語は、漢訳経典で「旃陀羅」等と音写され、また「屠種・屠家・屠者・屠殺・殺者」などと訳されたが、荻原雲来『梵和大辞典』(新装版、p. 455)によれば、「執暴悪人」とも訳された。この「執暴悪人」という訳語はまさしくチャンダラの語が「チャンダ(暴悪な者) を執る者」と解釈されていた証拠となる。
- (36) 「味」と訳した *rasa* を「欲求」と訳すこともできる(私はハーン先生と相談してドイツ語訳ではそう訳した)が、しかし人々の欲求が低下したのではなく、十不善業道による劣悪化の現象として、食用食物の味が下がってゆくことをこの文は説明していると考えた方がよいであろう。
- (37) この第3章4節から第4章1節の、いわゆる「アッガンニャ神話のつづき」については、次にあげる拙稿において内容の分析と解説がなされているので、参照されたい：「インド正量部の宇宙論的歴史における人間と動物と植物の関係」、『日本仏教学会年報』第68号、2003年5月、71-85頁。
- (38) 本文の *aruci-hata* を二通りに訳すことができる：「無食欲に苦しめられる時には」、「嫌悪を克服する時には」。
- (39) このチベット訳の文面は驚くほど MSK と合致する。「表皮や葉などが無い (**tvak-patṛādi-virahita*-)、上質の甘く快い味をそなえた (**praṇīta-madhura-anukūla-rasa-sahita*-)、最高の砂糖黍が (**ikṣu-vara*-)、地表を飾った」。
- (40) 生バター (*navanīta*) は酸乳 (*dadhi*) を攪拌することによって出来る、発酵バターの原料となる乳脂肪塊である。それをさらに加工してギー (*ghṛta*) が出来る。それをさらに加工すると醍醐 (*maṇḍa*) が出来る。つまり、生乳 (*kṣīra*) → 酸乳 (*dadhi*) → 生バター (*navanīta*) → ギー (*ghṛta*) → 醍醐 (*maṇḍa*) という乳加工の五段階があるわけであり、この五段階は、パーリ聖典(例えば DN, I, p. 201)において、生乳 (*khīra*) → 酸乳 (*dadhi*) → 生バター (*navanīta*) → サルピス (*sappi*) → サルピスの醍醐 (*sappimaṇḍa*) というかたちで説かれるものに相応していると思われる。なお、ギー (*ghṛta*) とサルピス (*sarpis*) の関係について付言すれば、この MSK の記述では、ちょうどパーリ聖典の *sappi* にあたる位置に *ghṛta* の語が置かれているため、ギーとサルピスは同一の加工段階にあると推測できる。しかしチベット訳を見ると、「生バターからサルピスの醍醐 (*mar gyi ñiñ khu* = **sarpir-maṇḍa*, cf. Mvy 5683) が生じた。ギー (*ñun mar* = **ghṛta*) からギーの醍醐 (*mar gyi sñiñ po* = **maṇḍa*) が生じた」とあり、生バター → サルピスの醍醐、そしてギー → ギーの醍醐という順序で語られている。ここではサルピスの醍醐を、ギーの別名、同義語として使っていると見てよい。その後に出てくる「ギーの醍醐」とはチーズのことであろう。すると生乳 → 酸乳 → 生バター → サルピス → サルピスの醍醐(すなわちギー) → ギーの醍醐という

六段階があることになる。しかし私は、ギーとサルピスはあまり厳密に区別する必要はなく、実はほとんど同じものであるため、六段階ではなく、五段階で十分なのではないかと思う。

- (41) 仲が悪いとされる馬と水牛の間でも、互いを敵視することがなかった。
- (42) この文は二重義をもつ。vihaṅga という言葉は、「鳥」と「矢」の二つの意味をもつ。
- (43) 「ある時は〔手綱で〕制御されある時は制御されない」と訳した *ñes pa dañ ma ñes pa'i* のチベット訳は、その原語として想定可能な、MSKに見られる *niyamana-niyatāḥ* の語を誤訳したものではないかと思われる。しかしここは一応チベット訳のように訳しておいた。
- (44) 本文 'jig rten mi rnam de 'dra bar bza' ba を、'jig rten <gyi> mi rnam <la> de 'dra ba'i bza' ba の如く読んで、訳した。de 'dra bar bza' ba を de 'dra ba'i bza' ba と修正して読んだ理由は、MSK 4.1.18a に *aśanam ... tādrśam* という対応する語があるからである。
- (45) 書名は本論文の最後にある、参考文献(3)を見よ。
- (46) 参考文献(2)を見よ。
- (47) 参考文献(4)を見よ。
- (48) 参考文献(5)を見よ。
- (49) 立世論と『ローカ・パンニャッティ』(Loka-p)は、その主要部分において内容が共通し、両者はインドで成立した同一の作品に遡るものと見てよい。しかし立世論では、そのアッガンニャ経対応箇所が最後の章にあり、翻訳が突然何らかの事情で無残に中断されてしまったかのように、あるいは、翻訳後にその最後の部分が失われてしまったかのように、作品が異常なかたちで終了している。この、最後が切れてしまったかたちになっている立世論のアッガンニャ経の対応部分が、もし最後が切れなければ、本来どのように続いてゆくはずだったのかを教えてくれるのが、パーリの Loka-p である。そのため、特にこの箇所においては、ひどく損なわれたテキストである Loka-p という作品も、その存在価値を大いに発揮する。Loka-p の伝承にのみ、『如意樹 [から生じた] 衣』が語られ、またチャンダーラ階級の成立、副食物としての豆類や砂糖黍の出現、家畜の出現などの後の時代の物語が語られる。これらの点において、正量部の文献 MSK や文献 X の伝承と合致していることを、読者はこの翻訳を通して確認できる。これは Loka-p が MSK と同じ部派系統に属していることのかなり重要な証拠となる。
- (50) 『南伝大蔵経、長部経典 3』、大蔵出版、1936年；『原始仏典三 ブッダのことば I』、講談社、1985年。なおこの論文が書かれた2003年10月の時点では、近く春秋社から出る予定の『原始仏典 長部経典 III』や、大蔵出版から出る予定の片山一良訳の『長部 (ディーガニカーヤ)』のアッガンニャ経の翻訳を参照することは出来なかった。
- (51) 参考文献(11)の拙稿を参照。
- (52) 最近の重要な成果として、参考文献(6)の、S. COLLINS (1993)の研究がある。
- (53) このアッガンニャ神話の部分は、ボリス・オグイベニンの次の書にも収録されており、参照した。Boris OGUIBÉNINE (1996): *Initiation pratique à l'étude du sanskrit bouddhique*, Paris. pp. 77-88.

- (54) 参考文献(10)を見よ。このファクシミリ版を早速筆者に送って下さった湯山明博士の御好意に感謝する。
- (55) PTS版本文の *rasa-paṭhavī* を、スリランカの伝承に従い、*rasā paṭhavī* と読み、同格複合語として『ラサーなる地』と訳した。*rasā paṭhavī* と読むべき理由については、参考文献(11)を参照されたい。最初の神話的な食物は、ラサーという固有名詞で呼ばれる。世界は初め水で覆われていたが、大地が出現した。その後次第に乾いてゆく世界の表面に、原初の時だけに現われる、地そのものが粘度の強い半液体状の食べ物となったものがラサーであると考えられる。このどろりとした食物ラサーの次に、『地のパッパタカ』*bhūmipappaṭaka* が第二の神話的な食物として出てくるが、これは乾いている地から成る食物であるらしい。生命を養う栄養をもつ地が、最初は液体であり、次第に乾燥化して固形の食べ物になり、やがて食用食物の姿になってゆくという段階的な食物の進化の考え方が背後にあると思われる。
- (56) 原語の *ālumpa-kāraṇaṃ* については、Steven COLLINS (1993), pp. 359-360 の意見に従って訳した。
- (57) この文は、「成劫が終了するまで、この世界がここまで展開した」「ここまでで、世界形成の展開がひとまず完成し、一つの時代が終わった」と *Aggañña-sutta* の作者によって考えられていることを、示しているのであろう。正量部のMSKに見られる宇宙論が、ここまでの出来事、つまり太陽と月の出現の出来事までを成劫と考え、この後の出来事を住劫と理解していることが参考になる。
- (58) *bhūmipappaṭaka* を格限定複合語として『地のパッパタカ』と訳したが、同格複合語として『地なるパッパタカ』と訳すべきかもしれない。なおブッダゴーサは「そのように出現した」の言葉に註釈をつける。その説明によれば、池が水を断たれて干上がると、乾いた泥の膜 (*sukkha-kalala-paṭala*) が出現するように、そのように『地のパッパタカ』は出現した、という。パッパタカは大地に生えるキノコのような植物としてイメージされるべきではあるまい。むしろ泥が乾いて出来たビスケットのような感じの、乾燥した地から成る食物であると思われる。この *pappaṭaka* の語義については、Ratnach, s.v. *pappaṭa* (*parpaṭa*) “a thin paper-like dried cake”, また *Pāiasadda-mahaṇṇavo*, s. v. *pappaṭa* / *pappaṭaga* の説明 (ヒンディー語)、ならびに Steven COLLINS (1993) の注 (pp. 362-363, #14.1) における *pappaṭaka* の語についての説明を参照。
- (59) バダーラター (*badālatā*) の語は、ブッダゴーサの註釈では *padālatā* の語形で伝えられている。しかしあえて *ba* を *pa* に修正する必要はないであろう。正量部は *vatālatā* と伝え、説一切有部は *vanalatā* と伝えているからである。その語義については、「一種の、甘美な味をもつ、*bhaddālatā*」(*Ṭikā* は *bhaddalatā* の語形を伝える) とブッダゴーサは説明する。ラサーとパッパタカが地から成る食物であったのに対し、バダーラターは明らかに植物と見なされている。現代人にとって地と植物は全く別物であるが、神話的思考においては植物は地に属し、植物は地が変化して出来たものと考えられているのであろう。なお、バダーラターはカランプカー (*kalambukā*) のように出現した、と本経に説かれているが、カランプカー (*kalambukā*) は、水草の一種らしいが (Ratnach, s.v. *kalambuā* / *kalam-*

buyā (kalambukā) “a kind of vegetation, growing in water”)、よくわからない。Steven COLLINS (1993) の注に (pp. 363-364, #14.3)、この語についてのまとまった考察がある。

(60) 米の収穫作業が、稲を「刈り取る」という作業になったのは栽培種になってからで、野生種の場合は、シード・ピーターといわれる竹箒を用いて、その中に野生イネを叩きつけて粒だけを集める。南インドでは野生種の稲からこうやって収穫しているという。しかしアッガンニャ経では、稲に対して *lāno* (切る、刈る) という表現を使っているから、恐らく日本の古代のように、石包丁で、稲首だけを刈り取るのであろう。日本でも奈良朝までは「穂刈り」であり、平安朝から「根刈り」になった。パールフット (紀元前2世紀頃) の彫刻にはウッタラ・クルの様子を描いた図がある (Alexander CUNNINGHAM: *The Stūpa of Bharhut*, London, 1879, Plate XL)。理想の世界ウッタラクルでは、稲が自然に生えて耕作の苦勞がないとされるから、アッガンニャ経の描く劫初の人間世界と状況が同じである。それを見ると、左から2番目に自然稲から米を採取している図がある。女が稲にかかんで、竹箒のようなものを自然稲の穂に近づけて採取している。この図には箒しか見えないが、箒の中に稲穂を入れて、それを石包丁で刈り取っているのであろう。「根刈り」をしていないことは確かである。古代インドにおける稲穂の採取はこのようなものであった。

(61) Steven COLLINS (1993) の注 (p. 366, #16.5) に、Phyllis GRANOFF 博士の意見として、土くれや牛糞や灰が結婚の儀礼において浄化のために使われることが、バラモン族の習俗として有ることが指摘されている。*Viṣṇudharmottara-Purāṇa* III, 100 v.1 がその典拠となる。

(62) 本文は *sālim āharanto* で、稲束を運ぶのか、稲粒 (米) を運ぶのか、どちらにでも訳せるが、私は後者をとって訳した (理由は注60を参照)。野生種の稲の場合は、稲が実る時期がまちまちであるから、収穫のために毎日でかけてゆかざるを得ない。栽培種の時代に移ってからも、野生種の稲の性質がしばらく残存していたであろうし、またその昔の時代の記憶が、このアッガンニャ神話が作られた時代に残っていたのではないか。「昔は毎日少しずつ収穫にいったのに、今日では一度に全部、無残な形で収穫してしまう」という後ろめたい気持ちが、古代インドで稲作の改良が広がった後に、人々の間にあったのではないか。野生種の稲の自然に近いあり方を破壊してしまった後のわずかな罪悪感が、この神話の根底に流れているように思われる。

(63) 本文は *paṇṇa-musalā* であるが、R. F. GOMBRIDGE の意見に従い、*paṇṇa* ではなく *panna* と読む。GOMBRIDGE (1992): “the Buddha’s Book of Genesis?”, *Indo-Iranian Journal*, 35, pp. 172-173.

(64) PTS 版本文の *vissuta* という語形が疑わしいことについては、O. FRANKE (1913), S. 283, T. W. Rhys DAVIDS & A. F. Rhys DAVIDS (1899-1921), III, p. 91, U. SCHNEIDER (1954), pp. 578-579, K. R. NORMAN (1990): *Collected Papers* I, pp. 256-258 などの意見の一致するところである。ただし S. COLLINS (1993), pp. 374-375 は *vissuta* の読みを採る。PTS 版本文の *vissuta* という語形には、*vissu*, *visu*, *visuṃ* という三つの異読が存することが脚注に報告されている (DN, III, 95)。註釈 *Sumaṃgalavīlāsini* は、次のように記する: *vissu*-(v.l. *visu*) *kammante payojesuṃ ti gopakamma*-(v.l. *gorakkha*)*vāṇija-*

kammādiḥe vissute uggate kammante payojesuṃ (871, 1-2). 「vissukammante payojesuṃ とは、牛飼いや商業などの、広く知られた (vissuta) すなわち名高い (uggata) 仕事に従事した [という意味である]」。この註釈文の中にある語 *vissuta* が聖典に逆流して、聖典においても *vissuta* の読みが生じたのであろう。しかし註釈者自身が、聖典本文にある語形 *vissu-* とその註釈としての語 *vissuta-* を区別している。私は PTS 版の聖典本文の *vissuta* を、異読に従い *vissu* (< Skt *viṣvak* or *viśva*) と読み、「あらゆるさまさまの」と訳した。正量部の伝承 MSK が、ヴァイシャ階級の成立を語る並行箇所、*viśva* 「すべての」という語を使っていることが、その判断の根拠になる。正量部のような上座部系の別の部派の読みの伝承は、上座部が部派分裂する前の時代の語形を推測する手がかりとなるから、パーリ文の校訂においても考慮されるべきである。パーリ上座部での本来の伝承は *vissu* か *vissa* だったのであろう。なお *Loka-p* の並行箇所は、次のような文になっている：*aññatare ca sattā pi sukammante payojesuṃ ti vessā ti yeva akkharaṃ nibbattaṃ*. この文を E. DENIS は次のように訳す：“Certains êtres se livrèrent à des professions honorables. C’est ainsi que prit naissance le mot *vessa*” (I, p. 180). 恐らくこの文の *sattā pi* は *sattā vi* の間違いであり、*sattā visu-kammante* と読むべきなのであろう。するとこの *Loka-p* の伝承は、*visu-* の語形を伝えるものであると考えられる。

- (65) 本文は *rasa-nāma pathavī* である。この形は奇妙であり、普通は *raso nāma pathavī* とは記すはずであるが、そう記されていない(二写本にも)。この *rasa-nāma* という奇妙な形がなぜ出来たかを推測すると、本来の伝承は *rasā nāma pathavī* であった可能性が考えられる。女性名詞 *rasā* を男性名詞 *rasa* に代える動きの中で、このような中途半端な複合語形が出てきたのであろう。*rasā pathavī* を *rasa-pathavī* という複合語形に直す動きがパーリ聖典のアッガンニャ経の伝承において起こったが、それと同じ現象である。アッガンニャ経の *rasa-pathavī* という複合語が *rasā pathavī* と読まれるべきであることについては、参考文献(11)の拙稿を参照されたい。しかしこの翻訳では、現存する写本が伝える形に出来るだけ忠実に訳してゆく方針なので、ラサをラサーと直さないで以下も訳してゆく。
- (66) 小乗仏教の古い伝承では、成・住・壊・空の順序ではなく、壊・空・成・住の順序で宇宙の展開を説いてゆくので、この成劫の二十劫に加えて、それ以前の壊劫と空劫の四十劫を計算に入れて、合計六十劫になる。
- (67) パーリ文アッガンニャ経では、パッパタカは単数形で表現される食物であるのに対して、*Loka-p* では、それは複数形で表現される(動詞が *pātur ahesuṃ* と複数形になる)。
- (68) この箇所では立世論は唐突に終わっている。
- (69) MSK 3.1.9 ab では次のように表現される：「女の特徴をもった人々を彼らは見て、「おお、こいつは墮落した者だ」と語った」(*strī-vyañjanaṃ jaṇaṃ te dṛṣṭvā duṣṭo batāyam ity āhuḥ* |)。また中阿含の婆羅婆堂経では次のように表現される：「若し彼の衆生男女の形を生ずれば、彼相見已りて便ち是語を作す、『悪衆生生ず、悪衆生生ず』と。婆私吒、悪衆生生ずとは、謂く婦人を説く也。」(若彼衆生生男女形者、彼相見已便作是語。悪衆生生、悪衆生生。婆私吒。悪衆生生者、謂説婦人也。大正 1, 675a26-27)
- (70) 『如意樹 [から生じた] 衣』(*kappadussāni*) については MSK 3.1.10 を参照。この『如

意樹 [から生じた] 衣』の出現の事件をアッガンニャ神話の中に組み込むのは、犢子正量部だけの伝承であるように思われる。

- (71) 「家(ゲーハ)を作った」という表現に、語源的な解釈を成り立たせるための何らかの言葉遊びが隠れていると思われる。もし *geha* (家) の言葉を *guhā* (隠れ場所) の言葉に代えてみるならば、「隠れ場所(グハー)を作ったので、こうして家(ゲーハ)という言葉が生じた」(**guhaṃ karimsū ti gehan ti akkharaṃ nibbattaṃ*) となる。
- (72) 両写本は *tuṇḍirakāni* であるが、この *tuṇḍiraka* (*tuṇḍilaka*) の語を、仏教梵語の *tuṇḍicela* と同じ語であると思なした。*tuṇḍicela* の語については、BHSD p.255 を参照。
- (73) 両写本の *kappā vajāyanti* を、**kappāsā jāyanti* と直して読む。なお、DENIS は *vajāyanti* を **vajjayanti* と直して読むが、その場合には、「すると、如意樹(カップ)は[人間を]見放した」(?) という意味になる。しかし、意味が変だし、しかもこの文の主語は、如意樹ではなく、綿であるべきなので、DENIS の読みを採らない。
- (74) 原語は *sammā* で、この語は梵語の *samyak* (正しく) に相応する。しかしここでは言葉遊びとして同音異義語を考えねばならず、私はこの俗語形 *sammā* は恐らく梵語の *samraj* (最高権力者) の語にも相応すると推測して、そのように訳してみた。
- (75) 本文 *taṃ ajjhāvasantaṃ ekaggataṃ* (その [林] 棲する者を、精神集中を) を、私は *taṃ ajjhāvasataṃ* (gen. pl. m.) *ekaggataṃ* ([林] 棲する者たちの、その精神集中を) と修正して読んだ。あるいは *taṃ ajjhāvāsaṃ taṃ ekaggataṃ* (その [林] 棲を、その精神集中を) と読むべきか。
- (76) この文には、ブラーフマナという言葉の語源の説明が欠けている。
- (77) 本文は *gāmā ti yeva akkharaṃ nibbattaṃ* で、*gāma* は「村」という言葉であるが、*gāmā* は複数形なので「住民たち」(pw “Bewohner, Leute”) と私は訳した。
- (78) 本文の *sattā pi sukammante* を *sattā visu-kammante* と修正して読む。なぜなら、この文はヴェッサ *vessa* (Skt *vaiśya*) という言葉の成立を疑似語源的に説明している内容のはずなのに、*sattā pi sukammante* では、*vessa* という言葉の成立を説明していないから、この文はおかしい。この文の *pi* は *vi* の間違いであろう。そうすればパーリのアッガンニャ経における異読 *visu-kammante* と一致することになる。この点について説明すると、パーリの PTS 版の本文では *vissuta-kammante* の読みが採用されているが、Otto FRANKE は、この *vissuta-* という読みを斥け、*visu-* という読みが正しいと見なす (S. 283, Anm. 6)。FRANKE によれば *visu-* は梵語の *viṣvak* (*viṣvañc*, *viṣu*) にあたる語であり、「あらゆる側に向けられた、さまざまな」という意味をもつ。U. SCHNEIDER (1954, S. 578-579) も、FRANKE に同意し、*visu-* あるいは *vissu-* の読みが正しいと見なす。また、FRANKE の訳を随所に参照している T. W. Rhys DAVIDS & A. F. Rhys DAVIDS (1899-1921) の英訳では、この箇所を **vissa-kammante* と読んでいる：“That they, adopting the married state, set on foot various [*vissa*] trades is, *Vāsetṭha*, the meaning of *vessā* (tradesfolk).” (p. 91). この箇所に脚注はなく、なぜ *vissa* と読んだのか説明はされていないが、Rhys DAVIDS 夫妻の訳は明らかに FRANKE の意見の延長線上で自分の見解を示したもので、テキストの異読の *vissu-* を採用しつつ、それを *vissa* (= skt.

- viśva) と修正したのであろう。vissu-, visu- の語はパーリにあまり用例がない形容詞であるため (ただし visuṃ は「個々に」individually という意味の副詞として使われる)、むしろ vissa という平凡な語の誤伝と見なしたのであろう。最近では K. R. NORMAN, *Collected Papers I*, pp. 256-258 は、vissuta の読みを斥けて、vissu- の読みを採用する。しかし彼はパーリ語の vissu を梵語の veśman にあたる語とみなす。vissu-kammanta で、“domestic tasks” という意味になる。
- (79) 以下、E. DENIS は仏訳をしていない。あまりに写本伝承が劣悪で、意味がとれない箇所が多々あるからである。しかし訳は必要なので誤訳を恐れず、とりあえず私の試訳を示す。
- (80) 写本は, caṇḍāhatam であって、何らかの訂正をしなければ意味が取れないが、恐らく caṇḍa-han か、caṇḍa-hantr (『チャングを殺す者』) の語が、この文の写本の綴りから読み取れる。
- (81) ニPPERVA はアルダマーガディー語辞典によれば、「えんどう豆」であるらしい。Ratnach, s.v. nippāva “pea; a kind of corn”.
- (82) 本文はひどく損なわれており、意味が通じるように文を回復することは困難であるが、たぶんこの文は元は次のような意味であったのではないかと私は推測する：「その時、胡麻の一握りを取る (ādāna) で、それは三つの (ti-) 汁の流れを (*rasa-dhārā) 出した (*mutta)。そこで、胡麻 (tila) という言葉が生じた」。この推測については、MSK の次の文を参照： ati-rasa-bhareṇa tisro dhārā *muṣṭi-grahe tilā mumucuḥ | 「甚だしい汁 (rasa-) の過剰により、掌で握られた時に三つの流れ[の汁]を胡麻は出した。」(MSK 3.4.3)
- (83) 本文 sahatthā va ti messattā (LP2 pessattā) ti を、sahatthā vat’ ime sattā ti と読んだ。
- (84) 本文には、「これらの牛たちは乳をもち」(imesaṃ gonaṃ kho khīraṃ) とあるが、牛 (go) という言葉が発生する前の時代の会話に牛という語が入っているのはおかしいから、imesaṃ の後の gonaṃ の語は写本に記入された筆写生の説明の語がいつの間に本文に入り込んだものとみなし、「牛たち」を削除すべきかもしれない：「これらの者たちは乳をもち、……」。
- (85) 本文の addaṃsu を adaṃsu と読む。
- (86) 本文の parisakammaṃ を parikammaṃ と読む。
- (87) 本文写本の読み yathā māsa を、yathā āsā と読む。
- (88) このカダンバカー (kadambakā-) という植物名は、或る樹木の名としてのカダンバ [カ] (kadamba [ka]) と、或る水草の名としてのカランブカー (kalambukā) とが、名前の類似しているために混同されて出来た名前のように思われる。
- (89) この文は梵文に欠けている。チベット訳から補って訳した。
- (90) 本文は paryavanaddhaḥ 「覆われていた」とあるが、否定辞を補って「覆われていなかった」と訳した。チベット訳の対応語句を見ると sun pa med pa 「皮が無い」という表現になっている。
- (91) 本文は paryavanaddhaḥ 「覆われていた」とあるが、否定辞を補って「覆われていなかった」と訳した。

- (92) 本文の kṣiti の語は「土地 [からの上がり]」という意味であろう。チベット訳では kṣiti を thog śas と訳しているが、「(地代・小作料としての) 収穫した作物の一部分」という意味である。漢訳破僧事ではこれを「六分の中其の一分」と訳し、六分の一税であることを記している。
- (93) 本文 rājavamṣe ādi を Sa 写本に従い、rājavamṣe sūtre と読む。
- (94) 「偉大な地は」の箇所を読みは、SENARTの用いた写本 B では kāyammayi mahāprthivī と、写本 C では kāyam api mahāprthivī と記されて、どちらも意味不明であるために、SENARTはそれを ayam api mahāprthivī と変えて読んだ。しかしそれも十分な満足を与える解決ではない。古い写本 Sa, Sb では kāyammapī mahāprthivī と記されている。この kāyammapī には、sā 'yam api と読む可能性や、svayam api と読む可能性も無いわけではないであろう。今のところ、この箇所の読みは未解決としておきたい。
- (95) この文は白衣金幢二婆羅門縁起経に (大正 1、218b24)、「彼時大地大水湧現」とあるのに対応する。
- (96) 写本 Sb により gandhasampannā の語を補う。
- (97) サルピス (sarpis) は、ダヒ (dadhi) の次の加工段階に出来る生バター (navanīta) がさらに加工されて出来る乳製品であり、ギー (ghṛta) と同じものであるように思われるが、西村によればそれは未だ文献学的に証明されていない。次の論文を参照：西村直子「Pāli 聖典における乳加工関連の定型句について」、『文化』、64巻1-2号、pp. 180-159.
- (98) 『地のラサ』の原語は、prthivīrasa であり、パーリ文が伝承する語 rasā pāthavī と名詞の性が違って男性名詞であり、しかも語順も違う。この語は『地の精髓』または『地の味』と訳せる。有部や大衆部説出世部は、古い伝承の女性名詞 rasā / lasā の代わりに男性名詞 rasa 「精髓、味」の語を用いる新しい解釈に基づいて、語順を prthivī-rasa と変えてしまい、彼らの解釈を正当化してしまったように思われる。この点については参考文献(11)の拙稿を参照。Mvu においては、この神話的な食物は最初に「偉大なる『地』 (mahāprthivī)」という女性名詞として出てくるが、その語はここの箇所から prthivīrasa という男性名詞に切り替わっている。mahāprthivī という奇妙な表現は本来の rasā prthivī という女性名詞の伝承につながる可能性があり、その痕跡であると考えられる。
- (99) 「自ら光を放つこと」 (svayamprabhatāye) という言葉は諸写本に見出せないが、本来あるべきなので、SENART のように補って読む。
- (100) この文は SENART の校訂テキストには無いが、私が補った。先の M14 の冒頭の文の、写本上は存在しない「自ら光を放つこと」 (svayamprabhatāye) の言葉の代わりに、丁度その位置に、最古の写本 Sa によれば、「比丘たちよ、このことはまた常法なのであるが、それらの生ける者たちの身体において自ら・・・(意味不明) また比丘たちよ、生ける者たちの中の女たちにも、女という [肉体的な] 性的特徴が知られていない」 (dharmatā khalu punar bhikṣavaḥ yaṃ teṣāṃ satvānāṃ kāye svayanteṣāṃ khalu punar bhikṣavaḥ satvānāṃ naiva strīnāṃ strīvyamjanāni prajñāyante /) という、不完全な文がある。この不完全な文をもし断片1と呼ぶと、この断片1のさらに数行後に (M14 と M15 の段落の間に)、写本には「・・・(意味不明) 男という性的特徴が。生ける者は『生ける者』と呼ば

れた」(sateḥ puruṣavyaṅjanāni atha khalu satva satva iti saṃjanayanti) という不完全な文がある。これを断片2と呼ぶならば、断片1と断片2は明らかに内容的に関係があり、本来は同じ文を構成する要素であったと考えられる。SENARTによって本文から削除されてしまったこの断片1と断片2は、パーリ文のテキスト(A5)にある「季節も年も知られなかった。男も女も知られなかった。生ける者は『生ける者』という名[だけ]を有した」の文や、梵文破僧事のテキスト(S8)にある「季節も年も、世界に[未だ]出現していなかった。女も知られなかったし、男も[知られなかった]。ただ生ける者は『生ける者』という名を有した」の文に近い。この男女の性的特徴(vyaṅjana)に関係する文は、Mvuでは後でM27にも出てくるが、断片1と断片2から成る文は、それとは全く別のものである。では、その本来存在したはずの文はこのMvuのテキストの中ではどこに位置するのか。パーリや有部の伝統ならば、M5の段落の末尾にこの文は来るのであろうが、しかし私は大衆部の伝統ではM14とM15の段落の間の位置にこの文が来るのではないかと推測する。その推測の根拠になるのは、大衆部の漢訳摩訶僧祇律(No. 1425)の次の文である(大正22, 239b16-c1):「佛告諸比丘。是達膩伽不但今日犯最初不與取。過去世時已曾最初犯不與取。諸比丘白佛言。已曾爾耶。佛言。如是。過去世時。此世界劫盡時。諸衆生生光音天上。世界還成。光音諸天來下世間。時諸天人行住虛空。以禪悅爲食。快樂善住所在遊行。身光相照不以日月爲明。爾時衆生無有晝夜日月。歲數時節。時水既去地味便生如天甘露。時有一貪味輕躁衆生。嘗此地味覺色香美味。心便貪著。其餘衆生效而食之。亦覺其美皆共取食。食已其身龜重。退失神通光明悉滅。世間便有日月昏明歲數時節。爾時衆生非男非女。食地味久形色並異。其食多者身色龜醜。其食少者身色端正。時端正者自言已勝。見龜醜者輕彼不如」。この中で、「爾時衆生非男非女」という文がある位置は、ちょうどこのMvuのテキストの中ではM14とM15の段落の間にあたる。これは写本においてもともと断片2が記されていた位置である。この位置に、断片1と断片2から再建された文を置くのが望ましい。校訂者のSENARTが上記の文を本文テキストから排除し抹殺してしまったのは、やりすぎである。この問題に関して、SENARTは次のように語っている(I, p. 616):「J'ai dû supprimer quelques lignes évidemment mal placées ici et incohérentes; on distingue mal la cause de leur interpolation. [...]」

(101) 原語 tamvarṇā は奇妙な表現であり、パーリ文にも対応語が存在せず、誤写か誤伝である可能性があるが、貝葉写本 Sa でも tamvarṇā と記されていて、変えられない。この表現を言葉どおりに訳せば「その色をもつ者たち」となる。私は「その[神話的食物の]色を[肌の色として]もつ者たち」と解釈して訳してみた。

(102) 校訂者 SENART の用いた写本 B と C では、この「マッシュルーム」(chatrakam) の語の読みが、vāḍakam となっていたが、SENART はそれを cchātrakam と訂正した。最古の写本 Sa を見ると katrakam と記されているが、この katrakam は chatrakam の誤りであろうと見当がつく。ka と cha の字はやや似ているので、写経生が間違えたのであろう。紙写本 Sb ではもっと悪く間違っただakam となっている。新しい写本 B と C ではさらに悪化して vāḍakam となってしまう。こうなるともはや元の語の面影はないが、しかしこの M17 の文は幸いにも M42 でもう一度繰り返されるため、SENART は M42 の文に基づい

て、この語を正しく復元できた。写本 B と C は M42 の箇所では正しく cchattrakam と記しているからである。その M42 の箇所では、写本 Sa は cchattrakam とあり、紙写本 Sb は chatrakam とある。

- (103) 写本 Sa により rasampanno の語を補う。
- (104) 難解な語 upanipate については、私は upanipāte と過去分詞に読む。馬鳴の *Bud-dhacarita* 2.54 の nipāta という過去分詞「遵守・遵奉された、従われた」を参考にした。
- (105) この箇所は貝葉写本 Sa では mahāraso aho raso ti 「偉大なラサは！ああ、ラサは！」とあり、紙写本 Sb でも mahāraso mahāraso ti 「偉大なラサは！偉大なラサは！」とあるが、前後の文脈から考えてこの嘆きの言葉は SENART の主張するように (I, p. 617) 確かにおかしいので、SENART の提案に従って、「ああ、ヴァディ！ああ、ヴァディ！」(aho vadi aho vadīti) と訂正して読むべきかもしれない。しかしここでは SENART の推測よりも写本伝承を重んじ、写本 Sa にあるように訳しておいた。この一見混乱した文の背後には、私たちが気づいていない別の真実が隠されているように思われるからである。
- (106) この箇所の嘆きの言葉は、SENART が用いた写本同様に Sa, Sb 写本も aho vadi aho vadīti と記す。
- (107) この嘆きの言葉については、SENART が用いた写本 B と C のように、古い写本 Sa, Sb も aho raso aho raso ti 「ああ、ラサは！ああ、ラサは！」と記している。SENART の提案に従って、aho vadi aho vadīti と直して読むべきかもしれないが、一応写本どおりに訳しておく。
- (108) 校訂本では satvān (acc.) paśyensu となっているが、Sa 写本では satvā (nom.) paśyensu である。
- (109) 写本 Sa に従い、leṣṭuṃ pi kṣipanti 「土の塊をも投げる」の後に、pāmsu kṣipanti 「砂を投げる」の語が本文に入るべきであり、そのように訳した。
- (110) Sa 写本は、SENART 校訂本の daivasam 「毎日」の箇所が単に sa と記されている。この sa を <daiva>sa<m> と補って読むべきかどうかの問題になるが、Sb 写本では daivasam と記されているため、それに従う。このように Sa 写本よりも良い読みを Sb 写本は示すことがある。Sb 写本は Sa 写本よりも誤りが多いが、しかし Sa 写本の子孫ではありえず、独自の価値をもつ。
- (111) 写本 Sa に従い、dāni 「今」を kriyamāṇam の前に入れる。
- (112) 写本 Sa, Sb によって次の文が SENART 校訂本に欠けていることがわかる。それは、写本 Sa によれば、so pi kālyam lūno so sāyam naiva jāto na pakvo na virūḍho avadānam cāsya prajñāyati. という文である。この文が本文に補われるべきであり、そのように訳した。
- (113) SENART 校訂本では māpayemaḥ 「私たちは測ろう」であるが、写本 Sa, Sb に従い、māpayensuḥ 「彼らは測った」と訂正する。
- (114) 校訂文では śalibhāgam 「(他に属する) 稲の分け前を(盗んだ)」であるが、写本 Sa に従い、śalibhāgam を śalim と訂正する。稲の分け前ではなく、稲を盗んだという方が良い意味となる。

- (115) 動詞 *āveṣṭitvā* (*āveṣṭitvā* Sa; *ādeṣṭitvā* Sb) の意味は、SENART が注に記すように (I, p. 620)、不明瞭であるが、摩訶僧祇律の同じ場面の記述に「是時打者投杖放地」(大正 22、240a10) とあるのに従い、「投げ捨てて」と訳した。
- (116) SENART は、C 写本の読み *deśaya vyaṃ*, B 写本の読み *deśata vyaṃ* を修正して、かなり強引に *deśaye cāyaṃ* と読んだ。しかし SENART は注において (I, p. 620) この他にも *deśeyyema vyaṃ* または *dadyāma vyaṃ* と読む可能性があることを提案している。写本 Sa, Sb を見るとどちらも *deśata vyaṃ* である。つまり *vyaṃ* を *cāyaṃ* と変える読みはそれらの写本にも支持されない。そこで私は SENART の提案した *deśeyyema vyaṃ* かその梵語形 *deśayema vyaṃ* 「私たちは命じよう、指示しよう」の読みをとりたい。
- (117) 「価する」(*arhati*, Sa, Sb) という動詞と、王 (*rājan*) という語はどうも結びつかないから、伝承に混乱があるのではないかと思われる。他部派の伝承では「喜ばせる」(*rañjayati*) という動詞で語源を説明する。
- (118) ここでテキストに明らかな欠損がある。SENART が注で (I, p. 621) 提案する読み方の一つに従い、*kṣatriyo* の語を補って読んだ。
- (119) ここで SENART 校訂本はローチャではなくラヴァ (*rava*) と読んでいるが、貝葉写本 Sa に従い、ローチャ (*roca*) と訂正した。破僧事の S 58 をも参照のこと。

参考文献

- (1) Kiyoshi OKANO (1998): *Sarvarakṣitas Mahāsaṃvartanīkathā. Ein Sanskrit-Kāvya über die Kosmologie der Sāṃmitīya-Schule des Hīnayāna-Buddhismus*, Tohoku-Indo-Tibetto-Kenkyūsho-Kankokai, Monograph Series I, Sendai.
- (2) E. DENIS (1977): *La Lokapaññatti et les idées cosmologiques du Bouddhisme ancien*, Lille, 2 vols.
- (3) T. W. Rhys DAVIDS and J. Estlin CARPENTER (1890-1911): *The Dīgha Nikāya*, Oxford University Press, London, 3 vols.
- (4) Raniero GNOLI (1977-1978): *The Gilgit manuscript of the Saṅghabhedavastu. Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, Istituto italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma, 2 vols.
- (5) Émile SENART (1882-1897): *Le Mahāvastu. Texte sanscrit, publié pour la première fois et accompagné d'introduction et d'un commentaire*, Paris, 3 vols.
- (6) Steven COLLINS (1993): "The Discourse on What is Primary (Aggañña-sutta). An Annotated Translation", *Journal of Indian Philosophy*, 21, pp. 301-393.
- (7) Otto FRANKE (1913): *Dīghanikāya. Das Buch der langen Texte des buddhistischen Kanons*, Göttingen / Leipzig.
- (8) T. W. Rhys DAVIDS & A. F. Rhys DAVIDS (1899-1921): *Dialogues of the Buddha*, The Pali Text Society, London. 3 vols.
- (9) Ulrich SCHNEIDER (1954): "Acht Etymologien aus dem Aggañña-Suttanta", in:

Asiatica (Weller-Festschrift), Leipzig, S. 575-583.

- (10) Akira YUYAMA (2001): *The Mahāvastu-Avadāna. In Old Palm-Leaf and Paper Manuscripts*, Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, The Toyo Bunko, Tokyo, 2 vols.
- (11) 岡野潔 (2004) : 「アッガンニャ経の神話的食物の名 lasā/ rasā/ rasa」, 『印度学仏教学研究』52巻2号, 2004年3月。

論文中に使用した略号 (例えば Ratnach) は, 次の BECHERT の書に従った。

Heinz BECHERT (Ed.) : *Abkürzungsverzeichnis zur buddhistischen Literatur in Indien und Südostasien*, Stuttgart, 1988.

(本稿は平成15年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) による成果の一部である)